

このマジエスティック
な狩人様に啓蒙を！

ややめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貴公は狩りに優れ、無慈悲で、血に酔っている。よい狩人だ

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

101 93 83 74 67 59 53 44 34 26 18 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

197 192 186 181 174 167 158 150 144 134 126 120 110

第 29 話

第 28 話

第 27 話

第 26 話

223 216 211 203

第1話

あなたは普通の人だ。

正確には普通の人間だった。

血の医療を求め、ヤーナムへと赴き輸血を受けたあなたは

なんやかんやで獣を狩ったり、人を狩ったり上位者を狩ったり、とにかく目につくものを片っ端から殺していたら

月の魔物を殺して上位者となった。

今や普通に上位者の幼年期を迎えた。

しかしながらあなたの姿はいつも通りの人間のそれである。

何故ならばあなたは狩人だからだ、人も獣も上位者もすべからくあなたの獲物である。

狩りを全うせよ、森羅万象ごとくこの血を求めろのだ。

さあ今日も張り切って冒険聖杯ダンジョンに潜ろうとして腐った内臓やらカビやらを用意していると突然共鳴する小さな鐘が鳴り始めた。

何と、別世界の「女神アクア」なるものがあなたを召喚したいらしい。

あなたは女神という別次元の存在を感じ取ったので、喜んで召喚されてあげた。

狩人は仲間思いなのだ、まあ助けた直後に殺試合もよくあることだが。

勿論、気に入らなかったらすぐに闇霊として入り直すつもりだ。

「こんにちは！あなたは残念なが…ってあなた生きてるじゃないですか！

…というか、何ですか…魔王なんかより遥かに禍々しい気配がします…」

事務機の向こうで女神が営業スマイルを引きつらせた。

女神、確かに人間としては容貌は優れているのだろうが星の娘に比べると何か物足りない。

所詮は啓蒙なき獣同然の人間の感性で“美しい”だろう。

それにしても敵はどこなのだ、早く殺させろとあなたは彼女に問いかける。

「いきなりアグレッシブな人ね…」

まあ説明しますけど」

ふむ、つまり彼女は女神で死んだ人間を天国か転生か異世界に送って魔王とやらと戦わせる役割を持っているらしい。

聞けば聞くほど“月の魔物”っぽいやり口だ、気に入らないな（やっぱ殺すか）

「いやいやいや！！初見でいきなり神殺しを実行しようとしなくてくださいよー！」

初見で殺しあいをしていないなんて…あなたは目の前の自称女神の頭のおかしさと常識

の無さにドン引きした。

「おかしいのはあなたです！」

まあ価値観は人それぞれだろう、腐臭がいいか冒険がいいかという違いみたいなものだ。

あなたは女神に気にしなくてもいいぞと言った、あなたは寛大なのだ。

「はあ……なんか納得いかないんですが……」

それで、何故死んでもいない方がここに？」

貴方は

1：勿論、「お前を殺す」ためだ

2：特に理由はない、説明してくれ

「とてつもなく不吉な選択肢が見えたような気がしますので安全のため説明させてください」

ふむ、要するにこの女神は魔王が暴れて人間が死にまくっているところに安全で平和な世界で死んだ人間を「ちーと」なる強力な武器やら能力を持たせて突っ込ませるというものらしい。

1回しか死ねない、しかも人を殺したこともない人間を魔王軍とやらにぶつける。

貴方の感想は、そんなのは狂っている。

うまく行くはずがないという真つ当なものだ。

狩人として大成するまでに4桁5桁死ぬのは当たり前だし、武器にも慣れていかねばならない。

血石の岩で強化し血晶もりもりの+10武器があっても初期ステ、コンティニュー一回、初見でヤーナムを全攻略しろとかなったら貴方も盛大にぶちぎれる事間違いないだ。

やっぱ異世界の神とか頭おかしい、皆殺しにしよう（提案

貴方はその人達に持たせたのもこんな武器かと聞いた

「えっ、これは…な、何でしょう…女神の私が一目見ただけで怖気を振るうほど不吉な気配がするんですが…完全に呪いの武器ですよこれ」

貴方が差し出したのは長年愛用しているノコギリ鉋だ。

凶悪な外見に違わず、+10強化の上で今まで人・獣・上位者を殺しまくった。

結果神聖な存在である女神からは吐き気を催すほどの暗黒のオーラや怨嗟の声を立てち上っているように見えるらしい。

ちなみに愛称は“ノコちゃん”だ。

無責任な神を斬ったらどうなるかな？ちなみに神（月の魔物）はバラバラになって死んだ。

「ごめんなさい！殺さないでください！私も仕事でやってるんです！」

女神とやらは土下座して命乞いしてきた。

まあいいと貴方は思った、所詮自分とは縁もゆかりもない人間がどれだけ死のうが関係のない話だ。

「怖っ！この人の思考論理怖すぎ！」

貴方はとりあえず冒流聖杯ダンジョンにも飽きてきたところなので、その魔王が暴れている異世界にとりあえず転送してくれと頼んだ。

魔王Ⅱ殴れるⅡ殺せるⅡなんか落とす

M a g i c !

貴方の高い啓蒙が裏付ける完璧な論理によつて魔王軍とやらを狩り尽くせば貴方の上位者としての存在は更に上にいく気がする。

それでも足りなかったら適当に獣や人を狩ればいいし

それでもうまくいかなかつたら神々を皆殺しにして遺志を奪い取ろう。

「とてつもなく恐ろしい思考が流れた気がしますが、怖いので何も言いません」
気にしないでくれ。

「はあ何でこんな人が…あつ！すいません！すいません！散弾銃向けないでください！」

貴方は女神に「ちーと」とやらをくれと請求した。

どうやらアイテムやカレル文字っぽいのがあつらしい。

「あーそれでしたらこちらになります」

武器に防具？

武器なら慣れたものがある、初見の獲物で戦えとかそれ死ぬわ。

防具？裸でなきや何でもいいだろ。

アイテムも自前のがあつ、ろくな物が無い。

舐めてんのか、じゃあお前の遺志を超越せ。

欲しいのは灯りだ、何と言つても狩人の夢に繋がらなければ話にならない。

大切な人形ちゃんを残して旅なんてそんな恐ろしいことはできない。

「えっ？でもそんな事…あ、出来るんですか…早く出てつてくれって？」

何やら虚空に向かつてブツブツ呟いている、危ない兆しだ獣になりかけているのか？

狩らなきや（使命感

女神によると狩人の夢はいわゆる貴方の意識と空間の合間にあるので異世界だろう

が問答無用で繋がるらしい。

というかあの空間自体が今や貴方の一部らしい。

「では…え、名前は狩人？はあもう何でもいいです。」

「それでは貴方に祝福があらん事を」

貴方は白い空間から転送された。

ちなみにわざと失敗したら地獄の底からでも這い出てすぐに殺しに戻るからなと警告しておいた。「本当にやりそうなのが怖い……」

貴方はやると言ったら殺るタイプの人間だ。

狩人が消えると女神アクアは机の上にドット突っ伏した

「つ……疲れた……あーやる気でねー」

何よ、また来たの……」

この気疲れが直後にとんでもない自体を巻き起こすがそれは別の話（カズマ

光が消えると貴方はヤーナムの青ざめた空でも夢の月夜の中でも無い青空の下の赤レンガの街並みに立っていた。

ヤーナムとは違って、道端に死体が転がっているわけでも住民が獣になりつつあるわけでもなさそうだ。

貴方は装備一式を確認した、黒い狩人の装束・そして散弾銃にノコギリ鉋。

狩人そのままの装備はずっと貴方の愛用品だ。

単に変えるのが面倒だったのもあるが。

すると貴方のポケットに紙と硬貨があった、

『転生者はまず冒険者ギルドで登録』

「どうやら」テンセイシャ」（貴方もそう扱われているらしい）は冒険者になるものらしい。

これはあれか、病院でまず一回試しに殺されるみたいなものか。

それにしても冒険者とは何だろうか？狩人のようなものか、あるいは処刑隊みたいなものか。

とりあえず何をするのかわからない貴方は大通りに出て歩き始めた。

ここは冒険者の街アクセル

という名前らしい、いわゆる冒険者になって日が浅い初心者が集まる街らしい。

ヤーナム市街地みたいなのだと貴方は理解した。

冒険者とはもっぱらモンスターを狩って生計を立てており、

指定モンスターや採取、捕獲、他にも緊急クエストなどがある。

彼らは人類の敵である獣（モンスター）に対処している。

そして獣の王をここでは魔王と呼ぶらしい。

獣の王：狩らなきや

そして狩人になるには冒険者ギルドに所属しなければならぬらしい。

面倒だとは思ったが、輸血に比べればずっと簡単でやりやすさう。

貴方は大通りを進んで冒険者ギルドの建物の前にやってきた。

建物の看板にギルドの紋章が焼き付けてあったのですぐにわかる。

なるほど、狩人っぽい装備のニンゲンがたくさん居る。

だが獣になりかけて居るやつは残念ながらいない。

それに見た所随分とプレートアーマーやレーザーアーマーなど重装備だが、貴方はあんな装備では獣の脅力の前では紙くず同然に切り裂かれてしまうと思った。

事実そうなのだろう、鎧も盾も無力なのが獣なのだから。

「いらっしやいませーお仕事のご案内なら奥のカウンターへ、お食事なら空いているお席へお座りください」

貴方は案内の女性に登録をしにきたと伝えた。

カウンターで1000エリスを払えば登録できると聞かされた貴方はポケットの硬貨を払い登録してもらうことにした。

「少々お待ちください」

受付の女性が戻ってくるのと書類とカードを持ってきた。

貴方は説明を受けた。

カードは身分証明書のようなものでクエストを受注したり

レベル・スキル・職業・ステータスなどを確認できるらしい。

半ば聞き流した、啓蒙高い貴方にとって狩以外は重要では無い。

カードがある、狩れる。OK？

貴方はレベルアップについても説明を受けた、どうやら獣を殺すと経験値なるものが溜まってレベルアップやらをするらしい。

遺志、お人形ちゃん。OK？

そして書類を受け取って自分の名前、身長、体重、年齢、身体的特徴などを求められた。

貴方は適当に書いた。

「お名前は…シヤスエール・ドウ・ジエヴォーダン（ジエヴォーダンの狩人）ですね」

貴方は昔話から適当に名前をでっち上げた、本名は貴方にももうわからない。

流石に名前が狩人では格好がつかない。

「ではこちらの水晶に手をかざしてください」

貴方が手をかざすと水晶が輝いてカードに文字を写していく。

便利なものだ。

受付嬢がステータスを見ると目を見開いた

「すごい！全ステータスがすごいことになってますよ！

特に身体面でのステータスがすごい！

これなら近接戦闘系のほとんどの職業につけます」
他の冒険者に配慮して控えめに話してくれた。

貴方は以前の街では狩人をしていたこと、もっぱらカラスや野豚、野犬などの害獣を狩って生計を立てていた狩人だったと話した。

「ああ、なるほど。ふふつ、ベテランでいらしたんですね。

それならほら、ぴったりの職業がありますよ」

職業に狩人という欄があつた。

成る程、確かに貴方にはこの職業以外は考えられないだろう。

それに嘘は言っていない、カラスも豚も犬もイかれた人喰いだつたが。

貴方は狩人という職業を選んだ、慣れたものだ。

受付嬢は以上で登録が終了したと説明してくれた。

貴方はヤーナムの金貨こそ腐る程持つて居るがエリスは持つていないので早速依頼を受けてお金を稼がなければならぬ。

「承りました、ジエヴオーダン様は狩人ということなのでこちらはいかがでしょうか？」

モンスターを狩るのが仕事らしい。

ジャイアントトードなるでかいカエルを三日で3匹狩ってきてくれという依頼だ。

三日以内に3匹以上倒せばよく、いくら狩っても構わないらしい。

更に狩った数によつては報酬が上乘せされる。

「ふふつ、無理はしなくて結構ですよ。野犬やイノシシとは訳が違いますから。

初心者の方はまずモンスターになれることが大切ですよ」

受付嬢は貴方が牧歌的な雰囲気です街で暴れる害獣を退治して居る風景を思い受け
ている。

確かにその通りなので、訂正はしない。

成る程、獣とモンスターは違うらしい。

貴方は打撃が効きづらいと聞いたが斬撃系のノコギリなら問題はないと判断した。

貴方はこの依頼を受けると伝えた。

「参加人数はいかがいたしますか？」

貴方は一人だと伝えた。

すると周りのニンゲンが忠告してくれた

「あんだ、初心者にソロは危険だぜ？」

冒険者になつて舞い上がつてるのはわかるけどよ」

「そうそう、時間はあるから他のパーティーと行動したほうがいいわよ」周りの冒険者
たちはソロは危険だと忠告してくれた。

成る程、ソロは確かに危険だろう。

才能はあるが、初日に無理なクエストを受けて死亡した冒険者の話は珍しくもない。だが、貴方は獣狩りは慣れているし決して無理はしない。

忠告はありがたいが、飛び道具（ガトリング砲）もあるし危ないと思ったら逃げるからと丁寧は断った。

「ではジェヴオーダー様のソロククエストですね。」

発注はしますが、決して無理をして死なないようにしてください」

貴方はカードを返してもらおうとカエルの生息域に向かった。

新しい獣を狩れると期待している。

貴方はカエルの生息域の草原にやってきた。

成る程、カエルがあちこちで盛っている。

貴方は狩人らしくまずは拳銃を構えて撃った。

13mm対獣拳銃フォルトゥナ（幸運）

貴方の血を混ぜた特製の水銀弾だが、射程距離は短く貴方の特性から威力も低い。

10mほど先のカエルにズドンという轟音と共に銃弾が発射されると瞬時に命中し体内に侵入

水銀の弾丸が内部で炸裂し大穴を開けるとカエルは即死した。

貴方はカエルの銃弾に対する弱さに驚いたが、いつまでも射撃武器だけに頼るわけに

はいかないと轟音に対して寄ってきた他のカエルに向けて間を詰める。

右手に持ったノコギリ鉋を振るうとカエルは縦に一撃で両断されて生き絶える。

成る程、初心者向けだ。

一撃で死ぬとは群衆よりも耐久度が低い。

だが厄介なのはやはり数だろう、血の匂いに誘われて激昂したカエルがあちこちから顔を出す。

地面の中からポコポコと姿を現したので貴方は一旦後退し、連中が集まったタイミン
グで火炎瓶を投げつけた。

火炎瓶は目標のカエルに命中すると飛び散った油が引火し他のカエルもこんがり
と焼き尽くす。

カエルだからか炎にはやはり弱いらしい。

炎を嫌ってカエルが分散したところを狙って貴方は発火ヤスリで炎を纏わせたノ
ギリを振るう。

カエルも炎を嫌うらしく舌での攻撃をあるいは焼き、あるいはステップで回避すると
次々と焼きカエルが出来上がる。

貴方が火を機にする必要はない、貴方についた火はカエルの血で鎮火すればいい。

貴方は血に酔った、狩の快樂だ。

しかしやはりカエルはカエル、貴方は物足りなかったがとりあえずは満足した。
…気づけばすでに夜明けてあたりは朝日に包まれている。

あたりにはカエルの死体が山積みとなっており芳しい焼けた肉の匂いすらする。地面は血でぬかるんでいる…ヤーンナムのように…

だが貴方は軽く酔ったが、カエルでは全く足りなかった。
やはり血は獣に限る。

飽きた貴方は街にカエルことにした。カエルだけに

「あら、お帰りなさいま……」

女性が入り口で貴方の姿を見て口を閉ざす。

今の貴方は返り血で上から下までくまなく血で彩られてる。

匂い立つな…

「お、おい！大丈夫なのかあんた！」

「ちよつと！怪我してるんじゃない？」

貴方は彼らにこれは返り血だから何の心配も無用だと伝えた。

「返り血って…落とさないよ」

「そ、そうか。まあ怪我がないのならいいけどさ」

貴方は服についた血を落としたので宿泊施設がないか聞いた。

だがそのためにはまずは先立つ物が必要だと冒険者カードで倒したカエルの報酬を受け取らなければならない。

灯火が今の所、当たらない以上は現地に拠点が必要だ。

冒険者カードに表示されたモンスターの数が表示されると受付嬢は驚いて叫んだ。
「えー、ジエヴオーダン様の討伐数は…320…

さーさんびやう!?!」

何と317も余計に狩ってしまったらしい。

凄まじい戦火に職員も居合わせた冒険者たちも騒然とする。

「さんって…嘘だろおい!?!」

「偽造じゃねえのか?」

「カードが偽造できるかよ、信じらんねえ…ベテランハンターってのは嘘じゃなかったんだな」

皆が驚いているが、貴方は気にしない。

ベテラン狩人と言ったからにはベテランであることを証明するのは当然のことだ。

貴方は報酬を催促するが、あまりにも大金のため現金で用意するのは時間がかかるらしい。

ならばととりあえず手付として現金は3万エリスほどで良い。

残りの代金は銀行口座に入れておいてくれと頼んだ。

確かにそんなに大金を持ち歩くことはないだろうから受付嬢も了承してくれた。

「ハハツまじかよ。こりやとんでもねえルーキーが入ったもんだな」

「あんたがルーキーだつて？嘘だろ!!え、前職が狩人？冒険者じゃない方の？それならまあ納得かな…」

「よう！あんた、よかつたら俺たちのパーティーにはいらねえか？」

冒険者たちが口々に賞賛、あるいは勧誘する中

「あの一、すいません。ちよつといいですか？」

貴方は黒髪黒目の冴えない少年に声をかけられた。

柱の向こうに隠れた見覚えのあるような少女がいる…

「すみません、お金かしていただけじゃないでしょうか…」

青い髪の女はどこかで見たような気がするが…？

第2話

「すみません、お金かしてくれませんか？」

あなたは目の前の奇妙な格好をした少年に金をせびられた。

貴方はどれくらい必要なかと尋ねると、

「はあ…冒険者登録に必要な20000なんですけど…」

あなたは何故、彼は冒険者になりたいのか聞いた。

別に生活の糧とするのなら無理に冒険者登録することもないだろうと正論を言った。

あなたは命をかけるリスクに比して報酬は日雇い労働程度では釣り合いに合わない
と忠告してやった。

「ええ、そりやまあそうですね…」

と冒険者になって英雄に！そして一攫千金となんて馬鹿なことは考えるもんじやない
いと常識を言うのと柱の後ろの少女が奇妙な少年を引つ張って言った。

「ちよつとカズマ！何言いくるめられてんのよ！」

「ふざけんな！そんなに金欲しけりやお前が頼め！」

「だってあいつ怖いんだもん！職場でいきなり武器持ち出すような奴よ！それにお淑や

かな婦女子に物乞いさせろつての!？」

何やらやいのやいのと騒いでいる。

若いとは素晴らしいことだな、と貴方は柄にもなく思った。

水色頭は見たような気がするが：気にしないでおこう、似たような人間などいくらでもいるではないか。

金がないのは辛いな、だが貴方は見返りもなしに遺志を渡すような間抜けではない、血が啓蒙かそれとも腐った内臓でも請求しようかとも思ったが

貴方はヤーナムに来たばかりのことを思い出した、あの時は何もわからずに輸血されると闘争本能のままにウエアウルフに殴りかかってしまった。

普段着で、そして素手で。

結果は返り討ちだったが、貴方はその後使者たちから武器を授かった。

その時のことを思い出せば、あの時に武器を恵んでもらわなかったら心折れる回数はおもつと増えていただろう。

貴方はガタと椅子から立って少年に2万エリスを渡してあげた。

「え？ いいんですか？ こんなに？」

貴方はかつては自分も少年のように訳もわからずに困っていたことがあった、なので助け合うのは当然だと言った。

「マジすか、いや本当にありがとうございます。」

ほら、アクアもお礼言つとけよ。めっちゃいい人じゃないか」

アクア、と聞いて貴方は不思議に思った。

それは自分をここへと送り込んだ上位者の名前であった。

あるいはゴース…あるいは…ゴスムのように単なる名前が似ているだけかもしれないが…

ちよつと水色頭を見る…名前も顔もよく似ている人間だ、実に匂い立つ…たまらぬ血の匂いで誘うじゃないかと思った。

そして思い出した、これはあの女神だと。

貴方は久しぶりだなとアクアに言った。

「知らない…知らない…人違いデース！私はアックア！知性と美貌の女神アクア様とは別人デース！」

「お前何言つてんだ…どうとうオツムの方もダメになったか

お前何してこの人を怒らせたんだ？」

なぜ彼女がここににいるかはわからないが、この少年も別世界へ呼んだのだろうと貴方は言った。

「え、つてことはあなたもこの女神に異世界転生させられたんですか？」

イセカイテンセイといものが何かはわからないが、確かにあなたはこの女神に呼ばれたと言った。あなたは少年に家（夢）で大切な人（人形）とゆつくりして、仕事（狩り）に行こうとしたら召喚（鐘の音）で気づいたらここにいたと言った。

「アクア！お前何やったんだ！思いつきり誘拐じゃねえかそれ！そりや誰だって怒るわ！」

「私は悪くないもん！だって生きてる人が来るとか想定外だったもん！」

あなたは別に怒ってはいないと言った。

「ほら見なさいよ！その人だって怒ってないって言ってるじゃないからセーフよ、セーフ」

今までにもつとひどい目にあつたこともある、人間を生贄に捧げるカルトに突然ボコられて袋に詰められて拉致された事もある。

それに比べればどうということはないと言ってあげた。

「おい！遠回しにめっちゃ怒ってるぞ！」

いや本当にすみません、こんな女神で…あとできつく言つときますので」

そもそも上位者ならば気まぐれや自分の勝手のために人間を使うなど普通に行つてやつたら後は何が起ころうと放つたらかしである。

あるいはゲールマンのように使い潰すかだ。

それに比べればアクアは少年の面倒を見ている分遙かに責任感があるのだろうかと思うのだが。

カズマというのは律儀で真面目な少年だ、ヤーナムにはいなかったタイプだ。

強いて挙げるならギルバート（故）だろうか。

つまりヤーナムに放り込んだら30秒で死ぬタイプだ。

あなたは少年に2万エリスを渡すと、登録費用の他に武器・防具・消耗品を揃えて狩に備えよと言った。

今はあなたが助言者なのだ、お望みなら二人を介錯してあげよう。

「やだ、この人ぐう聖常識人すぎ…?」

少年と少女は感謝しながら登録カウンターに向かっていった。

あなたも席を立った、予約してあるとりあえずの拠点である宿屋に行く予定だ。

…

上位者であるあなたにとって寝床などどこでもいい、そもそも夢と一体化したあなたは存在を薄れさせればいつでも狩人の夢に帰れる。

あるいは狩人の夢こそあなたの故郷なのか。

しかしいつまでも現実世界に拠点無しでは怪しまれてしまうし、面白くもない。

啓蒙低き連中に合わせねばならないのが、狩人の辛いところだ。

あなたは血を払うと狩人の格好のまま、宿屋にチェックインした。

「お客様に会いたいという方がおられますが」

すると宿屋の主人が貴方に訪問者がいると知らせてくれた。

見れば宿屋のレストランで鎧に身を包んだ女性が待つていた。

「お初にお目にかかる、私の名はダクネス」

ダクネス…もしかしてDarknessのつもりだろうか、貴方は典型的な啓蒙低き偽名に目を細めた。

「グウ…その目…間違いない！貴方こそ私の探していた人！」

貴方はこんな少女を知らないし求めてもいない、何の用事かと訪ねた。

「そ…その汚物を見るような目…くっうう！頼む！私を貴方のパーティーに加えてほしい！」

貴方は普段はパーティーなど組まない、だが囿があれば狩は楽になる。

少女には自分といると厳しい目にあったり、実力が足りないと死ぬかもしれないのでやめておいたほうが良いと忠告した。

もつばら敵の囿として攻撃を一身に受けてもらい、自分が攻撃を担当するので並の防御では耐えられない。

「ひ…ひどい目だと！いったいどんな目に会うというのだ!?頼む、教えてくれ！」

「貴方は自分の身の回りで起こった事を考えた…そうだな…たくさんありすぎて困るが…」

1 : ギルバートのことについて話す

2 : ガスコインについて話す

3 : アリアンヌについて話す

3 にしてみよう。女性でもあるし、貴方は娼婦のアリアンヌについて話した。

貴方に血を分け与え、文字通り血肉を捧げてくれたが遂にはオドンに孕まされて異形の子を産んで正気を失った。

ここまで狂った話をされればこの少女も引き下がるだろうと思つた。

「くっとう!? 純潔を捧げ娼婦のように尽くしたのにゴミのように捨てられて、挙句は陵辱異種姦の上に出産陵辱だ?! どこまで私を辱めれば気が済むんだ!」

そこまでは言っていない、随分と啓蒙が高まったなと思つた。

「頼む! 是非にも私をパーティーに加えてくれ!」

しつこい女性だ、なら試しに使ってみるのでそれでお互いに良ければ正式なパーティーを組むと言つた。

ところで彼女はもう誰かとパーティーを組んでいるのだろうか?

「ああ、既に一人…クリスという冒険者とパーティーを組んでいるが…」

それなら貴方よりも先に既にコンピを組んでいるクリスという人物に許しを得るのが筋というものだろうと言った。

三人で組むにしろ、ダクネスが離れるにしろ話を通さなければならぬだろうと言った。

「むうーた、確かに貴方のいう通りだ……わかった！クリスに話してからまた来る！では失礼する」

実にそそっかしい少女だ、啓蒙が足りないに違いない。

そうだ、狂人の叡智があるから今度これをプレゼントしてやろう。

貴方は彼女がメンバーになるのであればアメンドーズが見えるくらいにまで啓蒙を高めるべきだと思った。

あるいは血を受け入れさせて穢れた血族の伴侶にしてもいいかもしれない。

第3話

急募

且

狩人仲間募集

今や世界は汚物に満ち、塗れ、溢れかえっている…

素晴らしい世界なので存分に狩り殺しましょう

鐘を鳴らすので次元を超えて来てください

スキル

内臓攻撃 ガンパリイ 神秘 リゲイン 輸血など

彼方への呼び掛けまで使えます

啓蒙がガンガンたまるパーティー

鐘がなかったら揭示板まで

参加してくれた人には狂人の智慧と狂気の死血あげます

冒流聖杯儀式手伝います

アメンドーズに哀れな慈悲をかけてくれる人

同じく、期待の新人でもある女神アークアの募集とはえらい違いである。結果、張り紙を見た者は字が瞳にフレームインした瞬間に発狂した。

実に啓蒙高き上位者の貴方が書くと、もはやただの張り紙だと言うのにまるでネクロノミコンの書のごとき啓蒙力である。

ちよつとこの狩人の殺傷力高すぎじゃないですかね？

「あなたは張り紙貼るの禁止です」

目を包帯で覆つて掲示板の求人票を燃やす受付嬢に釘を刺されてしまった。

なんと、仲間を募集することさえ禁止されてしまったのだ。

ここであのダクネスという少女について考えてみよう。

彼女は防御に特化した職種でクルセイダーなるクラスらしい。

貴方のガンパリィからの内臓引っこ抜き攻撃の前には悪夢の巨人といえども一撃で

沈む。

カレル文字強化は伊達ではない。

しかしながら防御に関しては当たらなければどうということはないが、狩人であるため軽視しまくっている。

正直に言う狩衣装にしても殆どただの普段着ではないだろうか？

軽装と重装、考えてみるとなかなか悪い組み合わせではないのだろうか？

ダクネスが殴られている間に殺されきる前に貴方が背後からR2溜め攻撃からの内臓攻撃を喰らわせれば勝てる。

攻撃と防御にそれぞれ特化しているのなら案外良い関係になるだろう。

持ち運ぶ必要のない使い捨ての盾と考えれば良いのだろう。

そんなこんなで貴方は自分で求人票を書くことを禁止されてしまったので

仕方なく口頭で伝えた内容を受付嬢が書いて貼っている。

貴方は仕方なくテーブルに座った、これからやるべきことはあるがまずは拠点の作成だろう。

夢の中ではやはりイマイチ使い勝手が悪いので色々と持ち出すべきものがあるのだ。

すると銀髪の傷のある少女が向こう側のテーブル席に座る。

「君が噂の……あーその……求人票で人死を出しかけるってどんなのよ、それ……」

失敬な、ちよつと20人程発狂しかけただけではないか。

あの程度で発狂しかけるとはこの街の住人は耐性が低すぎるのでは？

深海を受領するのだ。

「私はクリス、このダクネスの友達ってところね。

ねえダクネス、やっぱやめといたほうが良いよ。」

「いやー止めないでくれ！例え親友の忠告といえども私が選ぶべき道はここにあるのだ

！」

パーティーを組みに来た女性とそれを止めに来た友人。

貴方は友人の忠告は聞いた方が良いと忠告した。

そしてダクネスに色々聞いていく

パリイはできるのか？ 腸をブチまけられるか？ 武器変形攻撃は？

など質問をぶつけていくが

「うっす、すまない！ 実は私ひどく不器用で攻撃を受け止めるしかできないのだ…」

貴方はパーティーを組む以上は最低でも小楯パリイかパリンクダガーからの致命攻撃が今のダクネスの狂人…ではなく強靱から必要だと説明した。

さもなければスタミナを削られてよろけからの致命攻撃で盾としてすら役立たずだと言った

「くううう！ 容赦無く私を役立たず扱いだとお!? 良い、すごおくい！」

頼む！ そこは分かっているがそこを曲げて使ってくれ！ なんなら夜の相手に貴方の性欲をぶちまける娼婦まがいでも構わない！」

「ちよっ！ ダクネス！ あなたねえ、いくらなんでも私の親友をビ●チ扱いは許せないわよ！」

勝負！ そう、私が勝負して勝ったらダクネスのパーティーの話は無し！」

娼婦？ああ、あのアリアナの話か：

あの女性の血は甘く、芳しかった。ダクネスも芳しい血の通う血の聖女にしたいと思っただが友達に反対らしい。

だがなぜあの話からそういう方向に持っていくのか。

実は：

「素晴らしい！私を娼婦と同じように扱って散々貢がせて用が無くなったなら異種姦凌辱の上に異形出産陵辱の挙句、下水道にゴミのようにポイするだなんてまさに鬼畜の極み！」

私の仲間に相応しい！」

「ちよつ!?ダクネス!?貴方何言ってるのぉ!させないわよ、絶対にダメだからね!」

という啓蒙が高い暴走をダクネスがクリスの前でしたらしい。

というわけで勝負することになってしまった。実に啓蒙低い展開だな。

「ルールは簡単、私がステイルのスキルで貴方のアイテムを一つ盗む。

それを1時間以内に貴方が取り戻せれば貴方の勝ち、私が逃げきれたら私の勝ち？

良いわね？」

それはそうと貴方が勝ったら、何をもらえるのだろうか？

出来ればクリスの血が欲しい。

するとなぜか絶叫を発してクリスが白目を剥いて倒れこむ

うねうねとヒモが倒れたクリスの上を這い回り、なんというか……その……触手陵辱っぱい

「お！おいクリス！な、なんという戦術だ！か弱い婦女子にこんな淫猥な物を握らせるなんて

おまけに触手陵辱とは！ああ、なんて羨ましい！」

ダクネスは喜んでいゝ。

よくわからないが、喜んでもらったのなら幸いだ。

今の所は無理にパーティーを組む必要はないしクリスもこう言っている。

この勝負はクリスの勝ちでいいと伝えておいてくれと貴方はダクネスに伝えた、

それとその生きているヒモは記念にあげるから可愛がって欲しい。

「か、可愛がられる！触手に可愛がってもらえるなんて……クリス……返す返すなんて羨ましい！」

喜んでもらったようだ。

第4話

結局貴方はパーティーを編成することに失敗してしまった。

構わない、どうせ鐘を鳴らせば誰かテキストに来るだろう。

ついでに血に飢えた侵入者も来てこの世界が終わるかもしれない。

ちなみに血に狂った狩人達はどいつもこいつも魔王より強いマジキチ狂人の模様。

狩人様が鐘を鳴らさなくて良かった良かった。

そんな貴方がギルドで何をしようかと椅子に座って待っている。

この前討伐したエンシェント・ドラゴンの銀行振込手続きが終わればまたクエストを受けてもいいかもしれない。

ドラゴンという事で狩りに期待していたが、あっさりと狩れたので貴方は再び聖杯デブ狩マラソンよろしくアクセルクエスト片っ端受注マラソンに精を出している。

血晶石がでないのが辛いのが狩という行為そのものを嗜むのが狩人だ。

貴方は難易度の高い狩のクエストから受けていく。

一撃熊の群れとそのネームドボス。

王都から派遣された上級職の冒険者パーティーすら皆殺しにする強力な群れ。白狼の群れとそのリーダー。

素晴らしいじゃないか、まさに獣狩りのクエストというわけだ。

距離が近ければ効率化のためにでにマンティコアとバジリスクを同時に討伐することも辞さない。

貴方が難度が高い方のクエストを順番に3、4枚持つていくと

受付嬢のルナ嬢は何故か疲れた顔をして受理している、鎮静剤が必要だろう。

「貴方ねえ…幾ら何でもこれって初級冒険者が受けていいクエストじゃありませんよ」

随分な言い草である、だが誰でもいつかは初級から中級にランクアップしていくものだろう。

「貴方が噂のマジキチ狩人ですね！」

椅子に座ってどれから狩ろうかと考えていると黒い髪に紅い目の幼女が貴方を指差してきた。

「我が名はめぐみん！誇り高き紅魔一族随一のアークウイザードにして爆裂魔法の使い手！

アクセルの街随一の狩人、シヤスエール・ドウ・ジェウオーダーよ！我と共に世に名を知らしめようではないか！」

要約するとパーティーを組んで欲しいらしい。

まあいいかと貴方は安請け合いました。

アークウイザードなら多分今の依頼でも余裕だろう。

貴方はとりあえず一撃熊の討伐クエストに行くということをめぐみに伝えた。

するとそれまでのテンションはどこへやら、青褪めた顔色になる

「えっ？マジでこれ受けちゃうんですか…」

すいません、私まだ駆け出しなんでもう少しマイルドな依頼にしてくださいと助かる

なーなんて」

そういつて彼女が持ってきたのはまたジャイアントトードの討伐依頼だ。

貴方はそれは初日に定数の60倍以上を討伐して飽きたと言った。

今は最低でも一撃熊、巨大狼、あるいはドラゴンの群れだ。

これでも生ぬるい、さあ聖杯マラソンの時間だと言いたいのが正直飽きた。

かつてはワンパンで殺されていた旧主の番犬狩りも慣れて来ると最早ルーチーン

ワーク。

啓蒙の高い貴方としては種類も攻撃パターンも様々なドラゴン、グリズリー、狼と

いった獣らしい獲物との遭遇を渴望した。

「あら、貴方…絶対止めといたほうがいいわよ。

紅魔族のウィザードさん、このぶつちぎりでイカれた狩人さんとパーティーを組もうなんていくら紅魔族でもそこまでイかれて無いでしょ？

止めときなさい、貴方絶対死ぬわ」

貴公：ルナ嬢よ、それは無いんじゃないだろうか？

別に異世界のレイヴンや王達の化身に挑むわけではないのだから。

彼らは確かに強い、今のままでは本気を出しても勝率は1%にも満たないだろう。

だがいつかは彼らと決着をつけるつもりだ、その際にこの世界をリングに使わせてもらいたい。

ちなみに頭のおかしいフロム主人公達同士が本気で激突すると人も魔物も異世界も滅びる。

「…あ、すいません。やっぱ私はもつと身の丈に合ったパーティーを探します。

ふふふ、だがますます気に入ったぞジェヴオーダーよ！

我が真の力を解放した暁には、再び共に戦おうではないか！」

まあ頑張ってくれ。

貴方は再びまたもやパーティーを組むことに失敗した。

おかしい、以前なら血に狂った狩人に集まれと鐘を鳴らせば湧いて出てきたのに。もしかしたら場所が悪いのかもしれない。

血塗れの場所や腐臭放つ場所など、世にも悍ましい場所では友達ができやすいという法則がある。貴方はやはり分かりやすい不吉な場所といえは墓場だと考えたので夜になつたら行つてみようと思つた。

薄暗くてジメジメした、ナメクジがいそうな場所にこそ狂気と紙一重の啓蒙がある。そんな訳で貴方は夜になる前に手早く山向こうのマンティコアを退治することに決めた。

目にも留まらぬ素早さで杖を鞭へと変形させ、マンティコアの頭部に亀裂を入れる。獲物は貴方を牙や爪で引き裂こうとするが、力任せの攻撃など貴方にとっては最初の聖職者の獣で慣れている。

さらにはいえば、マンティコアは確かに速いものの力も速さも良く観察すれば獣より遙かに劣る。

見るべき点は体力とタフさ、だが致命攻撃の前ではそのタフさも意味を持たない。狩人はまずは観ることを生業とし、勝利への方程式を組み立てたならば後は計算通りの狩の仕事をごなすだけである。

頭部への攻撃で怯んだマンティコアに素早く近づいた貴方はそこに必殺の一撃である致命攻撃を加える。

頭部から頭蓋骨を貫通しての貴方の内臓攻撃で脳幹への直接攻撃、タフさに定評のあ

るマンティコアといえど脳を破壊されれば即死である。

貴方はマンティコアの体を切り裂いて血腥い内臓を腑分けしていく、強力なモンスターは内臓、骨、肉、革と行ったパーツが極めて有用性が高いために高く売れるが

貴方が特に見るべきは強靱なこの獣の内部構造であろう。

医師のごとき解体で貴方は啓蒙がまたしても上がった、更にその尾からは狩に使えるやもしれない毒を抽出できそうだ。

貴方は獲物を木箱に収納すると近くの洞窟の灯りから再びアクセルの街の灯りで目覚める。

「ああ、もう帰ってきたんですか…日帰りでマンティコア討伐ですかーすごいですねー」
貴方は受付のルナ嬢にクエストのマンティコア狩が終わったことを報告した。

「おかしいですねえ…王都の神器持ちの上級職パーティーが全滅させられたクエストですよ、これ」

ふむ、確かにマンティコアの毒は常人なら食らえば数秒で死に至る猛毒だった。

食い散らかされた死骸から見てヒーラーがまずやられて、そこから陣形が崩れたというところだろう。

どちらにせよ、パーティーを組んだことがない貴方にとって陣形など意味がないが。

貴方はマンティコアの毒を武器に塗布したり銃弾に混ぜる機材が必要になった。

流石の上位者である貴方といえども狩に道具は必要だし、道具を調整したり製作するのには現状の設備では不十分である。

狩人の夢の設備は確かに充分だが、あれらはあくまでも古き狩人達から受け継がれたものであり

新たな境地を目指す貴方は自らが作り上げる隠れ家、あるいは工房を必要としている。

獣との違い、常に進歩し続けるのも狩人の責務であろう。

：貴方はアクセルの街の中に狩工房を構えることを決意した。

幸いにして今までのクエストで狩った獲物の賞金やそれから作り出した薬剤、素材そのものの代金として手持ち資金は充分にある。

問題は場所だが、実を言うと貴方は王都から拠点を移すように打診されていた。

しかし、貴方はすでに気づいていたのだが魔王軍とは結局のところ少し種族が違うだけで結局は貴方から見れば人ではない。

上位者である貴方から見れば啓蒙の無さと言う点では神も人も魔物も等しく啓蒙なきものである。

それならば魔王軍相手の兵士ではなく獣を狩ると狩人本来の務めに戻るべきだ。

更にいえば灯りさえあれば貴方は擬似的にレポートが可能である。

ゆえに立地はどこでも良い、まるでインターネットの時代だ。

それならばアクセルの街で良いだろう、土地代も安く済む。

貴方は商店街にやってきた、不動産屋の情報をざつと見たところ大ききといひ古きといひ街の中心部でありながらまるで青の秘薬を飲んだ貴方のようにひっそりと佇む程よい大ききの庭付きの家を見つけた。

少し荒れているが墓場のすぐ隣という啓蒙高い素晴らしい立地だ、狩人の隠れ家これほど相応しい物件はあるだろうか？ いや、ない。

狩人の隠れ家つてのはね、ひっそりと佇しくて寂しくて忘れられた墓場で静かに虚しく暖炉の火が燃えてる：そういう場所じゃ無きやいけないんだよ。

葬送の花を植えてやれば実に侘しく美しくそして儂い夢のような住まいになるだろう。

更に良いことにここは貴方が秘薬の製作を依頼した女性の店に近い。

貴方は既に啓蒙高い上位者でありながら物を作るのは苦手なのだ、使者ちゃん達からもつぱら買うだけ。

不器用なのだろうか？

啓蒙を高めても苦手なことはある。

「あら、いらつしやいませ！ 今お茶出しますね」

貴方はウイズの店にやってきた、彼女が人でありながら人ならざる者。

貴方は墓場で汚物にまみれ呪いを孕んだ遺体でもないかと墓を探っていたところ、ウイズがリッチであることを貴方は偶然知った。

墓場で死者達の魂を天界へと帰していた彼女に霊を片っ端から狩って遺志を剥ぎ取り更に墓荒らしをしようとしたら怒られた。当たり前だ

「いけません！死者の魂を冒瀆するような事なんて、いくらアイテムに必要なだからってやっていいことと悪いことがあります！」

他人の臓器を勝手に盗むのは駄目らしい。

貴方は全くもって正論の彼女の話に説得され、それなら自分のアイテム製作を手伝って欲しいと頼んだ。

「ええーだって…私リッチですけど…いい、いいんですか？」

不死者程度で何を気にしているのか、そもそも本当の不死者とは殺されても絶対に死なないやつらのような存在だろうに。

死者の王とは大した呼び名だが、貴方達からすれば赤ん坊に毛が生えた程度の幼年者に過ぎない。

「ふふ、おかしな人ですね…え？貴方が…ああ、やっぱり。

私のところにも噂は届いてますよ、なんていうか…とつても個性的な新人狩人だつ

て

個性的（啓蒙99）間違っていない

第5話

貴方が墓場近くの家を改装し、人形を手入れしている。

その人形へ込められた思いは偏執にも似ているが、貴方にとっては長年連れ添った大切なパートナーだ。

母でもあり、恋人でもあり、また同時に娘でもある。

「狩人様、再び長い獣狩りの夜が始まります」

獣、それは単純な形の問題ではない。

獣性を狩り克服する、これこそが今の貴方にとっての獣狩りだ。

穢らわしい虫を潰し…潰し…

潰し…

潰し…

潰し…

潰し…

潰し…

潰し…

潰し尽くす、それこそが狩り

『しつてるかい？人は皆、獣なんだぜ』

偶然かあるいは獣へと成り果てたためか、啓蒙無きあの男は獣でありながら真理をいついていた。

人が人である限り、獣を狩り尽くす事など出来ない。

貴方に課せられた獣狩りは貴方が幼年期を迎えてようやく真に始まる物でしかないのだ。

とはいえ、さしあたっては獣性を求めて獣を貴方は狩始めよう。

手始めに近場のドラゴンを狩った貴方は簡単に年収1000万エリスを達成できそうだったが

この獣同然の王が支配する国は1000万以上の年収があるものは5割以上を国に税金として納めよという啓蒙低い政策のために貴方はギルドでのクエストを一時中断し自宅の改装に精を出している。

墓場の近くに居を構える頭のおかしい狩人の噂はギルドでも評判だ。

この啓蒙低い異世界では狩人は弓矢や罠といった装備で戦うのが常識らしいが

啓蒙高い貴方は接近戦からのパリティで内臓攻撃でどこでも構わず腸をぶちまけるといふ常識的な狩り方をしている。

弓矢でどうやって内臓攻撃をするというのか、謎である。

だがシモンの例もあるので狩人が弓矢を使うのも稀にだがあるのかもしれない。

どうやらニホンジンの

狩人の夢のごとく美しい墓地に花がそよぐ場所にしたく思い

貴方が夜に手向けの百合を墓場に植えているとウイズがやってきた。

「こんばんは、また今夜もお願います」

貴方は墓地の近くに居を構えたのはいいが、問題が発生した。

それが野良ゾンビだ、今の貴方ならゾンビ（Lv1）どころか8週目以降の再誕者（Lv800）でもノーダメージインスタント麺が出来るまでに狩れるので問題はないが拠点の近くに毎晩湧かれるのは面倒だ。

そして肝心なことに本気で狩ると折角の風情がある墓場そのものを木っ端微塵にして台無しにしてしまう。

そこでウイズに毎晩来てもらっては、報酬を支払って墓地のアンデッドの浄化を依頼している。

この家が安かった理由は毎晩のように隣接する土地でアンデッドが発生するからだという。

だがまだ日が完全に落ちきるまでは間があるので貴方はウイズにお茶を出した。

「わあ、これ薔薇茶ですよ。いいんですか？報酬ならもらってるのにこないいいお茶まで出してもらって」

貴方は別に構わない、そもそも1000万以上を既に報酬として貰った以上経費として沢山使わないと税金として取られてしまう。

貴方は獲物から得た資金を溜め込む趣味はない、遺志はこまめにレベルアップに使わないと死んだ時のダメージが大きいのだ。

そこでお茶を嗜みながら貴方は掲示板に張り出されたすぐその墓地にゾンビメーカーが出没するので退治してほしいという依頼についてウイズに話した。

ウイズが毎晩浄化しているのだから出現するとは思えないのだが、何か心当たりはあるかと

ゾンビメーカーは死体に憑依する悪霊で、他の死体を手下として操ることができる。難易度的には低く、初心者にも手頃な相手だ。

そんなゾンビメーカーが貴方の家のすぐその墓地に出現しているらしい。「えつとですねえ、それ私だと思えます。」

私が墓地に来ると魔力に反応して死体が狩つてに動き出してしまうんですけどそれが勘違いされてるんだと思うんです」

どうやら毎晩彼女に浄化を依頼したのがまずかつたらしい。

もっとも、彼女はそれまでも無償でやっていたので結局勘違いされることは遅かれ早かれ避けられなかったろうが。

「本来ならプリーストさんがやるべき仕事なんですけど、

この街のプリーストさんってみんなお金にガメ：

お金がない人の墓場は浄化してくれなくて」

死者の魂を放置しておくことはノーライフキングとも言われるリッチのウイズにとつては出来ないことらしい。

貴方ならカインハースト城の亡霊たちのように問答無用で狩り尽くすだろう。

「ダメですからね？墓地の魂相手に貴方の武器で斬りかかっちゃ絶対にダメですからね」

ウイズによれば貴方の武器は魔王の加護すら問題にならないレベルの悍ましい加護がかかっているらしい。

まさに悍ましい魂抉りと呼ぶにふさわしい武器ぞろいである。

そういえば、あの依頼は貴方が夜に一撃熊を狩って朝に帰ってきた時には無くなっていた。

ルナ嬢によれば受注したのはサトーカーズマという奇妙な名前の少年のパーティーらしい。

とはいえ、彼らにウイズを討伐できるとは思えないしされると困る。

ゾンビメーカーはウイズが退治したと適当にごまかして彼らには獲物を横取りして悪かったと

金をやって納得してもらおうと考えた。

夕刻

家の中で彼らが来るのをあなたは武器を手入れしながら、ウイズは料理をしながら待っている

かづうま少年とやらのパーティーが近づいて来るのをあなたは感じた。

「4人パーティーで3人が上級職ってかなりのエリートですよね」

あのダクネスとめぐみんもあのパーティーに加わったらしい。

「なになに？こんな墓場の近くに家を構えるとか何考えてんの？この住人は？」

馬鹿なの？頭おかしいの？プークスクス」

「おい、駄女神…どう考えても馬小屋よりはマシだろ…それに住んでる人が聞いたら怒るぞ」

遠くでそつと行っているつもりらしいがまる聞こえである。

あなたとウイズが出て行くと自称女神とその一行が顔を青くした。

「あああああーっ!!」

「おい、どうした駄女神…あ、ジェヴォーダンさん。え、もしかしてこの家ってあなたの家でした?」

そうであるが、驚いたのはそれだけではないようだ。

「リッチーよカズマ! リッチーがこんなところに現れるとは不屈きな! 成敗してやるっ!!」

女神アクアが走り出して戦闘態勢に入る。

「何言ってるんだこの駄女神は…俺には親切な狩人さんとお前に怯えるお姉さんにしか見えないうぞ」

「いい? アンタは知らなかったのかもしいけど後ろのそいつはリッチーなの。汚らわしいアンデッドなの。私が墓地ごと浄化してやるんだから」

女神アクアが息を巻いている。

しかし、ウイズには敵対する意識は無い。

神々という上位者とアンデッドという上位者が敵対関係にあるのは知っているが個人同士で敵対するのはやめてもらいたい。

ましてやここは貴方の家だし、ウイズには大切な役割がある。

それでもやるのかと貴方は聞いた。

「当然！アンデッドは存在そのものが罪なのよ！自然の摂理に反しているのよ！」

啓蒙低い答えが返ってきた。

貴方はどうしてもやる気なら自分が彼女の側につく、アンデッドのゾンビメーカーは自分が退治したということにするから獲物を横取りした賠償として金を払おう。

それでも納得できないなら相手をすると言った。

「おい……この駄女神！何わざわざ喧嘩売ってるんだ！」

すみません……こいつ頭が致命的におかしくって……本気にしないでください」

「ちよーアクア！あのマジキチ狩人相手になんて事言ってるんですか！」

格上相手に喧嘩売るなんて正気ですか!?

私死にたく無いんですけどー！爆裂魔法を極めずに死ぬなんて嫌ですから！」

平坦な幼女と少年が必死に青い髪を止めようとしているが、見かけによらず力が強いのかすぐ振りはられる。

「私は構わないぞー！ああ、むしろあのDS狩人に一方的にやられて手籠めにされたいくらいなのだが！」

啓蒙が少し高い騎士は剣を構えてはあはあ言っている。

強敵に進んで立ち向かう姿勢は賞賛されるべきだが、逃げを知らないのでは炎に飛び

込む蛾のようなものだ。

「ほーら2対2で決まりよ決まり！」

というわけでーあの極悪アンデッドのリッチと頭のおかしい狩人を浄化してやるんだから！」

なるほど…貴公らも何かに吞まれたか…

まあいい、そういう者達を始末するのも狩人の務めだ…

貴方は武器を構えて4人組との戦闘態勢に入った。

ガキンという音とともにノコギリ鉋が変形し肉も骨も削り切る武器が姿を表す。

それは鉋というにはあまりにも大きすぎた

大きく 分厚く 重く そして大雑把過ぎた

それは正に鉄塊だった。

『狩人の狩りを知るがいい』

第6話

「おらあー！」

「ぐべエー！」

勢いよく女神アクアの後ろから全力でタツクルをかますカズマ少年。

勢いで二人とも地面に押し付けられる。

アクアは顔から地面に倒れ込み体中が泥まみれになる。

「本気でアホかテメエは！手のこんだ自殺に俺たち全員を巻き込むじゃねえ！すみません！すみません！ウチのバカがどうしようもないバカで本当にすみません！何もしなくてお金くれるって言うてるんだぞ！この駄女神！」

蒼ざめた顔の少年が膝と頭を地面につけて平伏する。

東方に伝わる最大限の謝罪の姿勢、それはドウゲエザアと呼ばれる姿勢であった。

貴方は啓蒙低き血に興味はない、殺人のゴタゴタでこの街での活動に支障が出る場合も考えれば彼らを殺すメリツトは薄い。

「わ、私からも本気でマジで真剣にお願いします。

お金もらえるなら私は見なかったことにしますんで」

幼女はずっと後ろの木陰から半身だけを晒している。

「アクア：確かにアクア教徒としてアンデッドがアクシスの街にいたというのにシヨックを受けるのもわかる。

だがエリス教徒の私としても思うところはあがあるが、ここはやはり他人にかける迷惑だとか命だとかそういう事を考えてほしい…」

貴方としてもアクセルの街を壊滅させるのは貴方の本意ではない。

「そうだ！ダクネス！いつもは変態だがたまにはいい事言うじゃないか！ウイズ様も人には迷惑かけないから、見逃してあげてって思ってたらっしやるんだから！うん、そうだ！なかった事にしよう！そうしよう！」

「くふう！こんな時まで私をそのように見るとは、なんて卑しい男と組んでいるんだ私
は！」

「わ、私としてはいくら何でもやりすぎだと思えますよ…」

ね、ジェヴォーダンさん。皆さんもこう仰られてるしまずは武器をしまってください
い」

ウイズは相手の命乞いを始めると貴方も本人がこう言っている以上はどうしようもない。

あとは残り1名の頭のおかしい啓蒙低い自称女神の問題だ。

5人の視線がじーっとアクアに注がれる。

「な…何よー！なんで私が悪いーみたいな空気になってんですかー！」

アンデッド死すべし、慈悲はないのが常識でしょー！」

別に悪くはない、だが良いからといって死なない理由はない。

善悪と生死は全く関係ないと貴方は言った。

「改めて問うが貴女にアクセルの街で悪事を行おうと言う意思はないのだな？」

それは自分が保証すると貴方はウイズの悪意の無さをダクネスの問いかけに対して保証した。

貴方の前の街での常識に従えば貴方は常識的で良識のある一般市民だしウイズは聖女である、前の街（ヤーナム）の常識と今の世界は少々違うがほぼ問題は無い…気がする。

「貴方の常識というのが少々不安なのだが…まあアクア、一応アクセルの街のエースもこう言っているしこれで不安も解消されらう！」

それより本題の墓地の浄化をどうするか考えねば！」

ダクネスは依頼にかこつけてごまかした。

やはりこのパーティーで最も啓蒙が高いのはダクネスかもしれない。

貴方はアークプリーストのアクアが「真面目」に墓地を浄化するのならば金を払うと言った。

やはり世の中の問題は金で解決するのが一番だ、と貴方の高い啓蒙は答えを導き出した。

もちろんこれには口止め料も含んでいる、と貴方は警告した。

「ぶ…わかつたわよ。その代わり、色つけてよね！

この女神アクア様直々の浄化なんだから！」

もうアンデッド絶浄精神はどこかに行ったらしい。

貴方はこの啓蒙低き女神を哀れんだ。

貴方の保証、そして他の仲間3人の説得により和解？した。

いまだにアクアはウイズを睨みつけているが貴方が釘を刺したので大丈夫だろう。

貴方は4人組に墓地の浄化を頼むとお茶を楽しむために家に戻った。

「す、すみません。私のためにアクアさん達の仲間とも仲違いしてしまつて…」

別に気にすることは無い、結局殺し合うことはなかったし

貴方はもっと親しくなつた者達ともしよつちゆう殺し合いに発展することは良く

あつた。

多くの狩人が血に酔つて結局貴方に狩られた事を思えばウイズの存在は貴重である。

だが詳しく話す気はない貴方は気にする必要はない、ウィズは必要だからだと言って
おいた。

「ひ…必要…そんな…ふふふ…そっかあ、私必要とされてるんだあ…」

一方墓地でアンデッド浄化に精を出す4人組は

「つつたく！何なのよあのマジキチ狩人はあ！」

よりよってアンデッドを庇っちゃうわけ！何で私が怒られなきやいけないのお！」

「そりやお前が恋人を殺そうとするからだろ、普通あの人に喧嘩売ろうとするか？殺さ
れないだけありがたいと思え、金まで貰ったし」

「リッチー相手に戦うだけで無理ゲーなのに、あの狩人まで敵に回そうとか…アクア、そ
ういう強敵を求める展開は紅魔族の妄想の中だけで十分ですから…っていうかあの人
は本当に恋人なんですか？」

リッチーの恋人なんてさすがはアクセルの街のキチガイエース。

あ、今のはなんか紅魔族的に感じるものがあります」

「私にはわかる！種族の差を超えた愛というやつだ！」

ふふふ、愛のために苦難に立ち向かう！私もそういう状況に…くふう！」

啓蒙低い会話を4人組が浄化の間続けていたが、貴方は気にせずにお茶を楽しんだ。

狩人は酒に酔わないが、茶を嗜むことはできる。

特にそれが親しい人との間ならなおさらだ。

「すみません、私持ち合わせがなくなってお礼のしようが…

あ！もうこんな時間…そうだ！お夕飯作ってあげますね！」

金がないので体で払うとばかりにウイズは家事の世話をしてくれていた。

貴方は気にすることは無いと思っただが、

ウイズは勝手に台所に立つと料理まで始めてしまった。

本人がやりたいのなら無理に留める必要もあるまい。

こればかりは貴方も人形も食事に縁遠い種族ゆえに敵わない部門だ。

その晩、貴方は久しぶりに人間のような食事をした。

第7話

ゲールマンは強かった、強い狩人だった。

「すべて、長い夜の夢だったよ……」

眠れ、夢は今終わる。

そして現れた月の魔物、失望した。

こんなものか、ゲールマンを倒した貴方はあの上位者によってゲールマンの代替物にされるはずだった。

青ざめた血を欲する上位者は貴方をどうにかできると思い自らノコノコと姿を表した。

そして貴方に狩られた、貴方は失望し、冷笑し、憤慨した。

こんなものかと

最初の狩人ゲールマンが、教区长ローレンスが、聖剣のルドヴィークが、時計塔のマリアが、ガスコイン神父も灰狼デイヤも狩人狩のアイリーンも連盟のヴァルトールもアルフレートも……

こんなつまらない奴にいいようにされたのか。

この程度の奴の為に狂わされたのか（ミコラーシユは除く）

ゲールマンとの死闘で傷ついた貴方は月の魔物と連戦となったが問題にならなかった。

力・速さ、そして技。

全くもつてお粗末なものだった、こんな自分の實力すら正しく評価できない奴が上位者だど？お笑い種だ。

さつさと死ねと貴方は思った。

そして貴方は月の魔物から最後の蒼ざめた血を奪い、上位者になった。

上位者、何が上位者だ。お笑い種もいいところだ。

貴方は上位者を冷笑した。

結局のところナメクジに毛の生えた程度の連中が力を持て余し、裏でこそこそ人間を弄ぶ。

それだけの間抜け連中が自称神気取りなだけではないか。

蒼ざめた血を求めよう、上位者狩りの夜は近い：

そして獣狩りの夜は終わらない、人から獣を狩り尽くすその日まで：

人は獣、獣は人。ならば獣を排除した人は果たして人だろうか？

それとも上位者だろうか？

ゆんゆんの大冒険（友達探し）

ギルドの掲示板の前で一人の少女が唸っていた。

その少女は豊満だった、年不相応な豊満さの少女が困っていることは

「ああー！なんでメンバー募集しないんですか！」

そもそも少女はパーティーメンバーを募集しているがそちらの方には誰からも応募がない。

『アークウィザード、レベル・職業・経験は問いません』

ここまではいい、だが

『メンバーさんは私と友達になってください。』

優しくしてください、日記を交換してください、話を聞いてください、ボードゲームをするときは付き合ってください、休日は一緒に遊びに行ってください e t c e t c』
と、びっしりと条件を書き連ねている。

ここまで条件が長いと誰もがドン引きして応募するものもおるまい。

仕方ないのでこちらから応募しようとしたが、どこも今度は少女の目から見て条件が合わない。

しかし実家から持ち出した軍資金も無限ではない以上クエストは受けなければなら

ない。

のだが、なぜか最近はこの駆け出し少女でも出来そうな初心者向けクエストがない。もっぱら魔王軍の幹部が近場に住み着いた為と、

アクセルの街と狩場を行ったり来たりする誰かから漏れ出す悍ましい血臭のせいだ。誰のせいだろうか？

『あ、これ…』

そこにはルナ嬢が書いたギルド推薦

『アクセルのマジキチ狩人の依頼』があった。

「私の人形との話し相手を募集しています。」

とても母性に溢れおとなしい子ですので色々教えてあげてください。

啓蒙が最低1以上必要。

女性

報酬は日に1万」

紙は茶色く変色し、くしゃくしゃでなぜか液体が垂れたような跡がある。

普通に考えれば頭のおかしい者でなければ受けないが…

「お人形ちゃんの話し相手なら慣れてるし…けーもーってのわからないけど…」

ゆんゆんの脳裏には幼い頃から話し相手だったサボテンやヌイグルミと言った者た

ちがいた。

話し相手をするだけで1日1万というのは破格の報酬だった。

ゆんゆんはこの頭がおかしすぎる依頼を駄目元で受けてみることにした。

どっちにしるフリーでモンスター退治をしても得られる報酬も経験値も微々たる者だ。

この依頼を受付嬢のルナ嬢のところに持つて行くと…

「え？これ…ほ、本当に受ける人いるんだ…」

ごめんなさい、ギルドとしては手数料を貰った以上掲載しないとイケないんですけどまさか受ける人がいるとは思わなくて…

確認するけど依頼主はあのマジキチ狩人よ？それでも本当にいいのね？」

どこか疲れたルナ嬢の目を見ながらゆんゆんは

（あ、これ受けちゃダメな奴だ）

と早くも気づいたが、

「いえ、受けた以上は面接だけでもやってみます…」

駄目だったらまた他のところでバイト探しますんで」

気落ちしながらも狩人の家に向かった。

狩人の家はアクセルの街の郊外、墓地のすぐ近くにある。

昼間でも人氣が無く、墓場という薄気味悪い雰囲気ゆんゆんはかなり不安になってきたが

着いてみるとそこは墓地の近くの家でも一面に白い百合が咲き乱れ、

古い教会を改装したような家は年季が入り落ち着いた雰囲気醸し出す上品な場所だった。

BGM 狩人の夢

ゆんゆん 啓蒙1

トロフィー “初めての啓蒙”を手に入れました！

ゆんゆんが狩人の家に近づいて行くと階段横に設えられた椅子に誰かが座っている。

「あああああああ！あの！す、すみません、募集の張り紙を見て来たんですけど」

ゆんゆんは意を決して椅子に座っている美しい女性に声をかけた。

目は泳いでいるし足は震えている。

「ああ、初めまして…私は人形。どうぞよろしく願います。

あなたが狩人様の仰っていた私の話し相手ですね？」

(え？人形!?!この人が)

椅子に座っているがそれだけで立っているゆんゆんと同じくらい高い。

だが手を見れば最高級の象牙のように滑らかで美しい白さを誇っているが球状関節は人では絶対にあり得ない。

ゆんゆんが考えていた人形とは動かないし、ここまで美人ではないし、そもそも喋ったりもしない。

つまりはこの人が人形で、人形ではないということだ。

「あなた様のお名前は？」

テンパったゆんゆんはついにあれをやってしまった。

「わ、我が名はゆんゆん！アークウイザードにして上級魔法を習得せんとする者！やがて紅魔族の長になる者！」

(…し…しまったあああああ！)

ゆんゆんはつい紅魔族特有の例の自己紹介をってしまった。

顔を真っ赤にしているが、人形はゆんゆんの自己紹介に驚いた顔でパチパチと拍手をしている。

「いーいいですから！拍手とか別にいい」

「ゆんゆん様、とても良いお名前ですね…」

貴方様の事を私、もっと知りたいのですが…よろしいでしょうか？」

するとゆんゆんは顔をパアッと明るくして

「え?! いいんですか? よろしくお願いします!」

あ、それと…私と友達になつてください!」

ゆんゆんはその日、昼間から日が傾くまでずっと喋り通しだった。

ギルドに帰つて来たゆんゆんは依頼内容の達成を誇らしげにルナ嬢に報告する。

「はい! 私、お人形ちゃんとお友達になれましたよ!」

いっぱいお喋りしてお茶も入れてあげました!」

…ルナ嬢はなぜかとても可哀想な物を見る目でゆんゆんを見た。

それでもきつちり報酬を手渡したのはプロだと言える。

第8話

近頃は冒険者達も気合いを入れている。

常日頃はダラダラしている冒険者連中ですら今の時期は完全武装し朝から気合が入っている。

まさに決戦の時近しいといった風貌だ。

もつとも、今でも暇つぶしに聖杯デブ狩に勤しむ貴方にとっては彼らの決死の覚悟も普段と変わらないように写る。

さて、貴方は相変わらず家を今はもう殆ど記憶に無い故郷の様式にするべくリフォームに励んでいた。

貴方の好むのは最先端のヴィクトリア朝の当世様式。

アクセルの街のそれは少し古めの様式で、彫金、彫刻などが施されていないため物足りないのだ。

「それでですねえ、バニルさんったら酷いんですよ。

私の事を商才0のポンコツ呼ばわりして…」

そしてなぜウィズが貴方の家に入り浸っている、本人曰く今日は店を早めにしめて墓

地に入れなかった魂の浄化のバイトに来たらしいが

別にバイトのない日にまで夜くるのはどうだろうか？

夜まで暇なのでということウイズは貴方相手に世間話などをしてる。魔族の連中は邪神を崇拜しているらしい。

貴方はウイズに邪神について色々質問してみた

どんな外見なのか、貴方は脳みそだけの生きた目玉なのかあるいはゴース、あるいはゴスムのようなナメクジなのか、はたまた月の魔物のような形状し難い物なのか。

貴方がウイズに貴方が今まで狩尽くしてきた上位者について事細かに説明すると：

「てけ……てけリリリリリリ！」

ウイズは目をグルグルさせながら訳のわからない謔言を繰り返し始めた。

急性啓蒙中毒である、貴方はウイズに鎮静剤を含ませてベッドに寝かせた。

よくある症状である、貴方もよくかかった。

軽症なのでゆつくりすればすぐ治るが、重症だと体からなぜか槍が飛び出して即死する危険な病気でもある。

「ああ、窓に！窓に！こめんなさい、お金さん窓から飛んでいかないでえ！」

もう砂糖水だけの生活は嫌あ！」

ベッドに横たわったウイズは魔されている。

だが流石に血だけで生活できる貴方と違っていくら不死者とはいえ人間の感性が抜けないウイズに砂糖水だけの生活では溜まる啓蒙も溜まるまい。

単調で退屈な生活ほど啓蒙を高めることへの障害はないのだから。

そう考えればヤーナムの連中の輸血漬けという生活、あれほどまでに獣性が急激に高まったのは輸血ばかりの単調な生活がもたらした害毒だろう。

貴方はウイズをそつと寝かすと部屋の内装作りに取り掛かった。

工房道具が揃いにくいのはなんともならない、王都から取り寄せねばなるまい。特に本棚の中身の充実は必要だろう。

「う・・・ううん・・・スウ・・・」

落ち着いたのかウイズは安らかな寝息を出して貴方のベッドで深い眠りについた。

「それでですね、人形ちゃん。

めぐみんったら酷いですよ。

いつも私が決闘を挑んでもずるい方法ばかりで私の事をいなすし・・・」

同じく目をグルグルさせながら人形ちゃんに一心不乱に話しかけ続けるのは最近雇ったバイトの子のゆんゆんだ。

驚くべきことに彼女の啓蒙の高まりは非常に高い。

聞けば彼女はこの歳になるまで他者との関わり合いを持つ事を控え、自らの本質と世

界の成り立ちについての内省、観察眼を鍛え続けてきたらしい。

素晴らしい、生まれながらに啓蒙を高めるべく努力をするなどゆんゆんの神秘力はウィレーム学長に匹敵するかもしれない。本人は友達ができにくいなどと言っていたが、神秘探求の道とはそういうものである。

貴方も長い狩りの夜で啓蒙を高めたが、ゆんゆん程素早く啓蒙が高まることはなかった。

この調子ならあと一ヶ月も人形ちゃんと言話し続けるだけで血の岩を使者たちから買えるようになるだろう、素晴らしい。

貴方はこの世界で啓蒙を高めることがいかに難しいかを知った。

獣に過ぎないモンスターとの狩りでは啓蒙が高まらないために啓蒙取引ができないという事を知った貴方は思いついた。

ならば啓蒙が高まりやすい者を見つけてその者に取引をさせて更に彼らからエリスと引き換えにアイテムを買えばいい。

その点で言えばゆんゆんは最高の逸材だった。

彼女自身の啓蒙の高まりやすさが紅魔族という種族から来ているのかは不明だが啓蒙とともにレベルが上がっていく事を考えれば啓蒙とこの世界のレベルには相関性があるのかもしれない。

このあたりは実験と観察を続けなければわからないが啓蒙につられてレベルが上がる事はゆんゆんの冒険者カードで確認できたが経験値が入るのは間違いない。

「めぐみんったら本当におかしいんですよ！」

ネタ扱いの爆裂魔法ばつかにこだわって…あれじゃ未だにメンバーだつてできやしませんよ！

私は狩人さんともお友達になれましたけどね！」

別に問題はないだろうと思った、そもそも世の中にはパンーにアルデオ車輪に大砲という装いの狩人すら珍しくない。

火力と機動力を極限まで追求したあのような連中こそ真に啓蒙高き変態と言えるだろう。

その点で言えばめぐみんも立派に変態である、ヤーナムに出しても恥ずかしくないまごう事なき変態である。

せつかくだから今度の聖杯ダンジョンにはあの4人組も誘おうかと思った。

3人は上級職だし、かなり期待できるのではないだろうか？

残念ながら3人は狩人の適正なしだが冒険者のあの奇怪な格好の少年なら狩人になれるかもしれない。

豚の尻を2、30回掘らせれば誰でも狩人になっていく。

そんなとりとめもない事を考えているとアクセルの街にあのルナ嬢の声が響き渡る。

『緊急クエスト！全ての冒険者は完全武装した状態で城門前に集合してください！』

『ウフフフフ…お帰りなさい狩人さん…ほら、お風呂？ご飯？それとも…たまにはお人形ちゃんと同じくらい私も可愛がってくださいねえ…』

『そうなんですよお人形ちゃん…私だつてライバルよりお友達の方がいいに決まつてますよ…』

私も狩人さんみたいにかっこいい人とパーティー組みたいなあつて…

え？ええ勿論！私も狩人になります！マジックハンターです！』

二人は緊急クエストの告知にも関わらず夢の世界から帰つてこないのです。

貴方は気づけの鎮静剤を嗅がせ、彼らの意識を夢から現実へと引き戻す。

「あら？私つたら何を…早く晩御飯の用意しなきゃ…」

「はっ！あれ？狩人さん？私つたらまたお人形ちゃんに夢中になってましたか？そうですよね！サボテンちゃんにも構つてあげなくちゃ」

貴方は二人に緊急クエストの招集がきた事を話した。

二人とも冒険者登録している以上、行かなければまずいのではないかと。

「！そ、そうでした！こればかりは何としてもやらなきゃ！」

二人は大慌てで家から門の方に駆けていった。

実に慌ただしい事だと貴方は思いながら武器を手に貴方も駆けていく。
ご近所づきあいにも優れ、無慈悲で、血に酔った良い狩人なのだから。
「行つてらっしゃいませ、狩人様、ウイズ様、そしてゆんゆん様。

あなた方の目覚めが有意なものでありますように」

第9話

貴方は集合している冒険者たちの群れに混じった。

それはそれは自然な混じりかたでこれならば啓蒙0のアクセルの街の冒険者から見れば

まるで目の前にアメンドーズがいても気づかないように誰も気づかない。

だが貴方にもやはり知らないことはあるようだ。

「皆さん！ 今年もキャベツ収穫時期がやってまいりました!!」

キャベツ：アブラナ科アブラナ属の多年草。野菜として広く利用され、栽培上は一年生植物として扱われる。

そして貴方の目には彼方から飛来する緑色の点が次々数を増やしている様映っている。

なんだこれは、と貴方はこの世界に来てから驚愕した。

「あら？ ジエヴオーダンさんはもしかしてキャベツ狩りは初めてでしたか？

キャベツはですねえ、とっても栄養豊富で甘いんですよ。

特に今年のは出来がいいからって1万エリスで買取してくれるんですって！

これで砂糖水生活もしばらくはキャベツ三昧にできます。

狩らなきゃ！

キャベツは狩るものではあるまい、と貴方は思ったが。

貴方の目は遥か彼方から飛んでくる物をしつかりと目にしている。

つまり、飛んでくるキャベツをである。

あれはまずい。

貴方の記憶が今までの事故死を再生する。

広場で獣狩りの群衆に包囲されて死亡、下水道でネズミの大群に襲われて死亡、ダンジョンで湧いてくる蜘蛛に囲まれて死亡、悪夢の世界で犬にまとわりつかれて死亡。

貴方は1対1、あるいは射程の長い武器ならば4体くらいで遅く密集しているならなんとか対応できるかもしれない。

だが狩人というのは1対多数は基本的に苦手なのだ。

相手がのろければ対処のしようもあるが、なぜかヤーナムで群れを作っているのは結構素早い連中が多い。

必然的に攻撃され怯んだところに連続攻撃であえなく死亡という例が実に多い。

なぜかは知らない、啓蒙がいくら高まってもわからないこともある。

ゲームシステム上のご都合主義だという声は聞こえたような気がする。

啓蒙が高まりすぎたようだ、貴方は鎮静剤を嗜んだ……ふう。

貴方はこの世界は啓蒙が低すぎると嘆いたが違ったようだ、ドラゴンよりもマンティコアよりもグロフィンよりもキャベツが空を飛ぶ。

どうやら貴方がこの世界を選んだのは間違いではなかった、その証拠に今も啓蒙がちよびつと上がったのを感じた。

キャベツは飛ぶ、新たな視点から見た世界は貴方をまた一步青年期へと推し進めた。

だいぶ方向性が間違っているかもしれないが、試行錯誤もまた必要なのだ。

「一万里ス……一万里ス！絶対沢山狩ってお人形ちゃんにお土産買ってあげます！」

ゆんゆんも殺る気満々のようだ、実に頼もしい。

超攻撃型マジキチ狩人：シヤスエール・ドウ・ジエヴオーダン

魔法大火力凄腕貧乏アークウイザード：ウイズ

バランス型脱ぼつちアークウイザード（人形とサボテンが友達）：ゆんゆん
かなり攻撃に偏っている気がするがダンジョンでも似たような構成だった。

聖杯ダンジョンにおける一般的パーティー

超攻撃型マジキチ変態脳筋狩人

超攻撃型マジキチ切腹血質狩人

超攻撃型マジキチ神秘カリフラワー狩人

やはり攻撃に全振りは間違いではない。

殺される前に殺せば全て解決なのだ。

そして…始まる…

「狩人様、キャベツ狩りの昼が始まります」

別に始まらんでいい。

「えいえい！この！このこのこの！」

「待って！こんな時まで逃げないで！」

ウイズとゆんゆんは前の前に飛んで来たキャベツをそれぞれの獲物の杖と魔法で撃

ち落とし回収している。

「フリーズ！ほら、凍らせて獲れば品質を下げずに済むんですよ」

ウイズはゆんゆんにキャベツ狩りの極意を教えている。

「わかりました！フリーズ！フリーズ！」

実に微笑ましい二人のアークプリーストのキャベツ狩りである。

しかしそんな事は関係なしに貴方には問題が発生した。

さて、どんな手段で獲ったものか。

水銀の銃弾は強烈な重金属汚染の危険性があるためキャベツは食べ物ではなくなってしまう。

では神秘はというと、どれもやはり食べ物に使うものではない。

貴方は小さなトニトルスを使ってみた、キャベツは焦げた炭化物になった。

…どうやら貴方は良いキャベツ狩人ではなかったようだ。

そこで素手で殴ってみたらキャベツは落ちた、ダメージを与えるとキャベツは気絶するらしく収穫できる…

貴方はつぶらな瞳でこちらを見つめてくるキャベツを見た。

貴方はその瞳の奥にキャベツがこれまでに辿つて来た一生を見た、大地から芽を出し雨風にも負けずに強く育ち、そしてその身に栄養を蓄えまだ見ぬ大地目指し飛び立つその姿を。

さらに幻視した。キャベツが荒野で朽ち果てどもその亡骸からは再びキャベツが芽を出しやがては荒野が緑なす大地となりキャベツが再び旅を再開する様子を。

啓蒙の高まりに貴方はぼうつとした、少し狂気が高まったのかもしれない。

「あー危ない！」

ウイズが警告してくれたが少し遅かった、貴方は横から飛んで来たキャベツにぶつか

られてしまった。

更に何が悪かったのか次から次へとキャベツが貴方にどんどん向かって突進して来た。

きつとキャベツも貴方が普通の人間とは違う、キャベツへの理解高きものと見て親んでくれたのだろう。

その割には追突は全力だった、更に言えば量が多すぎて貴方はキャベツに埋まってしまった。

「ジエ、ジエヴオーダンさん!?!いま助けますから!」

「待っててください、助けたらもうこれって親友って事ですよね!」

貴方は大量のキャベツに埋まりながら悟った、宇宙は空にある。

そしてキャベツの心もまた宇宙だったと。

結局、ウイズとゆんゆんは貴方に集った大量のキャベツを貴方ごと氷漬けにする事で大量に捕獲した。

「ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!」

二人とも貴方に謝っている、だが何を気にしているのか。

貴方は少しの間凍っていた程度ではないかと二人に気にする必要は無いと伝えた。

キャベツの前で巨大な月を幻視して考え事をした結果であり、貴方の不注意だ。

更に言えば貴方は二人が差し出したキャベツの買取り報酬も不要だと伝えた。

「でも…それじゃ貴方のぶんが…それにこれだけの報酬も結局ほとんどは貴方に集まったキャベツでしたし」

そう、貴方は1000を超えるキャベツにたかられていたのだ。

それも一つ一つが数kgを超えるよく肥えた栄養たっぷりのキャベツだった。

その総重量はおそらくは数トンにも達したろう。

ウイズとゆんゆんが大急ぎでキャベツを凍らせて引きずり出してくれなかったら貴方は数台の大型馬車の下敷きになったようなものだった、アメンドーズに殴られ慣れないなかったら即死して家で目覚めていたろう。

貴方は警戒すべきもののリストの烏頭犬と血蜘蛛の次にキャベツを加えた。

きつとキャベツじゃなくてこの世界の上位者の眷属に違いない。

それならばと貴方はウイズとゆんゆんが買取金額を半々すればいいと貴方は答えた。

それにゆんゆんに至っては貴方を助け出す時に梃子がわりに使って高価な魔法の杖を折ってしまったている。

「だ！大丈夫ですよ！初心者向けの安物ですから気にしないでください！」

魔法使いの杖が安物だとは寡聞にして聞かない、それに彼女は紅魔族の族長の娘にしてアークウイザードだ。

そんな人物の持ち物が安物のはずがない。

そこで、貴方は昔自分が使っていた杖があるのを思い出した。

安物（遺志1000）だが手入れはしているので是非今度家に来た時にもらつて欲しいと言った。

「ええええええええ！いいんですか！ううふふうう！

ぷ！プレゼントなんて…友達からのプレゼント…」

「よかつたわね、ゆんゆん。あらあら、でも狩人さん？私にはお礼はないのかしら？

ゆんゆんにだけなんてちよつと嫉妬しちゃいますよ…」

なぜかウイズが貴方ですら薄ら寒い思いをする笑顔を貴方に向けている。

貴方は折角だから今回は3人のパーティーの初仕事祝いとして冒険者ギルドで皆で料理を楽しむのいいが

貴方の家で人形ちゃんも含めて密やかに祝おうと言った。

その際にとびきりのワインも開けようと。

「あら！貴方の推薦するワインなんて楽しみです！

これはもう私が料理の腕を振るうしかないですね！」

ウイズは自分の食事は砂糖水だが、貴方の家では実に見事な家庭料理を作る。

最近はやんゆんも料理を手伝っているらしい。

貴方も人形ちゃんも料理という概念は理解できても実践はできない。

啓蒙と実行の間にはいまだに厚い壁が横たわっている。

そう言いながら貴方達はギルドに保存しておいたキャベツを持って帰ろうとした。

『はああああああ！なんでえ！なんでこんな買取金額が安いのよ！』

向こうでは誰かが何故かキャベツではなくレタスを狩ったのだと言っていた。

貴方はいわゆるスキルをどうするかで悩んでいたが、今回のカズマ少年の実践例を見て盗賊系・潜伏系のスキルを重視することを決意した。

背後から音も気配もなく近寄って溜め攻撃を食らわせればそこからの内臓攻撃で相手は死ぬ。

ステイールに関してはどうだろうか？殺してから奪ったほうが早いし確実に相手の反撃も防げると思うのだが？

幸い、貴方の職業であるこの世界のハンターにも似たようなスキルは多い。

貴方は更に良い狩人になるだろう。

第10話

貴方と人間であるウイズやゆんゆん、あるいはギルドの他の冒険者達との間には決定的な違いがある。

ウイズが人間かどうかは別として、彼らは死ねばそれまでであり再び魂の輪廻の輪へと帰ってしまう。

一方で貴方は狩人であり上位者である、貴方にとって死の概念はもはや人間が眠る程度の軽さである。

そもそも死の概念と言ったものさえ啓蒙をあげて概念を書き換えてしまえば貴方にとっては存在しなくなる。

しかしながら貴方の領域ではないこの世界でそれを実行すれば待っているのは世界の構造そのものの破壊に繋がる。

下手をすれば全ての人間が不死になってしまう、それが齎すのは凄まじい混沌と地獄そのものの世界だろう。

ゆえに貴方は自らの上位者としての力を封印した、ゆえに貴方は狩人である。

やはり狩人はどのようになっても狩人であることこそ無上である、そして上位者を許

しはしない。

そして相変わらず数の暴力には弱かった、つまりこの先も幕末戦法が有効だ。さて、貴方は困らないがアクセルの街は今クエスト薄である。

理由は近場に魔王軍の幹部が居座っているためである、そのために弱いモンスターが町の周辺に出てこないために平和である。

だからと言って貴方の狩が止まることはない。

何ものも貴方を捕らえ、止められぬのだ。

ゆんゆんが家の席でカシャツ！シャキンと杖を鞭へ、鞭を杖へと変形させている。

「行きましよう！クエスト行きましよう！」

貴方が初めて仕掛け武器を持ったときのことを思い出す。

あの変形機構は無駄に使いたくなる、たとえ意味がなくなるとも。

ゆんゆんもしっかり紅魔族の血筋だということだ。

貴方とウィズ、そして人形ちゃんという友達が出来たと貴方の家に泊まり込んで実家に対して手紙を書いていたと恐ろしく分厚い紙の束を郵便で出していたのを見た。

いまではすっかり貴方の家の下宿人になっている。

普通に考えれば、これほどの神経のず太さがあれば今までに友人と普通の人間が呼べる対象が一人や二人はいるだろうと思っただが。

本人が貴方も友達と言うのなら、使者達とも仲良くやっていけるだろう。

使者ちゃんから買ったてはやほやの市販品だがこれからゆんゆんと共に鍛えていけばきつと神を乱獲できる、貴方のノコギリ鉋のように。

ゆんゆんは極めてちよろい、めぐみんがいつか

「チャラチャラした男にちよつと誘われたら路地裏にホイホイついていく」

と言っていた。

それくらい人恋しい少女だ。

だがそれも無理はない、貴方だつてたつた数日呪いの冒流ダンジョンに入り浸つて腐乱死体に膝まで浸かっていたら安らぎを求める筈だ。

もつとも人間の場合は新鮮な血を貴方に提供する場合になるが。

ゆんゆんの聖杯は紅魔族の里だったというだけだろう。

そしてそんなゆんゆんを優しい目で見つめるウイズは貴方の昼食を準備してくれている。

「ほら、今日はビーフストロガノフですよ。

ゆんゆんも手を洗つて来て、あとお皿を配るのを手伝つてね」

「はい、ほらジェヴオーダンさんも手伝つて下さい」

ゆんゆんがいじくり回していた杖を手放して台所のウイズの手伝いをしている。

いつの間にか夜だけでなく、朝も昼も貴方の家で二人とも食事を摂るようになった。ギルドで管を巻いている男達には

“美人の通い妻と娘さんがいて羨ましいですね、爆発しろ”
と言われてしまった。

だが爆殺されるのは爆発金槌持ちの侵入変態狩人相手で十分だ。

それともこの世界の連中は妻子を持つと爆発する習性があるのか、いや流石にそんなことはあるまい本当に奇妙な連中だ。

だがいずれにしろ、ウイズは貴方の伴侶ではないしゆんゆんも貴方の子ではない。

彼女らは貴方を慕っているだけだ。

好奇の狂熱も知らぬままに、それだけだ。

話が逸れたが、要するに貴方は今狩をしていない。

面白そうな獲物は今のところ狩ってしまったし、家の改築のこともあるので遠出までしようとはしない。

たまに床の張替えや壁の塗装に飽きたらエンシエントドラゴンを聖杯3デブよろしく乱獲する程度だ。

貴方はせいぜいがライト地底人に過ぎない、中には数千年もの間聖杯で過ごす血の亡

者と化した頭のおかしい剛の者もいる。

おかしくなりすぎると上位者ならぬ異常者になるので、乱獲されるドラゴン保護条例の制定が急がれる。

例のキャベツ狩で皆懐が温かい今は誰もあえて無理にクエストを受注しようという気概がある者がいないのもある。

ゆえに今はギルドも貴方も暇であった。

こういう日は腐ったダンジョンに潜るのはもうやめにしたほうがいい、健康に悪そう
だ。

貴方が食後にお茶を楽しんでいるとまたもや放送が入った。

貴方は食後にウイズがお菓子を切り分けている傍でゆんゆんに色々と狩の心得というものを教えている。

眼鏡やゴーグルはつけておきたまえ、土埃や血しぶきが目に入るのは致命的だ。

露出度の低い服装が良い、狩の毒物や汚物や呪いは当然だから。

貴方が狩について話しているとウイズもゆんゆんもどんどん目が昏くなつていく気がする。

「ちよつと今はそういう話はやめにしませんか？

ほら、お菓子もありますから」

貴方はやんわりとウイズに釘を刺されてしまった、なるほど仕事の話を家でするのは無粋ということか。

たとえば考えてほしい、夕食時に醜い獣ルドウィークの戦闘BGMが流れてきておちおち食事できるだろうか？

いや、身体は闘争を求めてしまいアクセルの街は木っ端微塵に消し飛ぶだろう。

つまりはそういうことである、貴方も啓蒙高い系狩人に見えて意外と獣性が高い。

しかしいつの間にか貴方の家は彼らの家にもなったのだろうか？

ゆんゆんはまだわかる、一週間一日の仕事で人形ちゃんと話をしなければならぬこともある。あとの六日はやはり人形ちゃんと話をして寝泊まりしている、やはりもう下宿人だろう。

貴方とウイズの交流は同時に貴方に貴重な経験をもたらしている。

朝はウイズが朝食を作り、昼に弁当を持たせてもらい、夜は皆で夕食を取り、晩はそれぞれの部屋で床に就く。

貴方やウイズはともかくゆんゆんは成長期でありそもそも運動量が多い冒険者であるため必要な栄養素が多い。

だがギルドの外食は脂肪分と炭水化物が多く、貴方は勧められないが料理などできるはずもないのでウイズに頼んでいる。

するとなぜか3人分の弁当が出来上がる、不思議なこともある。

これもまた深宇宙の叡智を持ってしても解けない神秘なのだろう。

貴方は睡眠も食事も不要だが、あまり人間らしからぬ行動をすると啓蒙過負荷で発狂しかねない。

そして周りに合わせて生活する点ではアンデッドのウイズも同じのはずであり、そのことに関しては長い間この街で人として馴染んでいる彼女のやり方に倣うべきだろう。

ウイズもやはり人間らしい行動をするほうが精神的に負担は少ないのであろうか、食べもするし眠りもする。

砂糖水生活というのが健全で人間的な食事かどうかは疑問だとして。

「緊急クエスト！緊急クエスト！全冒険者は完全武装して城門前に集合して下さい！」
するとルナ嬢の声が例の放送塔から響き渡る。

実に単純だが画期的な伝令手段だと前々から貴方は思っている。

ロンドンの時計塔もあれに倣って重要なニュースを音声で放送すればどうだろうかとも思ったが

毎日のように蒸気機関車や馬車馬で人も物もごった返す騒々しいあの街では誰の耳にも入らないだろうと思った。

トントンの電報では理解できるものもおるまい。

貴方は貴方がヤーナムに赴く前に発明された無線というエーテル波を媒体にして電線不要で音を送る技術を思い出した。

全ての人が家の置き時計くらいに小さなエーテル波の受信機を持てるようになれば、いつでもすぐにニュースが聞けて新聞が不要になるかもしれないと思つた。

それどころか電話に無線を使えば船や馬車、汽車から他の電話に繋がられるだろう。

無論、誰もが使うわけではないだろう。

電話で伝えねばならないほど重要な事が一般人にしょつちゆう起こるわけもあるまい。

ましてや移動しているときに伝えねばならない程急ぐなど、それこそ人死にや大事故に繋がるような緊急事態でもない限り使うものなどいないだろう。

たとえば船の進路上に冰山があるとか：実に荒唐無稽な話だ。

さて、貴方はルナ嬢の呼び出しに応じなければならぬ。

せつかくの微睡の時を邪魔されて実に不愉快だが貴方とて一応は冒険者登録している以上は顔を出さねばなるまい。

「あ、行つてらっしゃい。はい、お弁当忘れないで下さいね」

ウイズが貴方とゆんゆんにお弁当を持たせて送り出してくれた。

「何でしょうね？今度はナスでしょうか？」

ナスも飛んでくるのか？

貴方はこの世界で農業がどのように成り立っているのか？生物とはという疑問ができた。

貴方とゆんゆんが城門につくと何やら街の外で誰かが騒いでいる。

「この俺の城に、毎日毎日爆裂魔法を撃ち込んでくる頭のおかしい奴はどこぞいだああああああ！」

頭なしの鎧が騒いでいた。

貴方が顔見知りの冒険者であるダクネス嬢に聞いた。

彼女の友達のカリス嬢はなぜか貴方を見ると怯えてしまつて逃げてしまつた。

『ぬるぬるはもう嫌あああああつ！』

盗賊らしい実に素早い逃げ足だつた。

この前ナメクジ塗れにしたのがそんなに嬉しかったのだろうか。

「あーアクセルの狩人殿。先日は我々の仲間が失礼した！」

ダクネスは普段は礼儀正しい、きつと育ちが良いのだろう。

「うむ、この近くに住み着いた魔王軍の幹部がとうとうこの街にやって来たのだが…

まあ、聞いての通りだ。原因はやはり……」

貴方が知る限りこの街で爆裂魔法を使えるのはアークウィザードでもMPが高いめぐみんとウイズくらいのものだ。

だがウイズは朝昼晩と店の営業時間以外は貴方の家に入り浸っているので違う。

となれば別に啓蒙が無くとも犯人はめぐみんという結論だ。

見ればめぐみんは冒険者たちの視線を受けて緊張していたようだが、さすがは紅魔族。

名乗りを上げて幹部：ベルディアの前に出て行った。

「だ、大丈夫かな。めぐみん」

ゆんゆんはライバルでありまた同じ一族のめぐみんを心配している。

だが流石に頭がそんなにおかしくないので、魔王軍の幹部相手に突っかかる度胸はないようだ。

貴方の後ろに隠れている。

第11話

「あーアクセルの狩人殿。先日は我々の仲間が失礼した！」

ダクネスは普段は礼儀正しい、きつと育ちが良いのだろう。

「うむ、この近くに住み着いた魔王軍の幹部がとうとうこの街にやって来たのだが…

まあ、聞いての通りだ。原因はやはり…」

貴方が知る限りこの街で爆裂魔法を使えるのはアークウィザードでもMPが高いめぐみんとウイズくらいのものだ。

だがウイズは朝昼晩と店の営業時間以外は貴方の家に入り浸っているので違う。

となれば別に啓蒙が無くとも犯人はめぐみんという結論だ。

見ればめぐみんは冒険者たちの視線を受けて緊張していたようだが、さすがは紅魔族。

名乗りを上げて幹部：ベルディアの前に出て行った。

「だ、大丈夫かな。めぐみん」

ゆんゆんはライバルでありまた同じ一族のめぐみんを心配している。

だが流石に頭がそんなにおかしくないので、魔王軍の幹部相手に突つかかる度胸はないようだ。

貴方の後ろに隠れている。

貴方の目の前で魔王軍の幹部、ベルディアとめぐみんが低啓蒙な言い争いを続けている。

爆裂魔法を一日一回打たないと紅魔族は死ぬだとか幹部であるベルディアをおびき寄せるためだとか言い訳が二転三転するが。

そこは別に啓蒙が無くともわかりきった事なのか、カズマ少年も

「いや、お前が撃ちたかっただけだろ」

とツツコミを入れていた。

というか爆裂魔法を一回使うと倒れるというゆんゆんの話が本当だとしたら、魔力が尽きたらどうしていたのか。

案外、わざわざこのカズマ少年がおんぶして帰っていたのかもしれない。

いやまさか、わざわざそんな手間暇をかけて一銭にもならないのに魔法を使う意味もないと思う。

とはいえ、貴方にしてもわざわざダンジョンに潜ってマラソンしたりとめぐみんの事は笑えない。なので微笑ましく見守ることにした。

「ふふふふ、我が策に嵌りノコノコと出て来たのが運の尽きです！」

魔王にすら届く刃である我が爆裂魔法とアクセル一の使い手の狩人がいれば魔王の下っ端など恐るるに足らず！

さあ、やつちやつて下さい先生！」

あれだけ啖呵を切って先生とやらに頼るらしい。

貴方はピクリとも動かなかつた、そもそもあの幹部は獣では無いのだから貴方の狩の範囲外である。

貴方は獣狩りや上位者狩りはしても、人狩では無いのだから。

アンデッドが人かどうかは微妙だが。

「あのー先生…ジエヴオーダンさーん。正直私ではちよつと無理っぽいのでやつちやつてはいただけないでしょうか…」

めぐみんは下手に出た。

先生とは、つまりは貴方のことである。

貴方はめぐみんの師匠になったことなどないし、魔法に関しては優等生のゆんゆんよりも上のめぐみに教えられることなど無いだろう。

レベルを上げて物理で殴り、相手の攻撃は確実に避ける。

貴方が教えられるのはそれくらいだ、つまりアークウィザードには何の役にも立たな

い。

更に言えば、別にスキルでも何でも無いのでポイントで教えられない。

その点ではゆんゆんの魔法の才能は貴方には無かったものだ。

更に言えば体術の点でもウエアウルフを考えなしに殴り殺そうとした昔の貴方よりも優っている。つまり、非常に優秀な狩人になりうるということだ。

「えーと…呼ばれてるんですけど。行かないんですか？」

ゆんゆんはめぐみんはライバルであるので幹部に殺されて欲しく無いらしい。

貴方は無論、彼が殺す気なら殺される前に殺すつもりだが本人はめぐみんにまずは謝罪と注意をしに来たらしい。

それならばまずは殺しあう前にめぐみんが謝るべきだろう。

いくら知らなかったとは言え、他人の家を毎日爆破していいわけでは無いのだから。

「おい、待て。何か勘違いしているみたいだが、俺は今日戦いに来たわけでは無い。

とりあえずはだ、その頭のおかしいアークウィザードに注意をしに来ただけだ」

「だ！誰が頭がおかしいウィザードですか!？」

「お前だ！お前！それ以外にどんな奴がいるんだ!？」

周りの冒険者も頭がおかしいという点では同意しているようだ。

それからベルディアとめぐみんは

「爆裂魔法はもう撃つな！いいな！絶対撃つなよ！」

「それは無理です、硬くて大きいモノじゃ無いともう満足できない体になってしまいました。」

貴方のせいですが、貴方が城を魔力で固めてたせいです。

責任取って下さい」

「おい！なに人のせいにしてんだ!？」

それと変な言い方はやめろ！誤解されるだろうがあ！」
などと不毛な言い争いを続けていた。

「いいだろう…口で言ってもわからんお前にはきついお灸を据えてやろう！」

ベルディアは赤眼を光らせると右手から魔力の塊を発射した。

めぐみんは目の前に迫る魔力の塊を避けられないと、当たってしまうと思いい目を瞑る
：

しかし魔力の塊が命中したのはめぐみんではなく目の前に立ち塞がったダクネスであつた。

あろうことかめぐみんを庇ってダクネスが魔王軍の幹部の攻撃を受けた。

貴方は別に理由など構わないがダクネスの行動には感心した。

例えその理由がどうであれ、仲間を庇う人としての誇り・気概を感じた…事にしてお
う。

「よく聞け、めぐみん。」

お前を庇ったその騎士が受けたのは『死の宣告』

一週間後にその騎士は死ぬ！お前の大切な仲間は死の恐怖に悶え苦しみながらな！

お前のせいだ！」

めぐみんは驚き、絶望し俯く…

魔王軍幹部の魔力は人間のそれとは隔絶しており、そして真実だろう。

しかしながら当のダクネスはというと…

「その魔王軍幹部…つまりお前は私に呪いを解いて欲しければ私に言う事を聞けと言
うのだろう!? エロ本みたいに！ エロ本みたいに!!」

「はっ!？」

ダクネスはもはや啓蒙がどうかというレベルではなくトチ狂っていた。

貴方はダクネスをまあまあ啓蒙高い系女子かとも思ったが違った。

ただの変態だった、だがこの変態ぶりを高啓蒙へと導くのもまた貴方の務めなのだろ

うか…

やっぱ務めたくない。

もはや聞いてはいられない、ダクネスは魔王軍幹部のど変態プレイでエロ本のような陵辱女騎士を晒すためにホイホイ行こうとしたのをカズマに止められた

貴方はベルディアに少し同情した

「ま、まあとにかく！…そのウィザード！仲間にかげられた死の宣告を解きたくば一週間以内に俺の城へ来い！

だが果たしてアンデッド蠢く城を突破して俺の元へたどりつけるかな？わははははははは！」

魔王軍幹部は捨て台詞のようにとても重要な事を吐いてそそくさと去っていった。

その後はアクアが呪いをあっさりと浄化した、めでたしめでたし。

ベルディアの実力は本物だった、本気でかけたのであろう呪いは種類こそ違えど呪詛溜まりと同じ性質の強力な物だった。

貴方にはわかる、異世界から現れたイカれた神秘マンが投げつけるクソと同じくらい強烈だ。

だがそれを浄化したアクアのアークプリーストの実力はそれ以上だった、貴方は彼女が自分を女神と言っていたが今は信頼した。

啓蒙低き世間の香りに紛れているが、かの月の魔物や貴方自身と同じ神秘の月の香りがする。

「…行きましうか」

ゆんゆんの疲れた目が語っている、自分たちの感動と時間を返して欲しいと。

貴方は城外に出た事だし、ゆんゆんに基本的な狩人のイロハを教えてやろうと考えた。

すると顔を輝かせて…

「あ、めぐみん！き！奇遇ね！どう!?一緒に訓練してあげても、い、いいわよ！」

ゆんゆんはドヤ顔でさも構ってほしそうに今はうなだれているめぐみに近づいて言った。

「…今日は疲れたのでやめときます」

「はうっ！そ、そうだ！…しよ！勝負よ！めぐみん！そう！どっちが上手に訓練できるか！」

逃げるの!？」

だがめぐみんは疲れた顔で無視して街に帰ってしまった。

あっさり魔王軍幹部を撃退できて拍子抜けしたのか貴方とゆんゆん以外の冒険者も街に戻っていつてしまう。

まあこんな事もあると貴方はゆんゆんを慰めた。

助言者でもある貴方は後輩への気遣いにも優れ、無慈悲で、血に酔った良い狩人だ。

第12話

あのデュラハンはかなりの実力者だった、間違いなく百戦錬磨の古狩人であるガスコイン神父に匹敵する戦闘力の持ち主だということはあの佇まいから伺えた。

あの神父には数え切れないほど殺されたが、だからこそあの時に貴方は内臓攻撃の魅力に目覚めた。

内臓攻撃は素晴らしい、リゲインに血の喜びによってHPも回復し相手に大ダメージも与えられる攻防一体の大技だ。

貴方も幾たびか別世界の狩人狩に追い詰められたことがあったが、その度にパリイからの内臓攻撃で逆転というのはよくある展開だ。

この世界は貴方があの診療所で目覚めてから記憶がある唯一の街であるヤーナムに比べると天国のように快適で優しい。

少なくともいきなり聖職者の獣とガスコイン神父レベルのモンスターがチュートリアルとして出て来ることはないし

知り合った人間ごとくと殺し合うと言う普通の展開もない。

貴方はゆんゆんに取り敢えずの狩人の基礎を教えた。

道具は出し惜しみするな

常に1 on 1へと持ち込める状況を自分から作り出せ。

手強いならまず弱らせろ

よく観察して隙を見出せ

地形を活用しろ

相手を罠にかけろ

不利なら迷わず逃げろ

これは狩りであつて戦いではない

この世界の冒険者にしても特段目新しいことではないらしく、ゆんゆんはメモをとつてはいたが直ぐに覚えた。

貴方は取り敢えず近場のジャイアントトードでゆんゆんが狩りをできるように計らった。

『ライト・オブ・セイバー!』

彼女は新しい仕込み杖で魔法攻撃を行使し、ジャイアントトードを一刀両断にする。

貴方は見事だと称賛した、魔力消費が比較的大きく射程が短いが破壊力は一級品の魔法だ。

消費魔力の大きさは彼女自身の元々大きいキャパシティで補える。

どつかの爆裂娘とはえらい違いである。

とはいえ、彼女が狩人になる事を望むのならばこれからは仕込み杖についても更に慣れるしかない。

貴方は彼女に今度は杖としてではなく鞭として使ってみると指示した。

ゆんゆんは指示に従い、今度は魔力のエンチャントを鞭に施す。

物理攻撃力の低さを補うその戦い方は貴方のヤスリや神秘と基本的には変わらない。

神秘も銃撃もいいが、狩人にとっては接近しての方が安全な場合が多い。

特に相手が大火力持ちの場合は、射撃戦では押し負けるだろう。

結局はその場その場への対応力を鍛えなければ何も始まらないのだ。

「せいっー」

ゆんゆんはカエルの舌をサイドステップで避けると走りざまに鞭の先端をカエルの脇腹に速度を活かしたまま叩き込む。

仕込み杖に仕込んだ刃が体内奥深くにまで切り裂いて達するとカエルは呆気なく死んだ。

相手をあえて正面に置かないノーロック戦術での鞭形態をここまで使いこなすとは、彼女は才能があるのだろう。

貴方は素直にゆんゆんを称賛した。

「え？そ、そんな……えへへっへ、す、すごいだなんて。

私褒められた褒められた、うふふふふ」

で、あれば貴方もゆんゆんにそろそろ例のアレを披露しなければなるまい。

「え？何を？私も覚えられるって？」

ゆんゆんは瞳を輝かせて期待の目で貴方を見上げている。

貴方は銃も銃も置くと、またまた出てきたカエルに無造作に歩み寄った。

カエルが貴方をまたしても舌で攻撃しようとしたが貴方は一瞬で背後に回る。

サイドステップからの溜め攻撃を食らわせるとカエルは態勢を大きく崩し、急所であ

る腹を貴方に向けた。

内臓攻撃の時間だ。

貴方は右手を凄まじい勢いで腕を突っ込んだ、尻に。

貴方は幾億回と繰り返した動作通りに内臓も骨も掴むとカエルのそれを勢いよく

引っこ抜いた、辺りには血腥い匂いが立ち込め地面にはカエルの中身と外側が転がる。

「え、えええ……」

ゆんゆんが死んだような目で目の前にやってきた血まみれの貴方を見上げる。

前とはうって変わって輝きが消えたいわゆるレイプ目という奴だ。

貴方は難しそうなのはわかるが狩人としてやっていくには銃パリイと内臓攻撃は必須だと教えた。

さあ、殺ってみなさい。

そう言うと、ゆんゆんの昏い目はますます暗くなっていた、このままではダークリングが現れるかもしれないと貴方が心配するほどに。

ゆんゆんの練習はベルディアが撤退してから昼食時まで続いた、結局ゆんゆんは内臓攻撃を習得できなかった。

溜め攻撃はできるが、なぜかちよつと右手でゴムのように分厚いカエルの尻を掘れなかった。

貴方は別に急ぐ必要はないし、今度はもつとパリイしやすい相手で試せばいいと言つてあげた。

例えば豚とか。

「いらつしやいま…ヒイイイ！」

ギルドの軒先にやってきた貴方達に向かってルナ嬢が叫ぶ、貴方はともかくゆんゆんまで頭の上から爪先まで血まみれだ。

ゆんゆんの目は相変わらず死んでいる。

血まみれでレイプ目で日頃からお人形ちゃんが友達とか言っている少女がこの状況

である。

貴方は気づいた、思春期の少女が爪先まで血まみれなのはどうかと

一応は払ったが貴方の革の狩装束と違い布のゆんゆんの服は血をよく吸収してしまった。

血腥い。

そこで貴方はゆんゆんに風呂に入ってくるように言った。

貴方のことは別に放っておけば落ちるので気にしなくていいと、ルナ嬢には言っておいた。

「気にします！ギルドに血を落とさずに入ったら罰金ですからね！」

床掃除が大変ということなので貴方も血まみれのまま街を歩くのを禁じられてしまった。

豊富な少女と一緒に風呂に行く、しかも少女はレイプ目。

傍目にはあれな事態に見える。

普通なら押搦されるところだが血まみれの貴方とゆんゆんを推搦するものはいない。貴方は別に構わない、蠟を塗ってある狩装束は血は払えばいつの間にか落ちていく。疲れた表情でトボトボと歩きながら風呂から上がってきたゆんゆん。

「あの…もう今日は帰ってお人形ちゃんとお話して寝ます…」

今日もお人形ちゃんにお土産を買いで疲れるまで会話して泥のように眠るつもりらしい。

そしてウイズがゆんゆんを案じて夜に晩御飯を作つてあげて寝かしつけるのだ。

ウイズはもしもリッチーになつていなかったらいい母親になつていたろう。

ちよつと娘役が大きすぎる気もするが、いろんな意味で。

貴方には縁がないが、彼女達のような家族を持てる男性は幸福者だろう。

それこそギルドの食堂で爆発しろと言ふ呪詛を投げつけられる程度には。

狩人に家族は持てぬ、もしも持てば最早狩人を続けられぬ。

呪われた血をその身に宿す哀れな狩人たちよ。

ガスコイン神父は家族を持ちながら狩人である事を辞められなかつたのだ。

貴方は思い出のオルゴールを鳴らしながらそう思った。

それはともかく狩だ：一日一内臓攻撃しなければ腕が鈍る気がする。

貴方がギルドに来るとルナ嬢はまたも疲れた顔で貴方を迎えた。

「…いらつしやいませー」

棒読みで迎えられるでしまた、そこまでひどい扱いを受ける謂れはないが？

そういえばギルド職員はいつも人手不足だと嘆いていた気がする、そのせいだろうか

？

貴方はさりげなくルナ嬢に聞いてみた。

女性が家庭を持ちたいと言いだしたらどのような男性を勧めれば良いのだろうか。

貴方は真昼間だというのにまだベルディア撃退の報奨金で飲み耽っている例の四人組を目の端に捉えながらルナ嬢に相談した。

「あつ！ジェヴオーダン殿！聞いたぞ！今度はまた別の少女を血まみれぶっかけコースの目に合わせたとか！ぜひ！今度は私にもBUKKAKEをお願いしたい！」

「おい馬鹿！この変態クルセイダー！やめろつて！すみません、うちの変態がまた暴走して。」

またキツク言つときますんで・・・

「んな！カズマまでこの私を公衆の面前で罵倒とは、さ流石は私が見込んだ男」

「ふつ、流石は我がライバル」ジェヴオーダン the Bloodborne

相変わらずの勇猛さですね！ですが、この紅魔族随一に爆裂魔法の使い手めぐみんがいる限り

貴方が安泰できる日は来はしません！」

「お前もなに！煽つてんだ！」

変な依頼を出されてしまった、貴方はそれはともかくとルナ嬢に相手いるテーブルに座ってもらつて相談した。

百戦錬磨の獣狩りの貴方も女性という存在にはとんと縁がない。

アクセルの街のマジキチ狩人の恋話って？嘘!?相手は？

決まってるでしょ、ウイズさんよ。ウイズさん。ウイズさん。通い妻の！

やだ！遂に入籍!?

でも籍を入れればあのマジキチも落ち着くかもね

そうだったら私たちも感謝感謝。

あのマジキチの作ったミンチを回収する仕事も減ってくれるじゃん！

どう考えてもギルド職員じゃなくて特殊清掃員になってるもんねー

森の中とかはまだいいけど、暑い日の屋内とか洞窟の中とか最悪だもんねー

というルナ嬢が隙をみてギルドの女性職員がカウンターの向こうでワイワイと騒い

でいる。

貴方は狩の後始末が下手らしい。

第13話

ベルディアが撤退してから数日して、貴方はクエストに張り出されたデストロイヤーの進路調査のための偵察クエストというものを見つけた。

貴方は Destroyer なるもの知らない。

まさか英国海軍の駆逐艦が歩き回っているわけではあるまいし。

知らないことを聞くのは恥ではない、というわけでウイズに聞いてみた。

「ご存知ないんですか？機動要塞デストロイヤー。」

古代に滅んだ魔法王国が作り上げた決戦兵器ですよ」

人間が作り上げた魔王軍ですら相手には出来ないほどの機動力と火力の超兵器。だがウイズによると制御すらできないことで魔王軍からはガン無視。

むしろ人間サイドに多大な被害を長年にわたってもたらし続けているという。

更にいえば作った魔法王国自体も機動兵器に滅ぼされている、馬鹿か。

だが同時に素晴らしい、貴方はかつてロンドン博覧会でも似たような浮遊城が大暴れした例を知っている。

あれほどの巨体を長年にわたって駆動させるなど英国海軍の戦艦の最新の蒸気ター

ピンでも不可能だ。

貴方はぜひそんなものがあれば火薬庫の技術者に渡して何か変態的な発明をしても
らいたいと考えた。

しかしながらここにはもはや火薬庫の技術者はいない。

人間の纏う装甲蒸気鎧ならくそつたれな上位者の輸血も不要で獣狩りができるだ
ろ
う。

蒸気機関を取り付けた重装甲の歩兵だったがこれだけの大出力があればもつと大き
くできるだろう。

貴方は10mくらいの巨大蒸気兵が大暴れするところを想像してみた。

炉心 (Core) と人間を装甲で覆うから…そうだな、Armored Core と
いう名前はどうかだろう。

安直すぎるか。

しかしながら貴方はさしあたっては日銭を稼がなければならぬ。

発明が必要があるから生まれるが、魔王軍と日々死闘を繰り返しているはずの人類側
で武器の需要がないのは不思議だ。

これもエリスとやらのご加護かもしれない。

あるいはなろう的御都合主義だろうか。

だが遅かれ早かれ人類は結局のところ戦争という原動力によって文明を進歩させるだろう。

貴方は暇を持って余すとそこらへんの紙に蒸気甲冑の設計図を書いてみた。

啓蒙99の貴方にとつては蒸気機関の設計は手慰みの一環に過ぎない。

もしかしたら貴方はヤーナムに来る前は技術者か発明家か何かのプロフェッショナルだったのかもしれない。

キャラメイク的にそんな感じがする

発明家というロマン成分の多い職業ならそんなに悪くないだろう。

実際には穀潰しの変人一歩手前だとしても世界を変えるかもしれない者というのはそう多くない。

そういえば貴方の家のほぼ居候のウイズの店にも商品が並んでいるがなかなか面白いものがあつた。

確か紅魔族の郷で生産している商品だったとか、貴方は設計図を書くことはできたが材料も生産設備も職人もいない現状ではどうしようもない。

アクセルの街には刀鍛冶くらいはいるが、ずっと大規模な物が必要だ。

新たな青年期を迎えるためにも…青年期って何だっけ？

「それでしたら私が懇意にしている職人さんのところへ送ってみてはいかがですか？

私もその人からずっと仕入れてるんですよ」

あのガラクタのことだろうか？

貴方はウイズに実用性皆無か街の冒険者の平均収支的に見合わない商品を仕入れるのは止めるように注意した。

「ぜつ、絶対売れますよお！見る人が見れば価値があるってすぐわかりますから！」

ならばと貴方はパイルハンマーを取り出した。

「何ですか、これ？」

貴方は武器だと説明した、ウイズに本当に商才があるのならあつという間に売れるはずだ。

「なー言いましたね！んもう、こうなったら意地でも売ってあげるんですから！」豊満な部分を強調して貴方のパイルバンカーを店の陳列棚に置く。

だが置く場所はなぜ爆発物の棚なのか。

貴方はウイズの魔道具店でお茶を飲むと再び狩に出かけた。

野外用のトイレは買っておいだ、街に入るたびに血糊のついた武器を垂らして罰金を取られる羽目になるのは敵わない。

それにしても頭のおかしい職人だがこれは案外使える。

売れない欠点としては簡易トイレのくせに出て来る水の量が多すぎることで、音が大き

きすぎてモンスターを集めてしまうことくらいだ。

「だが出て来る水の量が個人の用足しにはやたら多いとしても聖杯ダンジョンのクソ溜まりを流しきるにはまるで足りない。」

音に至っては大砲をぶつ放す貴方がた狩人が今更という感じである。

「もしもゆんゆんが一緒に聖杯に潜りたいと言いついたらこれをもっていくといいだろう。」

「きつと腐臭も少しはマシになる。」

「貴方はウイズの店を朝に出発した、そして夕方には見に帰って来るとも。」

「貴方はゆんゆんと共に出発した。」

「結局のところ、マンティコアはたった4体しか狩れなかった。」

「最近乱獲し過ぎたせいか数が少なくなってしまったのだろうか。」

「それにしてもこの世界ではかなりの強敵と言われるモンスターが数が少なくなるほど乱獲されるとは、一体どんな強い冒険者が乱獲したのだろうか。」

「この世界にも獲物にふさわしい獣がいるのかと思うと餌付く。」

「やはり匂い立つな。」

「あ…あのですねえ…」

「ゆんゆんが何かを言い出しそうにしている、それにしても相変わらず露出度の高いそ

の服装は何とかならないのか。

それともあまりのボツチぶりに犬のように盛った雄冒険者と事実関係を持って仲間になつてもらおうというのか。

ゆんゆんは14歳だというが、アリアンナ並みに立派な体つきだ。

これなら娼婦としても立派にやっていけるだろう、貴方は保証した。

露出度が高いにしても、もつと気品のある格好はいくらでもあるだろうに。

これでは娼婦だ。

とはいえ、そこまで露骨に言う事もあるまい。

せいぜいが後で使者ちゃんとの取引を進める程度である。

ちなみにオススメはマリアの狩衣装である、女の子だしな。

「き、聞きたいことがあるんです」

(狩人の技は) 体で覚えてもらいたいのだがと伝えた。

「か、身体で覚えろだなんて…は、恥ずかしいので優しくしてください」

内臓攻撃が恥ずかしいとは、だが優しい内臓攻撃は貴方の専門外だ。

それは時計塔のマリアの領分である。

チャンスと思つたら遠慮容赦なく決めるのが貴方のやり方だ。

「い、いえほら。私日頃からお世話になつてるのに下宿代すら払ってないし…

そ、それでですね。貴方に何かプレゼントをと思ってお人形ちゃんに貴方が欲しいものを聞いてみたんです」

貴方は特に何も求めてはいない。

だが確かに本当に欲するものは何か？と問われれば貴方には特にならない。

だが観察力に優れた人形ちゃんなら確かに貴方が真に欲するものを言い当ててくれるかもしれない。

「わ、わかりました…」

するとゆんゆんは上着を脱ぎ、ブラウスのボタンを外して脱ぎ始めた。

貴方はなぜ彼女が脱ぎ始めるのか理解できない。

だがやはり仮衣装にはその服装は向かないことをようやく理解したのだろうか？「わ！私でよければいつでもどうぞ！」

もう14で、ちゃんと赤ちゃん産めますから！」

理解できない返しが帰って来た、どうやら高まったのは啓蒙ではなく狂気らしい。

：

とりあえず貴方はゆんゆんに服を着るように伝えた。

顔を真っ赤にしてゆんゆんは服を着、涙まじりに話し始める。

「だって！だって、お人形ちゃんに聞いたんです。」

ジエヴォーダンさんが何欲しがりそうかって。

そしたら『赤子を失い、そして赤子を求めてる』って

だから、私がウイズさんの代わりに赤ちゃん産んであげるしかないんです！

だって、ウイズさんアンデッドなんでしょ。子供産めないんですよ！」

そう言うのと泣き始めてしまった。

確かにそうだが、それは上位者の話であつて貴方ではない…

そしてなぜウイズなのか、と聞くと貴方とウイズがいい関係なのに結婚しないのはウイズがアンデッドであるために子供が欲しい貴方がウイズとの結婚を拒んでいるのだと考えたのだと言う。

聞けば聞くほど狂気が高まる話だ、ゆんゆんは実は目玉人形なみの発狂力の持ち主だったのだろうか。

貴方の深海の守りを貫通してくるとは未恐ろしい少女だ。

ボスとして登場したらフレイムインした瞬間に並の冒険者を発狂死させてくるかもしれない。

というよりもいつのまに貴方とウイズの結婚話が持ち上がったのだろうか？

貴方はそんな気を発した気は全くない、ウイズはあくまでも友人の一人に過ぎない。

「ぐすん、だってギルドの人達がみんな噂してましたよ。」

もういい関係の男女が朝昼晩と寝起きを共にしてたらもう後はゴールインまで一直線だつて」

だがそれはゆんゆんの世話をするためだろう、彼女は見た目通り母性の強い人だから人形に入れ込んで自分をおろそかにするゆんゆんを見ていられなかつたのだろう。

「え、それじゃあ！ウイズさんとご結婚しても、人形ちゃんには会いに来てもいいですよね!？」

ばあ顔と顔を輝かし何事かを言い出した。

貴方は更に更に困惑した、唐突に『匂い立つなあ』と言われながらガスコイン神父に殺された時もこれくらい動揺した。

世の中の狩人の半分はあそこで挫折するらしい、嘆かわしいことだ。

貴方はドツと疲れた、冒険アメントーズ狩だつてもう少し疲れないだろう。

ところでマンティコアは最近乱獲し過ぎたせいか数が少なくなつてしまったのだろうか。

聖杯なら素材を放り込むか、適当に簡易聖杯で検索すればいくらでもリスポーンするのに面倒なことだ。

貴方はそういう風に思考を切り替えて狂気を抑えた。

アクセルの街はもうすぐだ、ウイズは相変わらず働けば働くほど借金を増やすのだろ

う。

夕方前にウイズの魔道具店によるとウイズは貴方に

「売れましたよ！売れたんです！」

驚くことにパイルハンマーが売れたらしい、工事現場の親方が基礎工事の打ち込みや碎石にツルハシより便利だと買ったのだという。

貴方は確かにそういう工事現場の道具から作られたとは聞いたとはあるが

それは武器としてと言えるのだろうか？

やはりウイズの商才はどこか別の方向に向いているとしか言えない。

「さあ、今日は商品も売れましたし！」

ウイズは店に閉店の看板をかけると帰り支度を始めた。

いつから貴方の家が彼女の帰る場所になったのだろうか、確かに世間ではこれを帰宅というのだろうか。

第14話

ベルディアが現れてから二週間ほど経った。

貴方は相変わらず狩りのクエストを受注し、何であろうと片っ端から狩っていた。

ゴブリンの大群がいるというのなら片っ端から鉈に血を吸わせてミンチにし、ドラゴンがいるというのなら頭を砕いてやっぱり血を吸わせる。

鉄塊のごとき貴方のノコギリ鉈を叩きつけるのだ。

武器というものは穢らわしい獣どもを屠って鍛え上げるのだ。

貴方の平穏な狩りを邪魔するならば誰であろうと狩尽くせばいい。

貴方も時々血に酔って獣化が始まると伝説の狂戦士となりかける。

実に情けない、狩人とは無慈悲で常に氷のように冷酷に狩をするべきだ。

貴方の青年期はまだ遠い、もつと狩に慣れるべきだ。

ニホンジンの中には何を思ったか魔王軍に組みするものもいるという：

穢れた汚物同然の彼らを屠り、その血を流せば何か新しいものが見つかるともしれない。

貴方はぜひニホンジンが貴方を殺そうと襲いかかってくれよう望んだ。

そうすれば後腐れなく、世間体を気にせずには彼らの血肉を手に入れられるからだ。異世界には天使気取りの化け物である上位者がいくらでもいる。

時空の狭間で出会ったかの髑髏の騎士は正しい。

人が連中の為に苦しみ挽がく事など、もはや無いように狩ろう。

穢らわしい神気取りのナメクジども。

だがとりあえずはゴブリンスレイヤーになろう。

差し当たっては1000人：いや1000匹斬りと洒落込むのだ。

ゴブリンは定期的に人里に降りてきて略奪をする……もっぱら繁殖のしすぎによる食糧不足が原因だ。

故に貴方は彼らを哀れんで狩りをするの。

デユラは貴方は無慈悲だと言ったがそれは違う、

今の貴方には慈悲があるから狩るのだ。

結局やつてゐることは全く変わらないが。

とりあえず貴方が晩御飯の為に家に帰るまでに半数は連中自身の晩飯になるだろう。

そういうええあの首なし騎士はどうしたろうか。

アンデッドということで血も期待できないし貴方は放っておいたし忘れていた。

どちらにせよ、彼は人であつて獣では無いのだから狩る必要を貴方は認めなかった。

それにベルディア討伐は王国騎士の昔からの悲願らしい。

狩人が獲物を横取りされるときに怒りと悲しみはよくわかる。

故に貴方は他人の獲物を横取りするような真似はしたく無い。

貴方は片つ端からゴブリンたちを狩ってあげた、優しいのだ。

彼らは数を減らし、ほうほうのていで引き上げていった。

血に酔うべからず、常に冷酷に殺戮するのだ。

貴方は前ほどの血の熱狂を起こさずに済んだ。

鈍でゴブリンを両断しようが頭蓋をたたき潰そうがどうとも思わないし何も感じない。

彼らにも巢では飢えた幼子がいるのだろう。

そういえばそうだな、それも味気ないが。

午後になって貴方はアクセルの街に帰ってきた。

簡易トイレで血肉に塗れた衣装と武器は洗い清めたのでクレームは出ない。

「あーお帰りなさい、お…ジエヴォーダンさん！」

ゆんゆんが貴方を家で迎えてくれた。

貴方は徐々に狩りでなく家での生活に満足を覚えつつあった、青年期を目指す貴方にはあつてはならないことだ…

このまま、満足して思い出を積み上げてゆけば貴方は温もりの残骸に埋もれて生きることになるかもしれない。

貴方が狩ってきた者たちの為に、殺してきた者たちの為にも貴方は平安を求めてはいけない。

引き返すことも、後悔することも許されない。

後悔をするくらいなら、なぜ病を受け入れて朽ち果てなかったのか。

後悔するくらいなら最初から何も望まなければよかったのだ。

どうして与えられた命で満足できなかったのか。

更に屍を天より高く積み上げ、人類の青年期への道を開くのだ。

だがここで彼女らと共に家族ごっこをしてもいいだろう。

一時羽を休めるのも、また幼子には必要なのだから。

家で貴方は4人での夕食を楽しんだ。

相変わらずウイズは全く売れない店の店主だし

ゆんゆんはまたパーティーを組むことに失敗した。

それらを全て受け入れ許すのが人形ちゃんであり、貴方である。

どこぞのロクデナシの天使気取りの化け物共と違って貴方は家庭的なのだ。

やっぱ、上位者死すべき慈悲は無い。

貴方は本来の務め、上位者狩りの夜を始めることを誓った。

翌朝

『緊急クエスト！冒険者は武装して城門前に集合してください！』

「なぜ城に來ないのだ、この人でなしどもがああああつ!!」

また例のデュラハンが城に爆裂魔法を打ち込まれたらしく怒鳴り込んできたらしい。

ウイズに夕食の時に聞いた話では

「ベルディアさんですか？

えつとですねえ、昔は勇敢な騎士だったけど

武功を立て過ぎて使えていた国に疎まれて冤罪で処刑されたそうで

それが原因で今の首無し騎士になったそうですよ」

なんと、一回死んだだけでなんとなく上位者っぽいのに転生できるとは。

異世界のアンデッド転生とは便利だと思った。

もつとも死ぬ前の鍛錬や死亡の理由、本人の怨念など様々な要素があるので単純に死

ねば転生とはいかないらしい。

だが同情すべき点はあるとも思った。

あまりにも哀れな最後ではないか。

「それですね、私も魔王軍の幹部として魔王城にいた時は

毎回セクハラされてたんですよ、あれって絶対わざと私の足元に頭を転がしてスカートの中を覗き見たり

私の胸元に投げ込んだり…だいたい私がリッチーになったのもベルディアさんの呪いが原因で…」

貴方は前言を撤回した、あいつは今度来たら内臓攻撃で引っこ抜いてから狩る。

そしてノコノコとまた貴方の前に現れたというわけだ。

正確にいうとまた性懲りもなく爆裂魔法を打ち込んだめぐみんの前にだが。

それにしても打ち込んでくる奴を実行する前に捕まえるとか、もう城を引き払うとか選択肢はいくらでもあったはずだが？

ひよつとして撃ち込まれることを期待していたのだろうか。

ダクネスに呪いをかけて慰み者にしようとしたし、ウィズにはセクハラを繰り返していたそうだし

これはもう確信犯だろう。

ベルディアはオーク並みの変態アンデッドだと貴方はギルドの情報に追記しておいた。

情報は大事だな。

第15話

貴方はアクセルの街に現れたベルディアをその他大勢の冒険者達と見物している。

どうやら彼はあのカズマ少年のパーティーに怒っているようだ。

ダクネス嬢が理想の騎士だったとか…ふむ、成る程

あの変態騎士は金髪碧眼で豊満な女騎士を無理矢理犯すのが理想だったのか…

「え、変態?」

「確かにそういう情報が書いてあったな…」

「やだ…魔王軍幹部でレ●●魔?…」

冒険者の間でベルディアはレイ●●魔で女冒険者にピーするのが趣味だという噂が出回っていた。

謂れの無い…もつともセクハラ魔だということには反論の余地がない事実だが、常識的に考えて魔王軍の幹部がセクハラ程度で済ませるはずがないという常識…

理不尽だがある意味自業自得な中傷がベルディアを襲う!

「ちちちちち違おうわ!なに変な噂流しとるんだ貴様ら!」

なに!?いじめ!?これ新手の陰険ないじめ!?

爆裂魔法は相変わらず撃ち込んでくるし、変な噂は流されるしもう切れるよ!!俺の我慢がマツハで限界!」

「人でなしって?爆裂魔法なんか撃ち込んでねーぞ!」

「何を言ってるんだ!あれから毎日毎日その頭のおかしい紅魔族の娘が撃ち込んで来とるだろうが!」

どうやらめぐみん嬢はあれからも毎日大きくて硬いあの城に行っていたらしい。遂にキャラまで崩壊してアクセルの街の前でキレまくるベルディア。

それにしても一体誰がめぐみんを爆裂魔法を撃った後に回収していたのだろうか。

「ひたいひたい!かじゆまあ!だってあいつのせいで碌なクエスト無いんだもん!」

バイト先の店長がコロツケが売れないと怒るのよお!」

わかった。

「聞け、愚か者ども。」

この俺が真に頭に来て居る事は、爆裂魔法や謂れの無い噂だけではない。

貴様らには仲間の死に報いる気概は無かったのか!?

この俺も、生前は真つ当な騎士のつもりだった。

あの仲間を庇って呪いに掛ったクルセイダーを

騎士の鏡の様なあの者を、みすみす見殺しにする様な真似をしおって!」

すると後からダクネスが現れた…

「や、やあ……。その……。騎士の鏡などと……」

話が聞こえたのか照れくさそうに頬を掻いている。

…

「なにになに？ あのデュラハン、あれから毎日私たちが来るの待つてたわけ!？」

あの後すぐに呪い解かれたのも知らないで、何それウケるんですけど！ ちよーウケるんですけど、プークスクスウ!!

かわいいそー、あははははは！

その後はアクアのターンアンデッドが直撃したり、

「ふっ、駆け出し冒険者の街のアークプリーストの浄化魔法など

神聖魔法対策をしたこの俺に通用する訳が——ぎやあーつつ!!」

「ね、ねえカズマ。おかしいわ！全然効いてないみたい！」

「いや、ぎやーって叫んでたろ」

ところで自分の呪いがあつさり解除されたことは忘れていたのだろうか？ 攻撃が雑魚だと思って回避行動を怠るなど狩人失格である。

いかなる攻撃も一撃必殺だと仮定し常に最適な回避行動を取るべきであろう。

もつとも彼は狩人ではなくアンデッドなのでどうこういふべきものでもあるまいが。

遂に怒ったベルディアがアンデッドナイトを召喚したりした。

「もはや遠慮せんで！ 預言者の言う堕ちてきた光の調査なぞ、街ごと滅ぼしてからやればいい。態々この俺が相手をしてやるまでもない。アンデッドナイト達よ！ この街の連中に地獄を見せてやれ！」

それは困る、貴方の研究はまだ始まったばかりだし気に入った本拠地を壊されるのは避けたい。

故に貴方はアクセルの街に向かってきたアンデッドナイトの大軍に単身で立ち向かった。

BGM Ash Crow

「む…貴様…ふふふ、駆け出し冒険者の中にも勇敢な者はあのクルセイダー以外にもいるようだな。

勇氣は認めるが…いや勇氣と無謀は違うぞ？」

別に問題はない、似たような連中なら殺してきたし殺し続けるだろう。

貴方がアンデッドの前に歩いて行くと瞬時に狩道具のノコギリ鉋を變形させ薙ぎ払う。

鉄塊そのものを叩きつけるとアンデッドが剣や盾で防ごうとする。

ガアンと鋼鉄が打ち合うとアンデッド数体が粉微塵になって宙を舞った。

貴方はアンデッドナイトの脆さに驚いた。

やはり肉ではなく神秘だけで繋がっているのではしつかりと繋がられないらしい。

つまりタフネスさではスケルトンよりゾンビの方が上という常識である。

「驚いだぞ…駆け出しの街だと聞いていたが、その力、技量。」

貴様のような上級冒険者がいるとはな…ソードマスターか？」

ベルディアも感心している。

「だがその程度ではこのアンデッドナイトの大軍を相手しきることはできまい！」

確かに次から次へと物量に任せて押してくるアンデッドの大軍は貴方にとっては脅威だ。

先頭を倒しては後退してもいずれば追いつかれて囲まれてしまうだろう。貴方はガトリング砲を掃射してできるだけ距離を詰められないうちに掃射した。

数秒の掃射で更に第2陣のアンデッドが数十体粉碎されるがあつという間に弾丸切れを起こす。

「ほう…その武器、かつて俺が屠ったチート持ちのニホンジンの中に似たような物を持つていた奴がいたぞ。確か“ジュウ”だったな」

ベルディアは自らに向かって飛んできた銃弾を大剣を盾にして弾く。

超音速で飛んできた銃弾を防ぐは恐るべき剣筋だ。

アクアに煽られてお笑い要員になりつつあるが魔王軍幹部の実力は本物だということだ。

「だがこの程度の威力では俺は倒せんぞ?」

もちろん、貴方にしてもベルディアを遠距離から撃ち続けて倒せるとは思っていない。

そもそも弾丸の方があつという間に尽きるだろう。

貴方は弾切れを起こしたガトリング砲を捨てる。

弾丸の消費が激しいのが欠点だ、長期戦には向かない。

「終わりか?素晴らしい戦士だったが…行け!アンデッドナイト達よ!」

そしてアンデッドナイト達が向かってくる…アクアの方に向かって。

「アルエー!」

自称女神を追いかけ回す不死者の騎士団

「こ、こらっ、お前達! そんなプリースト一人ばかり狙ってないで、ちゃんと他の冒険者や町の住民を血祭りに! き、聞いてない。どうなってるんだ一体?」

だがこれはチャンスでもある、貴方はカズマ少年達に不死者の騎士団の相手をしてくれるように伝えた。

ボスキヤラは貴方の獲物だ、これでようやく狩りができる。

貴方はドラゴン相手にすら放たなかつた絶殺の殺気を醸し出す。

これほどの獲物に全力で挑みかからぬなどあり得ない。

「やはりな…その殺気、俺ですら武者震いが止まらん。

成る程…貴様が光…つまり勇者というわけか」

もちろん貴方は勇者などではない、勇者とは人々に希望を与える存在らしいが

貴方が人々に与えられるのは狂気と絶望と殺戮と啓蒙だけである。

どつちかというところ魔王に近い。

「おおお、なんという…貴様…一体どれだけの修羅場をくぐればそんな目ができる？ 深淵よりもなお暗い目など魔王軍の幹部の中にもおるまい」この程度の目など一夜で誰でもなる。

「いいぞ…それでこそ勇者というわけか。

わかる…わかるぞ…お前の実力、神器頼りの薄っぺらい連中とは厚みが違う…

我が名は魔王軍幹部『チート殺し』のベルディア。この名を胸に刻み、そして恐怖しながら死に絶えるがいい

行くぞ勇者Y『エクスプロージョン！』へっ？」

その直後、戦闘開始しようとした貴方とベルディアは仲良く轟音と共に巨大な爆裂に包まれた。

…爆発の余波が過ぎ去る頃には、アクセルの街の直ぐ近くに巨大なクレーターが一つ穿たれた。

第16話

地面に大穴を穿った爆裂魔法は、すべての不死の騎士団を跡形もなく消滅させていた。

ベルディアと貴方も姿が見えない。

一日一発だけ放てる人類最強の魔法の威力に、その場に居た冒険者達はしんと静まり返っている。

「クッククック……。我が爆裂魔法を目の当たりにし、誰一人として声も出せない様ですね……」

爆炎が収まった後、ドヤ顔で倒れこむめぐみん。

「お前はああああ！何考えてんだ！バカなの!?!頭おかしいとは思ってたけどそこまでおかしいの!?!」

だが倒れ込んだめぐみんは詰め寄るカズマに倒れながら涙目になって言い返す。

「タタタタ……タイミングはカズマ任せでしたから！私のせいじゃありませんよ！

ふっ、そもそも我が爆裂魔法を発動するときはずっちやけこの眼帯のせいでよく見えませんでしたから。

カズマもわかっていたはずですが、私の爆裂魔法の命中率が低いなんてことは…

つまりこれは全部走っているアンデッドを目標にしろという指示を出したカズマのせい、私は一切悪く無い。

全部カズマのやった事ってことで」

どうもカズマ少年の出したアンデッドナイトとベルディアの一掃作戦は成功したが

：

「ああああああ、あほかー！お前の爆裂魔法に何かを期待した俺がバカだったわー！」

「失敬な！爆裂魔法こそ最強の魔法、現に魔王軍幹部もいまの一撃で倒せたでは無いで
すか！

ふっ、心配はいりませんよ。

我がライバルのあの狩人はあの程度で死ぬはずもなし…」

「いや、死んでなかったらお前がめっちゃお仕置きされるからな。

俺は知らんぞ」

責任をなすりつけ合う人間のクズの図がそこにはあった。

『ついに頭のおかしい紅魔の娘がやっちゃまった』とか、『名前と頭がおかしいけど本当におかしかった』

周りからは流石の空気の読まなさで賞賛？が上がる。

「ききききき、貴様ら〜!!正気か?!味方ごと撃つなんて魔王軍でもやらんぞ?!」

そしてそこには鎧が焦げつつもすくっと立ち上がったベルディアの姿があった。

貴方も立ち上がった、あとでめぐみんはお尻ペンペンだと心に固く固く誓いながら。

「お、お前…今のでデュラハンの俺ならともかく人間のお前が無事ってどうなってるんだこれ…」唐突な爆発には慣れている、あの程度の爆発はアメンドーズビームで慣れたものだ。

すなわち爆風より早くローリングすれば無問題。

あの程度で死んで心折れていてはヤハグルではたちまち壁の花の仲間入りである。

「いや、爆風より早く動くとかおかしいだろ。

っていうかお前大丈夫なのか?あの街の連中に嫌われてるんじゃないのか?

俺ならともかく、同業者のお前まで纏めて撃つなんて…

よかつたら魔王軍の職を推薦紹介してやろうか?」

提示された月給は間違いなく王国の最強冒険者パーティーがクエストこなしている収入と同額かあるいは上回る。

しかも固定給なのだから安定度では段違い、この時点でなぜ王国がまだ生存できてい

るのか不思議だった。

なんと、アクセルの街の眼前で敵の引き抜き勧誘を仕掛けられてしまった。

だが古来より有力な敵の武將を引き抜くのは最も効果的な戦略である。

「うえ…、口の中がジャリジャリする…」

近くの穴では自称女神は起き上がっていた。

彼女も巻き込まれたらしい、貴方よりも爆心地には近かったはずだというのに無傷なのは流石の耐久力と言うべきか。

それとも無駄に頑丈なのか…

貴方は古い狩人（時計塔のマリア様）の遺骨に感謝した、

まことに美しい御方は、死してなお骨の一欠片と雖も美しいものだ。

ああ、美しいマリア様…その身体は血の一滴、骨の一欠片まで美しい。

貴方の身体に流れる血の一部には確かにあの御方の物が混じっている。

とはいえ今の戦闘と加速の業によって水銀弾を使い果たしてしまった。

貴方はちよつと休憩とベルディアに提案し、自らの血を抜いて銃弾の代わりとする。

「お前…自分の血を武器にするってなんか魔族っぽくね？」

本当にそれ人間のスキルだろうな？」

人間（上位者）なので安心してほしい。

「まてええええ！このダクネスが相手になる！」

すると今度はあの頭のおかしいクルセイダーが爛れきった情欲も丸出しで駆けてきた。

「さあ！この私の身体目当てでやってきたデュラハンめが！」

どうせこの前私を慰み者にできなかつた腹いせに

今度は私をこの場で倒して辱めてお約束の公衆面前での

女騎士孕ませ陵辱でもしようという魂胆だろう！

そんな事はさせんぞお！この絶倫デュラハンめ！

さあ！どこからでもかかってくるがいい！」

「ひ、人聞きの悪いことを吹聴するんじや無い！」

もうやだ！この街って初心者向けのくせにこんな変態ばつかなの!?

変態の巣窟なの!?!変態の街アクセルって表記にすつぞコラ！」

魔王軍の地図で変態の街アクセルという表記になってしまいうピンチであった。

更に女騎士を庇う様に、今まで静観するばかりだった他の冒険者達が躍り出た。

数に任せて、たった一人になった首無し騎士を取り囲む。

「ダクネスさんにそんな事はさせないぞ！このエロデュラハンめ！」

「違うって言うてるだろ！あーもう！死にたいらしいな…貴様ら」

首なし騎士は遂にキレてしまったようだ。

「ビビる必要はねえ！ 直ぐにこの街の切り札がやってくる！」

「ああ、魔王軍の幹部だろうが関係ねえ！」

「一斉にかかれば死角ができる！ 囲んでやっちまえ！」

貴方は貧血になったので補給していた、がんばんなさいよー。

すると、首なし騎士は頭を放り投げ落ちる事ない頭を中心に中に瞳を描き出した。

上空の視界から周囲の状況を文字通り見下ろし、自由になった左手で大剣を掴んで周りにから襲ってきた全員を即死させる。

なかなかの手際だ、周囲への攻撃手段に乏しい貴方は感心した。

「アンタなんか、今にミツルギさんが来たら、一撃で斬られちゃうんだから！」

魔法使いの少女の一人がそう声を張り上げる。

ミツルギ、確かアクセルの街での強力なソードマスターだ。

そういうえば彼はどこにいるのか、貴方は彼が魔剣を売りはられて魔剣探索の旅に出たことなど知る由もない。

ついでに言ううとそれを実行したのがカズマ少年だと言うことも。

それにしても相変わらずこの街でのエースとは貴方ではないらしい、残念なことだ。

もっぱらソロで行動しているのが仇になった、ゆんゆんは世間では空気みたいなもの

だから除外。「ではそいつが来るまで……、持ちこたえられるかな!？」

次に魔王軍の幹部に立ちふさがったのはあの変態女騎士だった。

「よせ、ダクネス! お前の剣では無理だ!」

「守る事を生業とする者として、譲れない物がある!」

さあ! 魔王軍の幹部よ! 私の体は蹂躪できても……この街の人々には手を出させはしないぞ!」

「変な妄想はよせ! 俺が誤解されるわ!!」

だが残念ながらベルディアのプロファイルには趣味：セクハラという追記情報がしっかりと記載されているのではや誤解でもなんでもない。

ダクネスとベルディアが剣を重ねるが、ダクネスが攻めると例え相手が止まっても当たらないらしい。

「ええい、期待はずれだ!」

その後もダクネスが貴方視点から見ればワザとベルディアが彼女を殺さないように鎧を削いですりものにしていた。

それに興奮しているが、今のままでは本当に危ない。

BGM 灰よ

遂に見かねた貴方はようやく鉈を振るつた。

ガキンという鋼と鋼が撃ち合う轟音と共にベルディアが貴方のノコギリ鉋を食い止める。

貴方は爆発のダメージを回復させた、冒険者の死は無駄ではなかったのだ。

「なるほど、あくまでも魔王様に逆らおうというのだな。」

俺としても貴様ほどのものとやりあえるのは嬉しいぞ」

30秒後

「ぐはっ！馬鹿な……この魔王様の加護を受けた鎧に亀裂だと！

チート持ちの神器ですら傷もつかんというのに……貴様……一体何者だ!？」

貴方の苛烈な攻撃にベルディアは膝をついた。

貴方は所詮は狩人に過ぎない。

だが貴方はベルディアに実力を無駄に分散させていると感じた。

一週間後に死ぬ呪いなど一瞬の判断が生死を分かつ実戦で何の役に立つというのか。

砕けぬ鎧にしても関節や隙間がないわけではあるまいし、同じ場所に連続して攻撃を受ければこの通りである。

要するに慢心して弱くなった。

「ふふふふふ、全くもってその通りだ。」

呪いだ加護だなどと騎士道が聞いて呆れる。

結局は俺もチート持ち同様に能力に頼って修練を怠った結果がこれか……だがな……」

ベルディアは頭を空中に放り投げ、両手で大剣を構えた。

凄まじい闘気が彼の全身から迸る！

「行くぞ勇者よ……この一撃で全てを決めてくれる！」

ベルディアの渾身の一撃が向かってくるが、貴方はこれを奥義で迎えた。

奥義：ガンパリイ！

「グエッ！」

無防備に空いた一瞬の隙を狙って銃弾を叩き込み、崩れた体制に狩人最強の一撃を叩き込む。

奥義：無慈悲な内臓攻撃！

「バァー！」

肺腑が潰れる音と共に周囲に血を撒き散らしてベルディアは倒れた……

遂に貴方の勝利だ、さてどうしたものか……

貴方は敬意を表してベルディアに油壺をぶつけると鈍に炎を纏わせる。

「あれ？あれあれ？まさかとは思いますが……」

そのまさかである、安心して成仏してもらいたい。

貴方はベルディアの心臓に改めて炎の鉞をぶっ刺した。

「あづうう！」

だが安心してほしい、苦しむのは一瞬だ貴方はカチカチと音を立てる仕掛け爆弾を埋め込んだ。

「え？なにこれ?!爆発?!畜生!やつばお前もあの頭のおかしい連中の一味だチクシヨー！」

爆発音とともに彼は碎け散った。

∴

空に彼の後ろ姿が見えたような気がする∴無茶しやがって∴

第17話

貴方はベルディアを討ち取った。

そしてギルドにおいて特にその成果大として報奨金の3億エリスの支払い、およびこれに協力した他の冒険者にも報奨金が支払われた。

もちろん無茶なクリエイトウォーターのせいで城壁が壊されるなんてこともなくカズマ少年達が借金を背負うことも無かった。

彼らはそれなりの報酬をもらっても相変わらずの貧乏暮らしだった。

もつぱら誰かさんが後先考えずに飲み食い回してしまっせいで、もつとも後先考えるような人間が冒険者になるはずもないが……

そして、その場において貴方に土下座するカズマ少年達の姿があった。

「本当に！本当にすみません！うちの頭の弱い子が頭おかしくて本当にすみません！」
「むぐつ、全部カズマの指示だったんです！私は嫌だって言っただけじゃないとまたパ
ンツ脱がすぞって脅されただけなんです！」

めぐみんも涙ながらに土下座して貴方に謝っている。

「このーお前がやったんだろうが！全部俺にひつかぶせるか！」

それと人の事を変態みたいに言うんじゃない！」

「そうよね…あの冒険者、確かに…」

「例のパンツ魔よ…」

「やだ、日頃から仲間になんか事してるのね…あのデュラハンと同じだわ」

めぐみんはどうやらこの鬼畜なリーダーのせいでやってしまったらしい。

とうわけでお尻ペンペンである。

ところがそんなところに乱入者が現れた、あの仲間思いのクルセイダーである。

「待ってくれ！カズマがそんな指示を出したのは私のせいでもある！」

だから私にお尻ペンペンしてくれ！さあ！構うことはない！仲間の罪は私の罪！

私が肩代わりしよう！さあ！ぜひ私の尻を公衆の面前でパンパンでもペンペンでも

するがいい！

それで彼らの犯した罪が許されるのなら私は喜んで辱めを受けよう！

エリス様に仕えるこの清い身体なら貴方にとつても申し分あるまい！」

このダクネスの仲間を思う行動はギルドに集まった冒険者全員を感動させた。

事情（変態クルセイダー）を知らない人々から見れば彼女の仲間を庇う行為はまさに

騎士の鑑である。

逆に鬼畜のカズマへの評価はクズマやカスマから寄生虫並みに下がった。

「畜生！俺はなにも悪くないのに！」

もともと0なので下がりがりようがない、幸運とは一体何だったのか。

「プハー！しゅわしゅわお代わりー！」

自称女神は仲間のことも知らんふりで貰った討伐協力報酬で酒場で管を巻いていた。こいつこそ人間のクズである、女神だけだ。

そんな殺伐としたギルドへ現れたのが貧乏店主ことウイズである。

冒険者が討伐報酬を貰ったタイミングでの出張売り込みで日頃の赤字を解消しようという魂胆である。

こんな目の付け所があるのになぜいつも赤字なのか、分不相応に過剰品質で高価な品物を仕入れてばかりだからだ。

「皆さーん、入荷したステータス向上ポジションですよー！」

「やった！貧乏店主さんだ！」

「貧乏アークウイザードだ！これで収まる！」

「マジキチ狩人さんのいい人よ！あの人だけが止められるわ！」

「…あのーこれってどういうことでしょうか…」

冒険者達は伝言ゲームで貴方がめぐみんをお尻ペンペンが、ダクネスをペンペン、ダクネスをパンパン。

つまり仲間の不祥事の詫びとして貴方がこのクルセイダーに身体を要求しているという風に伝えてしまった。

瞬時、ウイズの体は凍りついたように動かなくなり目は視点が合わなくなった。

「嘘……嘘……嘘よ……あの人がそんなこと……私にだって手を触れたことないのに……」

やつぱり私には魅力ないんだわ……そんなに溜め込んでたなんて……それなのに……」

呂律は回らず瞳が昏くなる、これはまずい兆候だ。

今彼女がエクスプロージョンを放つたらアクセルの街が吹っ飛ぶ、リッチーにしてアークウイザードの彼女の火力は伊達ではないのだ。

貴方は彼女の肩を掴んで揺さぶり、豊満な物を上に下へと揺すって意識を戻した。

そして事情を説明した。

「はっ……ですよね！やだなあ、私ったら勘違いしちゃって。

そうですね、貴方はそんな人じゃありませんよね」

どんな人だというのか、だが示しはつけねばなるまい。

「帰ったら私をペンペンしてもいいんですよ……うふふふふ、ところで私、大家族に憧れてるんです……協力してくれませんか？」

聖堂街の上層に血の赤子はたくさんいた。貴方も発狂しそうだ。

仕方ない、ここはカズマ少年が悪かったことにして場を収めよう。

貴方はカズマ少年には恨みはないが、運が悪かったと思って死んでもらうことにした。

幼女のめぐみんや献身的なダクネスを痛ぶったら貴方が悪者だが、カズマ少年なら実害はない。

つまりペンペンはカズマ少年である。

「というわけで、ギルドとして冒険者カズマのパーティーの不祥事として彼にペナルティを課すことに同意します。

お尻ペンペン100回の刑です！」

つまりいつもはパンツを剥ぐ側の少年は今、パンツを剥がれる側になった。

尻を出せ。

「嫌だ！嫌だー！」

半狂乱で暴れまわるカズマ少年、だが貴方にしても男の尻をいたぶるつもりはない。

そこでアクセルの街の逞しい男子に彼を処遇してくれるように頼んだ。

「あら、可愛い坊やね。ウフツ、お姉さん貴方みたいな子大好き??」

いつも夢に見ちやうくらいよ」

奇妙な方言？を喋る男性だ。

アクセルの街にはこういう訛りがあるのだろうか？

「やめろ！やめろ！おお！何で俺が！」

「大丈夫、痛くしないから。ふふ、綺麗な肌をしてるのね。

赤ちゃんみたい」

その後、カズマ少年は広場で尻をめちやくちやペンペンされた。

「アーツ！」

彼は正しく、そして幸運だ。

第18話

ミコラーシユは変態であり、変態であるがゆえに恐らくは最も根源に近付いた魔術師でもある

つまり魔術を極めるとは変態を極めるということである

魔術師として上に行けばいくほど啓蒙と変態度が増す

魔術師Ⅱ変態

お高くとまって、変態にならずに根源に近づこうという考えは甘えである。

アクア様はかなりいい加減な異世界転生神だが、ヤーナムの上位者に比べればかなりまし。

あいつらは人間を消耗品くらいにしか思っていないから やっぱ殺して正解だった

だがその点では元の世界に戻すという餌をぶら下げて魔王を討伐させようとする個々の神族も似たようなものだ。

もちろん貴方は魔王をわざわざ狩ろうなどは考えていない。

だがもしも神々が貴方に煩く強要しようものなら、

まずお望み通り魔王城に討ち入って返す刀で天界を焼き滅ぼす所存だ。

魔族も悪魔も天使も神々も片っ端から狩り尽くし遺志を奪うのだ。

貴方こそが血塗れ極めしその手によって神を奪い汚した狩人なのだから。

この狂気と憎悪に満ちた不浄なる地上は人のもの、故に神々も魔族も唯一無二の原理に従うべきである。

すなわち奪うのならばそれは血と鉄火を以って贖うべし、例えそれが神であろうとも。

貴方の愛しい汚濁に手をかけんとするのならば、例え神や悪魔であろうと穢し陵辱の限りを尽くすまで。

エリス様「冗談ですよね（震え声）」

貴方は常に本気だ、常にそうであつたしこれからもそうだろう。

貴方は3億エリスの使い道を考えて。

考えた末に蒸気機関を完成させようという結論に達した。

啓蒙とは人それぞれであるが、つまりは蒸気であつた。素晴らしい。

やはり鉄火ほどの地上に相応しいものはないのだから。

貴方はクリエイトウオーターの魔法に感心した、理想的なのは花鳥風月という圧力を持った水の生成魔法だが複雑なので中々スキルポイントが取れなかつた。

蒸気機関の欠点はどうしても水蒸気を発生させる為に大量の水を必要とすることで

重くなること。だがこのチートな魔法があれば極限まで軽量化が可能だと考えた。

自動車ならばしょっちゅう水を補給せずに済むし軽くて済む。

例えば空を飛ぶことも重量の為に難しかったが、これなら可能になるだろう。

まことに、良い機械とは簡素な構造でありながら力強くなければならない。

魔術や神秘などという頼りないものではない、鋼鉄と蒸気こそが啓蒙なのだ。

我々は思考の次元がいまだに低すぎる、もつと啓蒙が必要だ。

やはりメンシス協会などという神秘と上位者頼りの連中が失敗したのも当然である。

そもそも上位者などインチキ錬金術師と同様のいかがわしい連中を崇めるのが間違っている。

貴方は3億エリスで狩人の工房に蒸気機関を据え付けることにした。

だが薪程度では全く足りない、貴方が必要とする冒険アメンドーズを容易く殴り殺せる蒸気甲冑には英国海軍の新鋭戦艦に匹敵する熱を生み出す何かが必要だ。

旧主の番犬ならボイラーで飼っていけば良い暖房になったのだろうか。

あるいは未来では原子力を利用できるかもしれない。

貴方はウイズとゆんゆんというアークウィザードの同居人を二人も持っているにも関わらず本来は神秘が好きではない。

神秘で殴るより鉄塊にヤスリエンCHANTして殴った方が早くて確実に殺せるのは

常識。

なぜ世間の魔術師が魔法の杖は木製なのか、鋼鉄製の杖を振り回さないのか不思議で仕方ない。

後衛だからという理由で近接に備えないのは甘え。

というわけで、貴方はウイズの為に魔法の杖をアクセルの街の近郊に住む刀鍛冶に打ってもらった。

貴方にとつてウイズはいつも身の回りを世話してくれる大切な人だ。

ゆえに特別なプレゼントが必要だ。

「え？プレゼント!?うふふ、やっぱり…え、いいですよ！それで？どんなのが…」

貴方はウイズに特製の杖を渡した、死者の王たるリッチーにふさわしい立派な杖だ。

それは杖と呼ぶにはあまりにも大き過ぎた

大きく 重く 分厚く そして大雑把過ぎた

それはまさに鉄塊だった

剣としても使える優れものだ。

振り回して使うのだ。

「ええ…」

ウイズの目から光が消えていく、光を宿さぬ昏い目は思索の海に深く潜る前触れだ。

その日、冒険者ギルドへの人生相談を振られたルナ嬢も目を昏くした。

Q：彼氏がプレゼントしてくれた物が名前だけ杖で、どう見ても鉄塊のような大剣なんですが

A：ええと…

昏い目は獣の蕩けた目の兆候だ。

人と獣の境目が曖昧になる獣狩りの夜は近い。

名前だけ杖の大剣をプレゼントとは変わった人間もいる者だ。

アクセルの街にも貴方以外に啓蒙が高い人間がいるのだろうか？

：

スケルトンやゾンビといったアンデッドは血が不味くて嗜めるものじゃない。

ウイズの甘い貴腐ワインのごとき血やゆんゆんの刺激的なシャンパンのような血こ

そ…

おっと、貴方は獣性が高まってしまったようだ。

黒い鴉のイメージで現れた貴方の獣性を押さえ込まなければ怒りと憎悪に飲み込まれるだろう。

『委ねろ…委ねろ…全てを委ねろ…』

この素晴らしく呪わしい汚物に満ちた世界では憎悪は重要だが、手綱を握るべきは貴

方である。

獣性が高まると

：ふう、上位者でありながら人である貴方は獣そして狩人でもある。

矛盾しているようだが

人型のモンスターが貴方相手に大振りの攻撃をするのは自殺行為である。

もつとも小振りの攻撃でもパリイを失敗する気はないが。

百戦錬磨のガンパリイマンである貴方にとって内臓攻撃からの回復はもはやポーションがわりである。

あとはクエストといえば近場のダンジョンの中でいつもの通りあちこちの哀れなア宁德ッドを片っ端から鉄塊で殴って土に返すくらいだろうか。

聖杯ダンジョンでもそうだが、狭い場所に誘き寄せての幕末戦法は貴方の十八番である。

あとは高い場所に陣取って火炎瓶を投げまくったりガトリングでの掃射くらいだろうか。

一方で初心者殺しなるモンスターの討伐依頼を受けると貴方は必ず相手を血臭で誘き寄せてから仕掛け爆弾で脚を潰して、射程外からなぶり殺した。

貴方のダンジョンやヤーナムでの狩の経験が役にたつ、脚を潰してから相手の射程外

から殴り殺す。あるいは地形を利用して、はたまた罫を仕掛けて。

幾星霜、修羅魔道の死線を潜り抜けてきた貴方の経験が狩を成功に導く。

人は弱く、怪物は強い。

それでも戦わねばならないのなら？

ありとあらゆる卑劣外道鬼畜な手段を使つてでも必ず勝たねばならないのだ。

大ぶりの攻撃を誘つてからの内臓攻撃だろうと、人質を取つての騙し討ちだろうと狩という結果が同じなら問題は無い。

騎士道？ 武士道？ 何それ、匂い立つの？

貴方は狩と街の往復に飽きたのでアクセルの街をぶらぶらすることにした。

ダンジョンや森では腑をぶらぶらさせていたが、ここでは特に何もぶらぶらさせていない。

そのうち神々の誰かあたりが腑を媒介に顕現するかもしれないくらいぶらぶらしている。

アクセルの街の冒険者ギルドは今ではほぼ特殊清掃ギルドだ、ルナ嬢の目はますます昏くなりつつある。

実にいいことを言った。

そんな貴方がぶらぶらしていると匂い立つ店を見つけた。

？男性冒険者が二人、路地裏に続く通路の前で何かこそそこそしている。きつと隠しアイテムがあるに違いない。

貴方の瞳がアイテムは隅々までチエツクせよと命ずる、死体は念のため殴ってから漁れとも。

「げっ…狩人さんかよ…あんたにはウイズさんとゆんゆんちゃんがいるだろ…」

立派な物をお持ちの同居人が二人もいるんだからこの店に来る必要なんざないだろ…」

なんのことやらさっぱりわからない。

「何？知らないって…くそつ、俺だってなあ…」

何を泣いているのだろうか？

「おい…はあ、じゃあ男として言うけどさこれは絶対に秘密だぜ？

特に女性陣には」

貴方はアクセルの街に何故かなり高レベルの男性冒険者がいまだに多いのかの謎を聞いた。

啓蒙が1アップした気がする。

第19話

「どうですか？カズマさん、この杖！

冒険者のカズマさんにならきつとぴったりですよ！

ほら：ちよつと持ってみてください、今ならお安くしときますよ！

カズマは「けものころし」を装備した！（250kg

グラグラグラ

お！重い！支えきれない！

「ぶつぷー！カズマあ、あんた男のくせにまともに剣の一つも装備できないの？

そーら、つんつん」

アクアが試しにと剣を背負ったというかしがみついたカズマ少年を煽る。

「ばー馬鹿やめろ！マジで重いんだよ！」

アクアが剣を突つつくと横で脂汗を流しながら懸命に支えていたカズマ少年の腰に激痛が走った！魔女の一撃と呼ばれるそれに耐えられる人間はいない。

その拍子にカズマはバランスを崩し剣の下敷きになった！

下敷きになった拍子に頭を机の角にぶつけた！

グワァン！

鉄塊と自身の体重が合わさって非常に痛い！

カズマの目の前が真っ暗になり、気がつくどエリス様の前に座っていた

さんねん！カズマのぼうけんはここでおわってしまった！

「ふざけんな！何だよ装備したら死ぬって！」

正確にいうと筋力のパラメーターが圧倒的に足りていないので装備すらできていない。

だが世の中にはあの程度の剣を片手で振り回す魔術師が跋扈する魔境があるらしい。

貴方がウイズにプレゼントした杖のせいでカズマ少年が死んでしまったとはまさか

の貴方にも予想外だ。

やはり世の中は意外性に満ちている。

大方の場合、あなたは実に意外だがすんなりとサキユバスの店に入れた。

実に意外である、てつきり『言葉は無粋 押し通れ！』という展開になるものだと思っていた。

実際、ヤーナムにおいて通るとは屍山血河の押し通るとほぼ同義である。

もちろん、あなたは半端な存在では無い。

全身が憎悪と殺意と狂気で構成された誰よりも人間らしい人間である貴方はウイズ

とゆんゆんに手料理をご馳走しようと決意し秋刀魚を買った。

今日はスターゲイジーパイにしよう、そうしよう。

しかしなぜマーマイトがないのか、味噌なる大豆のマーマイトっぽいペーストはあるというのに謎である。

しゅわしゅわはあるのだからきつとマーマイトもあるはずだ、なければ作るまでだ
が。

あなたはアクセルの街のサキユバスのお店に入った。

ここならきつと新たな啓蒙が手に入るはずだ、ついでにマーマイトも。

特に理由はないがきつとそうだ。

『あらーいらつしやいませえ、ようやく来てくれたんですね』

扇情的な殆ど裸と変わらない格好のサキユバスが店に入った貴方に丁寧にお辞儀して迎える。

ようやく？

『ああ、だつてほら狩人さんにはウイズさんがいるでしょ？

流石に未婚の彼女持ちに粉かけるのはねーってことで…

でもここに来たつてことは最近ご無沙汰なんですよ？

あつ？早くも倦怠期？わかりますよ、そういう方も結構多いんです』

冒険者パーティーで恋に落ち結婚する前までは相思相愛でイチヤイチャしていてもいざ結婚してみると思うようには行かず、子供が生まれると冒険者という職業上亭主元気で留守が良い状態になる者が極めて多いらしい。

一夫多妻となると子供の世話は夫婦でというわけにもいかず

夫は馬車馬のように働いて逆に疎遠になるケースがほとんどである。

ハーレムは理想でも現実是非情である。

貴方はサキユバスのサービスが必要とされる痛々しい現実を思い知った。

しかしここは名目上は喫茶店では無いだろうか？

貴方が質問すると本番は無しだという、本番とは何だろうか？

あくまでも客が望む夢を見させるというのが税金と風営法対策からのこの店の妥協点らしい。

よくわからない、啓蒙が低いようだ。

貴方は店の中という事で帽子とコートを外してラックにかけた。

周りから他のサキユバスのヒソヒソと声がある

『やだ、超イケメン!?!』

『新人? 誰々?』

『えっ嘘、あのマジキチ狩人? イケメンだったんだ…いつも血生臭いから』

『イケメン＋高収入とか、ウイズさんやるなあ…』

どうやら貴方はいわゆるモテ期に突入したらしい、しかしヤーンナムではもつとモテていたので物足りない。

勿論、あそこで好きというのは殺したいほど好きとほぼ同義なのでよく殺された。すごい時には30秒に一回は殺された、それくらい激しく情熱的だった。

英国にあるまじき情熱的な都市だ。

喫茶店ならあるかもしれない、というわけであなはマーマイトを注文した

『ええ…』

やはり無いらしい。

何ということだろう、

こんなことなら異世界転生の特典をマーマイト一生分にすべきだったと悔やんだが後の祭りである。

『マーマイト？はありませんけど、マーマイトの夢なら多分大丈夫ですよ！』

周りには機織の人やカズマ少年が真剣な真剣な表情でアンケートに何かを書き込んでいる。

貴方はマーマイトにフィッシュ&チップスに紅茶を注文した。

『ええ…』

夢は貴方の独壇場だ、どれくらい独断かという夢と現の境目をなくすことなど貴方にとつては紅茶を淹れるくらい容易い。

貴方はテキトーに手近な幼いサキユバスに注文した。

『はい、ご指名ありがとうございます！』

ご注文は…ええ…』

なぜ皆そんな反応を返すのか、まるで理解できない。

『これってお食事ですよね…』

勿論、喫茶店なのだから食事とお茶を注文するのは当然だろう。

『いや、確かにそうですね…何だろう、凄く違和感がある…どうしよう…』

幼い少女は困ってしまった。

仕方ないので夢を見させて欲しいと注文した。

『うう…わかりました！お客様の望みを叶えるのがプロというものですよね！』

紅茶はアールグレイで頼む、F&Cは揚げたてで熱々のを。

『ええ…明らかに淫夢じゃありませんよね』

10分後…

貴方は夢魔のサービスを受けた、しかしやはりダメだった。

F&Cの食感もマーマイトのあの風味も全く再現できてはいない。

所詮夢は夢だと貴方は言い切った。

『うつ、すいません…』

だが周りの男性諸兄からはなぜか冷たい視線が刺さる。

『所詮…夢…』

『わかつてるんだ、そんなことはわかつてるんだ…』

『普段から…ウイズさんとゆんゆんちゃんと言いたいにやりまくってるあんたに何がわかるんだ！クソオ！』

猿みたいにはない、上位者だ。

なぜか周りの客が泣いたり笑ったり、怒り始める。

危険な兆候だ、ここにもゴースの影響が現れ始めたのだろうか？

するとこの店の先輩サキュバスが現れた

『申し訳ありません、あくまでも淫夢ならと限定しておきましたのに…』

それと…やはりお客様は…』

なるほど、だが貴方には淫夢の必要性は無い。上位者の赤子は夢とうつつの間に現れるのだから。

そしてその先をいう必要性も…

夢を操るサキュバスとは気づいてみれば悪夢を支配する貴方の下位者に他ならない。

見てみれば、随分と目の保養のしがいのある後輩もいたものだ。

『つっし…失礼しました』

なぜかサキュバスは顔を赤くしている。

貴方が赤子の事を考えれば当然、彼女達に影響が出る…

わかりやすくいうと全員貴方の影響下で夢をみるとバツチリ妊娠する。

上位者の影響は特に夢に近い女性に強く働くのだ。

悪夢の世界ではオドンが孕ませ寄生上位者であったように、

貴方もその気になれば夢に近い彼女達全員を妊娠させることなど容易なこと。

だが、そんなやり方が人の世で許されるはずもない。

啓蒙があつても、愛情がなければそこに進化は生まれないのだ。

(すっい…この人の精気…こんな人の夢に惚えただけで孕んじやいそう…)

やだ、子宮が疼いちゃう…)

そんな貴方の気持ちも知らずに先輩サキュバスは顔を赤くしていた。

仕方ないので貴方は結局、紅茶を注文し嗜んだ。

マーマイトもF&Cもないが、紅茶は美味であつた。

貴方は暇があつたらまたこの店に来ようと考えた…

一方、貴方が店を去るとサキュバス達は先輩サキュバスが貴方に惚れたただの

ウイズさんの彼氏に粉かけただのワイワイと姦しかった。

「なになに？あのひと？うーん、確かにイケメンだけどねえ、彼女持ちでしょ？」

「いくら夢魔だからって人の物に手をつけるのはねえ？」

「ばっかねえ、そこが悪魔の腕の見せ所でしょ？一層の事ウイズさんと3Pとかどうよ？」

「先輩、あの人に惚れたって？うん、確かに精気は凄かったよね。」

キスどころか夢に見るだけで孕まされちゃいそう」

「あんたねえ…夢だけで孕まされるってどんだけウブな発想してりやそうなるのよ」
そして夢で孕むというのはヤーナムではごくありふれた現象でもある。

第20話

ノーステイリスとヤーナム、どっちが最悪に魔境かつて？

…うーん

魔王軍の幹部、ベルディアを狩ってからは貴方の生活もしばらくは落ち着いたものだった。

それもこれも今は紅魔族の里に例の懸賞金で何かと注文したり、工房そのものを拡張したりで貴方もすっかり狩人の本業を中断しているからだ。

今は狩りにはゆんゆんがもつぱらソロで行っている。

今はまだ未熟だが、きつと近い将来に聖杯デブマラソンもできるようになるだろう。

紅魔族の基本スタンスは売られた喧嘩は買うというものらしい。

実に貴方と気が合いそうな民族では無いか、貴方もよく喧嘩を売ったり買ったりして殺したり殺されたりしていた。

特に酷かったのが悪夢の辺境だ。

悪夢というだけあってアクセルでいうと、

皆ちよつと近所の店に飴を買いに行くくらいのノリで殺し合う。

特に理由はないが殺し、暇なので殺し、通りすがりに殺し、挨拶がわりに殺す。だが心配はいらない、どんな人間でもちよつと殺したり殺されたりすれば立派な狩人になれる。

狩りとは才能など無くとも手を血の海に浸し、死体を天高く山と積むだけで誰でもゲールマンの域にまでいつかは達せられるものだ。

時空の歪んだヤーナムで一体どれだけの狩人が殺されては蘇り、また殺されたのか：ヤーナムは今でも魔界が溢れかえっているのです、きつと。

皆も異世界転生の折には是非ヤーナムに転生しよう。

ヤーナムは血と臓物と汚物に塗れた最高のファンタジー異世界だ。

獣（獣狩り）はいても除け者（殺されずに済む者）はいないのだから。

本当の愛（瞳と啓蒙）はきつとそこにあるのです。

アクセルの街は奇妙な事に殺しあいほとんどない、別にヤーナムでも殺しあいは少し活発なだけだが。

おかげで死体が増えすぎて下水道から溢れかえっているなんてしよつちゆうである。

ヤーナムの死体の半分ほどは貴方が作ったという自負がある。

もつとも夢を見るとまたいつの間にか復活しているのでまた殺し直しであるのが残念だ。

いつかはゆんゆんも死体だまりに脚を浸ける事になるのだろうか？
ならば…連盟はお前（ゆんゆん）を迎えて僥倖だった…

そして貴方が今2番目に有望と考えているのはカズマ少年である。

彼は確かに弱い、今のままではヤーナムに行けば5秒と持たないだろう。だがそれこそその子である。

そしてその弱さを克服し、持ち前の狡猾さで生き延びることができれば貴方と同じように立派に獣狩りの狩人として再誕するやもしれない。

もしくは単に死ぬかもしれないが。

どうすればいいのだろうか…ふむ、一度騙して輸血して殺して復活したら成功するかもしれない。

生き返れば成功、死ねば失敗。

しかしこのアクセルの街では命が非常に重い。

復活が軽々しくできないこの世界ではたかが命が血の岩のように貴重な存在になっている。

故に他人に気軽に輸血を勧めて殺すか死ぬまで観察という手段は滅多に取れない。

実に残念だ。

と、貴方が冒険者ギルドで考えながらとカズマ少年がトボトボとギルドに入ってきた

のが目に映った。

貴方は挨拶をするかちよつと殺してみるか少しだけ迷ったが、殺すのはいつでも出来るのでとりあえず挨拶した。

「あ、狩人さん…はあ…生きるって辛いですね」

何かはわからないが、この若者は早くも人生に疲れ始めたらしい。

季節は段々と冬になりつつある。

普段は馬小屋に泊まり込みの冒険者も流石に冬の寒さをそこで過ごそうという者はいないので宿屋住まいになるのだが…

「馬小屋が…寒くて辛いです…」

はて？彼のパーティーも他の冒険者と同様に報奨金を貰ったはずでは？

「それがですねえ…あのめぐみんが爆破した城の修理費なんですよー」

聞けば、あのベルディアが占拠していた城は廃城では無くてこの地方の領主の持ち物だったらしい。

それなら占領されたままにするなよと貴方は思った。

そして今の彼らはその爆破した城の修理費を請求され、莫大な額の借金を背負う羽目になったのだという…

その額なんと5000万エリス…

最弱職業の少年が稼げる額ではない。

…流石に哀れなのではないだろうか？

獣狩りのシモンの1/10くらいは哀れだ。

いくら呪われた冒険者とはいえ…あんまりじゃあないか…

「いやいやいや！別に呪われてませんからね！」

本当だろうか？この不運ぶり、この少年はもはや呪われているとしか思えないのだが

…

「本当に呪われてるわけじゃ…あ、あれ？」

カズマ少年の仲間といえば…

自称駄女神

頭のおかしい爆裂娘

性騎士（笑）

ヤーナムの地でもここまで強烈な個性の面々はいな…

いやいたな

金色三角頭のキチガイミンチメーカー、嫉妬!?嫉妬なんですかああ!?

ツンデレ鴉頭の狩人狩り、あれは私の獲物さね。

鳥籠頭おじさん、M a j e s t i c !

こういつた、あまりにも強烈な個性の持ち主達に比べればまだおとなしい気がする。

「オレ…呪われてませんよね…」

大丈夫だ、呪われた地ヤーナムから来た貴方は断言した。

まだ許容範囲だ。

それにしても城を破壊したのはめぐみんなのだから借金はめぐみんなのものなのでは？

「いや…長い間、付き合って回収したのもオレですし。」

それにパーティー組んだ以上はオレにも責任があるから」

なんと、立派な見上げた責任感の持ち主ではないか。

ヤーナムでは到底考えられない人格者だ、あの街の連中は余所者なら死のうが殺そうが御構い無しという態度だった。

それにしても占領された城は放っておいているというのに幹部が討伐されたら責任を棚上げにして八つ当たりとは。

どうやらこここの領主とやらは人面獣心のケダモノらしい。

獣・狩らねば（使命感

「とにかく今は金がいるんです。」

このままでは冬を越せずに凍え死んじゃうし、めぐみんの心労もヤバイんです」
貴方は流石に他の冒険者達が暖かい寝床を手に入れた現状だというのに彼らの状況には同情した。

「え!?じゃあお金かしてくれるんですか?」

それは無理だ、貴方も使ってしまった。

「そうなんですかー、はあやっぱりな…」

彼のパーティーメンバーも掲示板の依頼を見ているが、どれもこれも髑髏マークがどっさり付けられた高難易度の物ばかりだ。

彼の前途は暗い。

第21話

もしも狩人様がドリフターズの世界へ行ったら：

別に変わらない

薩人マシン・魔王・源氏スナイパーといった面子にクレイジーサイコパスが増えるだけだ

「命まではいらん、目と脊椎と内臓だけで我慢してやろう」

もちろん卑劣外道鬼畜なエグい戦法をむしろ喜んでとる

「とりあえず死体にすれば何か落とすだろ（毒メス投げながら）」

ゆんゆんがウイズのお店に来るといつものように

店員さんが彼女をお迎えする。

「あらー！いつも可愛いわね」

ウエヘヘという笑い声と共にゆんゆんを迎えるのは狩人を慕う使者達だ。

言葉はわからずとも、可愛らしいものですね（人形ちゃん

ゆんゆんがプレゼントしたお揃いのリボンをつけてお洒落のつもりらしい。

本人達が気に入っているのなら、まあ良いではないか。

この世界には養殖なる概念があり、自身で敵を倒さずパーティーメンバーに倒してもらっても、トドメさえさせば自分に経験値が入るらしい。

しかしそれで強くなれるかどうかは貴方は疑問だ。

成る程、確かに敵なら倒せるだろう。

だが本当の強敵、恐ろしい獣との遭遇戦では？

結局のところ、物を言うのはどれだけ絶望を焚べたかにかかっている。

助言者の助言。

何も分からずとも、ただ獣を狩ればいい。

それは真理である、ろくな経験もなしに“獣”に臨んでも“死ぬ”だけだ。

「それでですね、狩人さんはやっぱり凄いですよ！

この前なんか魔王軍の幹部を簡単にやっつけちゃうし」

ゆんゆんは友達（使者）に友達（狂人）自慢をしている。

無論、使者達は貴方の長き一夜の冥府魔道についてはよく知っている。

たとえ別の夢の中だろうと、たかが一回死んだだけの新人不死者に遅れを取るなどと

は悪夢にも見ない。

死んで強くなり、死んで勝つ。

それこそが狩人が狩人たる所以である。

であるならば、なればこそ。

一度しか死ねないこの世界の住人の命はとても重く尊い。

貴方自身はそれで良いと思った、命は一つしかないからこそ美しく尊い。

一山いくらの狩人のそれとは比べようもなく貴重なそれを無為にすることは許されないのだ。

「私もどうすれば狩人さんみたいになれるかな?」

ヤーナムへ行けば誰でも簡単よ。

これは冗談だが。

いうまでも無く、自身は気づいていないかもしれない。

ゆんゆんは素晴らしいマジックハンターになるだろう。

技量よりの杖とライト・オブ・セイバーの組み合わせは極めて物魔双方でバランスが取れた良い魔法戦士スタイルに仕上がっている。

ここから更に技量から神秘を強化してゆき、落葉装備のマリアの狩衣装を装備して行けば

“豊満なるマリア”を名乗ってもいいだろう。

物語は円となって繰り返し返されるのだろうか?

ところで季節はすっかり冬に突入した。

例のゆんゆんの“大親友”のめぐみんの属するパーティーは相変わらず貧乏生活から脱出できていなかった。

ギルドに聞いたところではなんでも雪の精討伐に出かけたらしいが？

「なぜ戦闘力皆無の雪の精にこれだけの賞金がかかっているかわかります？」
知らん、彷徨う悪夢みたいなもんだらう。

確かに弱いのが、よくとんでもないところにいるので遠回しに死亡原因になったりする。

だが雪の精を討伐していると冬將軍が現れるとか…

冬で將軍というとちよつと違うが『嫉妬!?嫉妬なんですかああああ!?』

の金色三角の師匠のローゲリウスが思い浮かんだ。

彼は確かに強かった、しかし実はカインハーストの血舐めの方がうざかったのは内緒だ。

では雪精も倒していると突然血舐めになって襲いかかってくるのだろうか？

カインハーストのは普通に一匹でもベルディアより強いのでできれば相手にしたくないのだが。

ちなみに3億エリスがかの將軍にかけられた報奨金らしい。

基本は強さで決まるが、一般人にはほぼ無害なためにこの値段だとか。

強さと被害度によって懸賞金は総合的に決定されるらしい。では、もしも貴方が上位者としての力を思う存分ふるつたらどれだけの報奨金がかけるだろうか？

月の魔物の力をふるい、世界を赤い月の儀式によって深淵に飲み込み世界そのものをヤーナムと化す。

軽く1000億エリスは降らないと思うのだがどうだろう。

だが今となってはわからない、もはや貴方の上位者としての力は封じたのだから。

そして再び血によって人となった貴方はまたも新たななる人の進化を望む。

そもそも啓蒙とは、血の穢れにより得るもの。

では穢れとは？それは人中に潜む虫であり連盟が見出すそれである。

虫とはそもそも何か、人中の淀みであり導きの光。

結局のところ、聖剣が見出した“導き”とは下等なカラスにすら宿る虫でしかなかった。

だが虫が人間性を導くのもまた事実である。

穢れとは人間性。

水清ければ不魚住とは言うが、穢れなき清浄さに命は宿らないのだ。

アンデッドとは人間性なき清浄さ無機質さゆえに命を宿さぬ。

では、ならばならば…

上位者とは結局のところ人でしかなかったのだ。

それは貴方自身が証明している。

狩るもの、狩られるもの、主催者すら人という滑稽な獣狩りの祭りへと成り果てる。

しかし人の形を捨てた物が人であろうか？

逆に人ならざる人の形をしたものはやはりひとではないのだろうか？

ウイレーム先生は教えてはくれなかったが、ここにウイズというポンコツリッチーで
ありながら人の形を捨てていない絶好の例がある。

「へ？私ですか？」

人形ちゃんやんが運んでくれたスコーンと紅茶で午後ティー中の店主である。

働けば働くほど貧乏になるので今の所は店番だが、

遠くない将来には経営の実権を使者達に明け渡す羽目になりそうだ。

ちなみに使者達はどこからともなく聖剣や神祕の武器を持ってきたり、聖杯ダンジョン内にも出張するあたり明らかにウイズよりも有能だ。

「ひ…酷くないですか…確かに貴方の使い魔が優秀なのは認めますけど…」

貴方はお詫びだと言ってウイズに贈り物を差し出した。

ペンダントだ。

「え、？ええエエ!? ペンダント!? ペンダントなんで？」

奇妙に声が裏返るが他意はないのだ、かの美しき獣エミリアの持ち物であったが：「た：：大切な思い出の品って。いいんですかこんな高価そうなもの：」

前の杖は失敗だった、持ち主のステータスを確認しなかった貴方の失敗から反省してこのプレゼントだ。

「うふふふ、いいですよ。許してあげます。

ほら、似合いますか？」

虫の宿らぬ器であるウイズに穢れの虫が石となったペンダントはよく似合う。

アンデッドゆえに穢れの虫の宿らぬウイズを人中の穢れで満たした時、彼女は貴方の赤子を宿すのだろうか？

貴方は興味津々だ。

第22話

貴方とウイズが贈り物をしている場面をゆんゆんはドアノブの鍵穴からのぞいていた。

無論、貴方は彼女の息遣いと匂いから感じ取っていた。

しかしながらそんなことを指摘するのは不躰という者だろう。

貴方の優しさの一端でもある。

(ええー！い、今のプロポーズ!?プロポーズだよね?)

彼女も思春期を迎えた女の子である、ゆえにこのような事情については興味津々。

ゆんゆんはウイズがアンデッドであることを知っている、ゆえに恐れているのが子供を成せないことだ。

だからこそ貴方とウイズの間の関係が進展しないのは子を成せないからだと考えている。

そんなことは貴方にとっては微々たることだが、この世界の人間の一般常識からすればおおごとである。

二人と一体はゆんゆんにとって非常に大切な親友とでもいえるべき存在で、彼らのため

ならどんな苦境も甘んじる覚悟である。

かなり重い友情であろう。

ゆえにウイズの体面のためにも自分が代わりに貴方に孕ませてもらい代わりに産むという、

14としては非常にしつかりした覚悟がある。

はつきり言つて、それは世間的にいうと2号さんとか妾とかそういう関係ではないだろうか。

非常に重い友情の押し売りすぎてつらい。

とはいえ、男が一家の長として家を継ぐ次世代を持たねばならぬという周囲からの視線は非常に重いし貴方の故郷の英国では当然にしてもはや義務である。

英国での女性の法的権利・立場は非常に女性不利となっている。

貴方は女性参政権に賛成するほど過激ではないとしても権利の平等という視点からは男性優位の社会に完全に賛成するほどガチガチの保守主義者でもない。

何と言つても大英帝国の女王は女性なのだから。

一夫一妻は理想でもあるが、ホモ・サピエンスは発情したボノボ・あるいはチンパンジーに近い。つまり生物学的には一夫一妻になるようにできていないのだが…

とはいえ、この世界では一夫多妻は夫に力があれば強い子孫を大勢残すという観点か

らかなり寛容だ。

これも魔王軍との戦争が長く続くおかげだろう、この恩恵を最も受けているのが王国貴族だろう。聞くところでは王族は強い男性・あるいは女性冒険者の血を受け入れることで個々の戦闘力を増し支配力の後ろ盾とする。

力こそ正義なのはどこでも変わらない真理である。

女王ヤーナム、時計塔のマリア様を見てもわかるようにカインハーストの王侯貴族の血を受け継ぐ者達も強者である。

どちらもこの世界の魔王より遥かに強かったりする。

強さは尊さでもあるのだ。

貴方は誰から見ても桁違いに強大な冒険者でもある、それこそこのベルゼルグ王国の王侯貴族が娘を嫁がせようと思うくらいには強い。

貴方とウイズの間に子供を期待するのは何も貴方達だけではないのだ。

ゆえに世間体というものがあるので、子供ができないと女性…

つまりウイズの方に厳しい目がいく。

そんな目にあってももらいたくないのでゆんゆんは自分が身代わりになるという選択肢を考え選んだのだ。

しかしそんな彼女達のある意味サイコパスな思考に水をかける者がいた。

ウイズはいまだにペンダントを身につけさずってニヤニヤした笑顔を浮かべている。

貴方は紅茶を嗜み、人形ちゃんに世話をしてもらっていると。

「ああ、狩人さま。貴方様は新しい愛を見つけられたのですね」

そう、愛である。

貴方は人形ちゃんを愛している、母親のように恋人のように娘のように・

「え？」

貴方の言葉にウイズは固まり、思考がフリーズする。

「はい、私も貴方様を愛しております。

それはとても自然なことでございますか？」

ウイズは石化した。

貴方は正しく、そして幸運だ。

とはいえゆんゆんにとっては看過できない状況でもある。

(ええええええええええ?!浮気?!堂々浮気二股宣言!?)

ゆんゆんの目線からすれば最低であるが、同時に彼女は人形を深く深く深く愛している。

ここには愛が多すぎるのか。

貴方は最後の4本目の3本目を人形に手渡した。

なぜか：古工房で手に入れたこれだけは使うことを躊躇った、愛ゆえにである。「ああ、狩人様。なぜでしょう……これから……とても懐かしく、温かさを感じます。

おかしな話ですが、また会える気がするのです。とても懐かしく、とても近い人に……」

ああ人形よ、4本目の3本目によりて汝は遂に人の人ならざる母となるだろう。

人形が母に、まして生命を宿すはずもなく、ゆえにこれは得体の知れぬ者である。

貴方はマリアの宿した血の炎を重ねて3本目に託した、

まさに炎と血は生命の根源そのものであるがゆえに、彼女は最初の火に近き者であったのだろう。

そして貴方もまた狩人ゆえに遺志を継ぎ、炎を継義、そして今託したのである。

すると突然ゆんゆんがドアを開けて入ってきた！

「話は聞かせてもらいました！

わかりました……狩人さん！私……私……私！ウイズさんと人形ちゃんの間までも頑張つて産みますから！」

ますます啓蒙をあげた貴方の弟子であつた。

なんと、狩人は狩人を慕うのだろう。

第23話

貴方は弟子であるゆんゆんと共にギルドにやってきた。

ギルド内は貴方が来るまではワイワイガヤガヤと賑やかだったが、

貴方が血と獣除けの香の慣れ親しんだヤーナムの香りを漂わせながら入って来ると空気が凍った。

「おい……目を合わせるな、死ぬぞ」

「ひっ……ああ、ジエ、ジエウオーダンさーん。よくいらつしやいましたねー（棒）」

これはどうしたことだろうか？

最近は獣を狩っては血を流させ、狩っては流しといった業務をこなしていただけなのに……

皆は貴方と目を合わせないようにしている。

なるほど、目と目があつたらその瞬間に闘争が始まる狩人を恐れているのだ。

諸君らは皆、実に賢明で、正しくそして幸運だ。

そして賢明だったり、勇敢だったり、正しかつたり幸運だつたりとかそういう事が通じないのもヤーナムだ。

貴方はカズマ少年が酔った他の冒険者に絡まれているのを見た。

なんでも彼の立場が羨ましいらしい、最弱職でありながら上級職で美人のメンバーに囲まれて楽しんで冒険できていると思われているとか：

貴方は興味が湧いた、確かにあのヤーナムでも強力な狩人を助けに呼べたのなら強敵にも勝てるだろう。

だがホストが連携をへたつて死ぬとか、青霊がヘマをして強化されたボスが残るとか闇霊が厄介な場所でホスト狩りをするとかそういうデメリットも多い。

そして貴方が召喚する者達はなぜか変態が多かった。

例えば全裸とか人形コスのおっさんとか、頭がカリフラワーでドレスとか冒濫的形状をしたものが圧倒的に多い。

とはいえ実力的には億戦練磨の地底人だ、これも羨ましいに入るのだろうか？

あの冒険者には今度、頭のおかしい狩人御用達の呪われた冒濫聖杯巡りに行かないかと誘ってみよう。

豚、死体巨人、旧主の番犬：きつと満足してくれるはずだ。

貴方はカズマ少年に絡んでいた冒険者ダストに近づいて話しかけた。

彼らは何やらもめているようだが：

「上級職の美人ばかりに囲まれて、良い思いをしているだつて？ ふっぎけんじゃ

ねーぞおめえ！ この俺のどこが恵まれてんだよ！」

どうやらあの少年はパーティーメンバーの件で他の冒険者とトラブルになっているようだ。

美人：

ヤーナムにも美人はたくさんいた、が全員間違いなく何らかの問題を抱えている上に貴方を積極的に殺そうという姿勢の人々であった。

貴方はメンバー交換には興味がない、所詮狩人は狩人。

鐘の音で呼び出したり呼び出されて気まぐれに強力した次の瞬間には派閥の違いから殺しあうのもしよつちゆうの連中にメンバーなど。

「お前変わって欲しいいつつたよな!？」

喜んで変わってやんよ！

ほらほら！今すぐ変わってくれよ！

俺はもう、こいつらの面倒を見るのは金輪際御免なんだよ!!」

少年は勢いのままメンバー交換を酔った冒険者にゴリ押しし、

爽やかな笑顔のまままで新しいメンバーとともに次なる冒険へと旅立っていった：

かつて、貴方も彼のように清々しく血の医療に希望を持って

ヤーナムへと赴いた時があったのだろうか？

蒼ざめた血をなぜ貴方が求めたのか、今となってはわかるはずもない。

だが結果は、待つていたのは狂気と汚穢の世界でしかなかったのだが：

とはいえ慣れれば“たーのしー”ヘーキヘーキ

貴方は意気揚々と冬季のゴブリン退治へと出かけるぞと氣勢をあげるチンピラ冒険者と頭のおかしい三人女子を見守った。

そして掲示板の初心者殺しの狩のクエストをかたつぱしから受注した。

チンピラ冒険者ご一行の彼らはまさに血酒のごとく啓蒙低く獣性高い、良い撒き餌だ。

もちろん違う。

貴方はこの即席パーティーが受けようとしている季節外れのゴブリン討伐に興味を持った。

ゴブリン、例の緑色の亜人でいわゆる人型をした雑魚である。

もつともヤーナムの群衆に比べれば可愛いものだが武装し殺意を持つ相手である以上は油断はしない。

しかし人型である限りはある程度の練習になる。

人を殺すというのはなかなか一般人にとっては難しい注文ゆえ、

まずは殺しやすい相手を殺してみても次に人を殺してみるの悪い選択ではない。

貴方は冒険者組合の殺人練習システムに感心した、もつとも誰であろうと何の感慨もなく殺せる貴方にとっては不要無意味な代物だが。

聖杯が作りし最凶最悪のダンジョン。

一瞬でも油断すれば、死ぬ。

細心の注意を払っていても、やっぱり死ぬ。

たとえ貴方がカンストでも下手に突っ込めば犬ネズミのように死にまくることは間違いない。

というか犬ネズミは普通に強敵だった、小さくとも素早く石すら齧ってしまうネズミが大型犬サイズだったりするのだ。

並みの人間なぞひとたまりもない。

それを言い出したら人食いカエルが初心者向けというこのアクセルの街も大概魔境の気がしてきた。

そう考えれば冒険者とは狩人にもなりうる素質のあるものがゴロゴロいるということだ。

人食い豚が現れてもアクセルの街の冒険者ならきつと大丈夫だ、尻を取れば一瞬で倒せるのだからある意味ではカエルより容易い。

強敵凶悪トラップが満載の上に呪われた儀式によって敵が強化されたり、自らの体力

を減らして挑戦できるのだ。

「え？あのおk…新生アクアパーティーに同行するんですか…」
受付のルナ嬢は貴方たちを狂人を見る目で見た。

第24話

貴方は新生アクアパーティーを見送った。

彼らが初心者殺しに殺されれば仇を討つし、殺されなければ近くまで降りて来た初心者殺しを狩るまで。

それにしても心配なら彼らをカズマ少年も見送るくらいすればいいのに。

流星は鬼畜外道卑劣のカズマである。

貴方がアクセルの街でウイズの指示通りに買い物をしていると

新生パーティーを組んだカズマ少年の一行に出会った。

彼らは受注したクエストを事前に吟味し計画を立て、事前の準備のために買い物をしているところだという。

…正直、あまりにも普通で当然というべき冒険者の姿勢だ。

本当に鬼畜だろうか？

「いやあ、これまではあの3馬鹿とききたら考えなしに受けてその場の勢いだけで攻略しようって脳筋思考だったもんで」

貴方はこれからカズマ少年が攻略するクエスト情報を見せて貰った。

敵の性質や味方の冒険者の特技や地形などを考えた上での事前攻略の案がノートに書いてある。

ここまできつちりと準備をすればもしかして彼は勤勉なのだろうか？

貴方にしてもヤーナムの事前の情報があればあそこまで死ぬことはなかったろう。

もつとも、たとえあつたとしてもカズマ少年より鬼畜さでは上の狂った狩人が放つて

おくはずもないが。

「あ、狩人さん。あのですね、ちよつとお願いがあるんですよ」

何だろうか、いやわかる。

カズマ少年は貴方に狩人のスキルを見せて貰って覚えたいという提案だった。

狩人のスキル：まあいいだろう

貴方とカズマ少年は街中の空き地にやってきた、なるほどこうやって連盟の彼も新規

を勧誘してきたのか。

藁人形を用意させ、左手に銃を構え装填する。

貴方はカズマ少年にいわゆる早撃ちの極意を教えることにした。

狙う必要もない、至近距離。

当たらないなら当たる距離で撃て、効かないなら効くまで近づけ。

狩人の狩では3m以内での接近戦がいつものことだ、外せば死ぬ。

「おお、やっぱかつげえなあ。なんていうか古風で、三銃士みたいな感じで」カズマ少年は銃に憧憬を抱くようだ。

それにしても彼は一体どんな場所で育ったのだろうか、銃も剣もその歳になるまで全く訓練されていないなどまず考えられない。

貴方にしても”神秘”を扱えるが、かつての神代と違い威力も使い勝手も大幅に減じている。

太古、神代の時代には世界には呪術・奇跡・魔術があったというのが現代では神秘は失われた。

ゆえにわざわざ神秘などをつけねば人はかつては当然の魔法すら使えなくなっている。

上位者の力ですら人の鉄火にはもはや敵わなくなりつつあるのだ。

神秘も魔法も純粹な暴力の力として追い求めるのならもはや鉄火よりも劣る代物だというのに、暴力としての魔術を追い求める魔術士など滑稽でしかない。

とはいえ、それはあくまでも元の世界であり未だに魔法が有効なこの奇妙な世界でなら魔術は良い戦術の一つでもある。

銃を撃つと凄まじい轟音とともに脆い藁人形は容易く砕け散り、近くで見ていた冒険者たちも顔を青くする。

「よっしゃ、これでスキルに……つてでない!？」

銃撃関連のスキルはどうやら冒険者カードには登録されていないらしい。

狙って引き金を引くだけの動作がスキルとも思えないので当たり前か。

ならばと貴方は銃をカズマ少年に差し出した。

「えっ? いいんですか?」

貴公もその年ならもう銃を覚えて当然だろう。

カズマ少年が格好をつけて西部劇のガンマンのように撃つと……当然のように衝撃で
手首と肘と肩を骨折した。

のたうち回り、新しい冒険者仲間の治療を施してもらうカズマ少年を貴方は冷ややかな目で見ている。

どうも銃はまだ早かったらしい、と。

結局カズマ少年のスキルポイントでは貴方の剣・銃・そして神秘のどれ一つとして覚えられなかった。

どれも取得のためのスキルポイントが圧倒的に足りなかったらしい……

ところが最後に駄目元で披露した秘儀だけが取得可能らしい。

秘儀 “ 使者の贈り物 ”

悪夢に潜み、狩人を慕う使者たちの、怪しげな贈り物

使用者は黒い悪夢の霧に包まれ、直後使者の姿を得る

それは児童幻想の類であり、大きな行動はその幻想を破ってしまう

ゆっくりと移動するくらいがせいぜいだろう

カズマ少年はなぜかそのスキルを取得した。

：正直使い道がない花鳥風月並みの宴会芸だと思っただが？

「いや、これ結構使えますよ！

だつてほら、待ち伏せや偵察時の隠密と組み合わせればいいんですから」

カズマ少年によるとこのスキルはもともと盗賊系の彼のスキルビルドを一層強化するらしい。

なるほど、隠れた場所からの奇襲やステイルで敵を殺そうというのか。

そう考えれば非常に有益だとも言える。

その後、新生パーティーとともに出発したカズマ少年は新しいメンバーとも意気投合し

泣いて謝ってきたチンピラ冒険者とのメンバー再変更を渋々承諾したという。

なんだかんだで面倒見の良い少年だと思った。

第25話

冬はその寒さを増している。

そして紅魔の娘　ゆんゆんは相変わらずぼっちソロクエストを受注して帰ってきた。

だがクエストではともかく今の貴方の家で居候になっている彼女は人形の相手をする使命がある。

貴方は彼女を愛おしく思った、少なくとも使者たちと同じくらいには。

貴方は燃え盛る暖炉の火の前で童話を彼女に語って聞かせてあげるのが。

将来、彼女が赤子を持った時には語り聞かせられるように。

そういえばあれからカズマ少年たちはどうしたのだろうか？

結局、カズマ少年とその少女達三人はパーティーを元に戻した。

いわゆる腐れ縁という者だろうか？

この寒空の下、凍え死んでいなければいいが。

冬に銀行口座に蓄えがないというのは致命的である。

この地方はヤーナムに比べれば暖かいが、それでもただの人間である彼らには応えら
だろ。

貴方の装束は黒一色だ、連中は常に暗がり、に潜み貴方も同様だからである。

この世界の基準ではハンターや戦士というよりは暗殺者や盗賊に近い、とはいえご同業の連中の卑劣さ外道さを考えればこの指摘も間違つてはいないのだが。

だがゆんゆんまでもが昏い夜の色に染まる必要はない、華麗なマリアの衣装が似合うだろう。

：

昔々、冬に少女がマッチを街頭で売っていました。

でも誰も見向きもしません。

窓には鉄格子、ドアは門がかかり窓から獣避けの香が匂つてきます。

少女は寒さのあまり売り物のマッチで暖を取ろうとします。

一本すると、火の中に光景が見えます。

獣です、礫になった獣が焼かれる光景です。

なんて昏くて穢れていてそれでいて暖かそうなんでしょう。

でもマッチが消えると赤い火も消え、後には燃えかすの灰が残りました。

そうさね、いつか火は消え闇だけが残るだろう。

深淵に飲み込まれることを恐れた少女はまた火を求めてマッチを擦ります。

ふん哀れだな、まるで火に向かう蛾のような少女だ。
シュツ！

マッチが燃えるとまたも火の中に光景が見えます。

血と臓物にまみれた狩人の背中が見えます。

甘くてクラクラする血の匂いが漂ってきそうです。

少女はなんて匂い立つんだろうと思いました。

狩人が持つ鉈から漂う匂いに餌付きます。

少女は未だ闇を恐れていても、我ら食餌の時なのです。

少女がマッチをありつたけ擦ると大きな火の中に少女を可愛がってくれた唯一の人

であるおばあさんが見えます。

「お願い、わたしを連れてって！ マッチが燃えつきたら、おばあちゃんも行ってしま

う。 おばあちゃんも消えてしまう！」

すると炎の中に現れたおばあさんは無表情に少女を突き放します。

「だから奴らに呪いの声を……」

深淵へと落ちていった少女が何を見たのかはわかりません。

夜がふける頃、もうマッチ売りの少女はいませんでした。

からカラカラと鉄と地面が擦れる音が響くだけ。

そこには殺された狩人の鉈と銃を拾い上げ、今や血と炎に酔う獣狩りの狩人がいるのみです。

「お婆あちゃん！どこもかしこも獣だらけなんだね！」

少女は火口にマツチで点火し、獣も人も等しく狩っていきます。

人は皆、獣。

今日もまたゴミのように見捨てられた者が獣となり、人に襲い掛かります。

だから少女もまた獣狩りなのです。

怪物と戦うものは自らも怪物とならぬよう心せよ。

汝が深淵を覗きこむとき、深淵もまた汝を覗き返しているのだから。

めでたしめでたし

貴方はゆんゆんに子供向けの童話を暖炉の前で読み聞かせてあげた。

安楽椅子に座った彼女は

だから貴方は彼女を労ってこう声をかけてあげるのだ。

「蒼ざめた血を求めよ、狩を全うするために」

それは貴方の原点でもあり、そしてゆんゆんが求めるものでもある。

その後、貴方は彼ら一行が幽霊屋敷の幽霊人形退治のクエストを受注したことに多いに興味を持った…

動く幽霊人形、だが人形は動くものだ。
常識であろうに。

貴方はこの幽霊人形騒動にぜひとも同行したいと依頼主の大家に詰め寄った。

「ええ……あ……高名な狩人さまのお手を煩わせるほどではありませんよ。」

それに屋敷を消し飛ばされても困りますので……」

なんとということだろうか、貴方は目に見えるものを全て破壊し尽くす獣のような人間だという噂を建てられてしまっていた。

実に遺憾である。

もつとも幽霊が退治できるか？という大家の問いに対し貴方は自信を持ってYesと答えた。

そもそも幽霊などカインハーストの城では飽きるほど殺してきた。

たかが動く程度の人形などカインハーストの嘆きの侍女達に比べれば家の装飾に使用えそうなほど可愛らしい。

むしろヤーナム基準では優良物件なのでは？

死人を殺すというのも奇妙な表現だがとにかくそういうものなので受け入れてほしい。

貴方は大家さんに呪われた大量虐殺事件のあった城の幽霊問題を全て解決したと伝

えて、自信があると言った。

…なぜか大家は渋ったが…

「わ、わかりました。ですがこの件は既にカズマさんのパーティーに依頼していますから貴方はあくまでも見学ということですからね？」

「アークプリーストさんに浄化してもらうだけにしてくださいよ？」

大家はなぜか涙目だった。

第26話

貴方が人形屋敷の前にやってくると

既に屋敷の門の前にはカズマパーティーがやってきていた。

穢れた血の色の月が夜に上がり、館で人形狩りの夜が始まるだろう…

「な…なあ…なんかメチャクチャ不気味なんだけど…」

昼間のはずだというのに既に空には雲がかかり薄暗い。

カズマ少年が赤い月のもとで紅く染まった元貴族の屋敷の門の前で入ることに二の足を踏む。

貴方は少年に変わって扉を開けようかと提案した。

「お、おお。あ、お願いします」

ギイ…ギヤリギヤリギヤリいう錆びた鉄の擦れる重々しい音とともに門が開かれる。敷地に足を踏み入れるとあの懐かしい感覚が蘇る。

脳が震えるあの感覚だ。

啓蒙十1

BGM ヤハグル

Maledictus

Donum Libas

Infirmum

Maledictus Bestia

Pater dousi donus

Infirmum

Argentunum Aqua in tenebris

ああ、歌が聞こえる：貴方を呼ぶ歌が

上位者を呼ぶ声が、脳に瞳を求める者達の祈りが：

再び赤子の泣く声が辺りに響く、おぎやあおぎやあおgyaaaaaa

あの泣き声を止めてくれ、さもなば皆獣になる

貴方は記憶を手繰った、だがなぜだろうか？

貴方の知識も記憶も全てはあのヨセフカの診療所から始まっている。

あの老人は何者だったのか？貴方はなぜ血の医療を受けたのか？

以前の貴方がどんな人間だったか？知るものはいない。

社会常識や世界については新聞や本で知った

イギリスの首都はロンドン、元首はヴィクトリア女王

それくらいだ。

問題の幽霊が出ると言う元貴族の屋敷は、アクセルの街中心部から外れた郊外に建っていた。

墓地を隔てているとはいえ案外貴方の家からは近かったようだ。

幽霊屋敷の悪評が付いているとは言え、元貴族の別荘は貴方の家よりも大きい。

とはいえしつとりと、それでいてがっしりとした貴方の狩人の隠れ家調と比べるとどこことなく軽薄な雰囲気がある。

不動産屋の話では部屋数が少ないとの事だったが、今のパーティーメンバー全員を住まわせても尚部屋は余る規模であろう。

貴方は今回の依頼ではカズマ少年達の邪魔をしないように大家から念には念を入れて注意された。

聞けば、あのアークプリーストの腕前を見込んでの依頼ゆえ、貴方は人形の件でも武力行使禁止になってしまった。

屋敷への少年の仲間達の評価は上々である。

自称女神は自らに相応しいと豪語、普段は冷静な魔法使いの少女も今日ばかりは年相応に興奮で頬を赤らめていた。

彼らは瀆神的な何かを秘めた館へと入って行く……

それが惨劇の始まりだとも知らずに……

「勝手に不吉なナレーションつけないでくださいよ！」

カズマ少年のツツコミが入った。

「とりあえず、中の様子を見てみようぜ。」

幽霊は夜になってからだろうし、もし出て来てもアクアに任せれば大丈夫だろうから
な」

貴方はその点にそこはかとなく不安を感じた。

ヤーナムで大丈夫は、まず間違いなく誰か死ぬ前兆である。

大丈夫じゃないだと、たくさん死ぬ（断言

そして案の定あの自称女神は玄関先で霊視をずつとしている。

貴方の幽霊への対処とはまるで違う……死んでいても殺してやるが貴方の信条だ。

彼らは館に入ると一命を除いては掃除を始めた。

なるほど、だが確かに掃除とは重要だろう。

ヤーナムはどこもかしこも戦場跡のように荒れ放題だったが、ここには人の営みがある。
る。

だが残念ながら貴方には興味がない、住む気など無い。

とはいえ彼らに頼られて人の営みを行うのも悪くは無いだらう。
「ああ、狩人どの。すまないが、この台所の掃除を頼まれてはくれまいか？」

「どうにも私は不器用なところがあつてな」

なるほど、彼女はまるで血族狩りに赴くあの青年のように掃除をしようとはした。だが技量が足りないのか肝心の台所はあちこちに割れた陶器やガラスの破片が落ちてゐる。

もちろん、お互いこの館を清潔にいたしましょう：

貴方は鉈の代わりに箒を、拳銃の代わりにモップを持つた。

その間にも少女騎士は色々世間話をしてくる。

出身は？とかウイズさんとはうまくいつているのかとかだ。

貴方は男性だ、ゆえに女性関連に関しては全くわからない。

大体が娼婦を呼びつゝえて血を集るような男なのだ。

「……まで鈍感だとは……」

何がだろうか？

貴方はそういうえばカズマ少年についても知らなかつた。

「ああ、カズマか？不思議なやつでな。

出身はニホンとかいう国らしいんだが私も聞いたことはない」

ニホン…貴方はいつだったか聞いたことがあるような気がする
「へえ、貴方は知っているのか。どんなところなんだ？」

とはいえ貴方もよくは知らない。

高名な芸術家がニホンの美術品に感銘を受けて真似をしたとか
作品にその国の印象を取り込んだとか程度だ。

「へえ…芸術の国か。な、なんとというか意外だな。

カズマは到底そういう風には見えないが…」

確かに彼はどう見ても芸術家といった風ではないな。

後はサムライとはいう騎士階級が有名だったり、ニンジャとかいうマスターシーフの
ようなのとかゲイシヤが究極の暗殺者だとか…

そういうえば貴方が知る狩人にヤマムラという名前の者がいたがカズマとどこか名前
のつけ方が似ている気がする。

彼もサムライかニンジャなのだとしたら、ニホンという国でも獣の病が蔓延している
のだろう。

カズマ少年はとても獣を狩れるような体躯ではなかったが…

「…な、なんとというかカズマのイメージとは全然噛み合わないな」

芸術家、騎士、暗殺者、狩人。

ニホンとは貴方のような穢れた狩人と獣が蠢きながらずっと寒くて、暗くて、とつても優しい画…。

きつといつか、誰かの居場所になるような絵が描かれる絵の中の国というイメージになりつつある。

「そ、そうだな。カズマもああ見えて意外と苦勞していたんだろうか？」

だが貴方の中のカズマ少年のイメージは狡つからく難題を躲して成果だけ手に入れるというパッチのような人間であるし彼女達もそのようだ。

とはいえ、奴ほどのクズではないし悪党でもない。

「ふふっ、どこの世界にもはぐれものはいるということか。

ありがとう、なぜだが安心したよ」

それは彼女の生まれも関係しているのだろうか。

貴方が見るところ、この少女騎士にはカインハーストの騎士とは違った騎士の様相が見える。

下僕を騎士と言い換えただけの騎士ではない。

貴方は正直なところ彼女の騎士としてのあり方に憧憬すら覚える。

金銀の刺繍が施された華麗な狩装束に身を包んでも所詮は狩人以上にはなれなかった彼らや貴方とは違う人種の彼女だ。

これでこうやってまともに仕事をしていたり、色事を交えなければ実には有能なクルセイダーに見えるのだから不思議だ。

淫乱なのだろうか？人は見かけによらぬもの。

豊かな乳房を見せつける娼婦のような格好を恥じも外聞もなくしているルナ嬢やゆんゆんとは違つて肌を隠しているが：

とはいえ思春期の少女に面と向かつてそれを指摘するほど野暮ではない。

この世界の女性冒険者やそれに類する者は男性との性交渉を積極的に求め
できるだけ強い雄の子孫を求めららしい。

この国の王家もまたある意味では血の医療に近しい。

冒流的なまぐわいによつて王家の身体能力を高いものとしてしていると聞く。

貴方は血によつて人となり、人を超え、また人を失つた。

彼女らもまた血のまぐわいによつて赤子を得ることを望む、それは穢れであり生命の本質そのものだ。

第27話

貴方は眠りについた。

本来なら、狩人にもはや夜が訪れることはあつても眠りは訪れぬ。

「お待ちしておりました」

唐突に貴方が夢を見ると、かつての狩人の夢によく似た空間にいた。だがわかる、ここも夢の中だと。

茶会の椅子に貴方はいつの間にか座っており、目の前には輝くばかりの美貌を持った三人の女性が茶会の席に座っている。

傍らには人形が立ち、貴方達四人に紅茶を淹れている。

貴方は知らないが、知っている。

この三人は貴方の娘達だと。

なるほど、人間でありながら上位者であるこの三人にとつては夢の世界ならば過去と現在、未来を同時に存在させる程度はたやすいことなのだろう。

月を思わせる白さは貴方の血族の証か。

人形の子 フリーデー

ウイズの娘 ユリア

ゆんゆんの娘 リリアーネ

彼女達の血の香りはなるほど母親に実によく似ている。

実に芳しく甘い香りがするじゃないか。

そして彼女達が求めるものはまさに蒼ざめた貴方の血だ。

「初めまして…父上。何故貴方をお呼びしたかはもうお分かりですね…」

「ああ、父上。相変わらず甘い香りの父上。

貴方の血を受け継いだことを感謝いたします」

「ゆえに父上、今一度、今の貴方と血を私たちにお授けください。

聖杯が求めるままに、私たちの血を更に濃いものとしてください」

愛しい娘よ、娘たちよ。

私を殺すのか、あるいは私とまぐわい子を成したいのか。

あるいはその両方か。

驚くことはない、貴方にしても聖杯にそれを求め続けていたではないか。

愛すること、殺すこと。

どちらも同じ。

三人の姉妹の包圍陣はまさに鉄壁であった。

貴方は百戦錬磨の狩人だ、そして彼女達も貴方の経験を踏襲し戦術に反映させている。

驚くことではない、貴方の戦術は我流であり荒削りだったが

未来の貴方は娘達のために自らの経験を体系化し

効率的で合理的、一切の無駄を省いた狩の技術として貴方の娘達に継承した。

マリアの遺志を持つ人形

天才アークウイザードのウイズ

紅魔族族長の娘 ゆんゆん

考えてみれば母親となった三人は貴方とは違う天才であった。

天才の血筋に凡人が磨いた戦術を組み合わせるとこうなるのかという良い例である。

フリーデは貴方と人形の間生まれし娘だ。

ゲールマンの鎌を巧みに扱い短銃から強力な銃弾を放ってくる。

単純な身体能力で見ればあのゲールマンすら越えるだろう。

それでいて戦術はゲールマンの完成されたそれを堅実に踏襲し、基礎に忠実だ。

つまり付け入る隙が極めて少ない。

貴方は回避機動を取るが一步ごとに追い詰められていく。

ユリアは刀と魔法と銃を使いながら貴方を追い詰めていく。

貴方はその詰めを回避するために少しづつ傷ついていく。

体力とスタミナを犠牲にしながら致命傷を回避していくのだ。

ウイズのアークウィザードの遠距離魔法と狩人の戦術の融合がこれほどまでに厄介だったとは思ってもいなかった。

言つて見れば機動性の高いガトリング砲のようなものだ。

リリアーネはゆんゆんの娘。

高い魔力で武器を強化してくる最も貴方のスタイルに近い狩だ。

最も基礎の狩であり、ゆえに非常に危険だ。

貴方が少しでも隙を見せれば内臓を抉ってくるだろう。

全ての攻撃・フェイントは即死攻撃以外を導くための前座でしかない。

一撃必殺。

そして銃弾が炸裂するたびにどこかが抉られる。

銃弾に炸裂する魔法術式を埋め込んでいるらしい。

あくまでも空間の攻撃で決して避けられない。

貴方は三人の娘達と戦い、そして全身全霊を尽くして殺された。

三人の刃物が貴方の身体を貫き、臓物をえぐり取る。

「父様、ありがとうございます。」

また会いましょう」

貴方が殺される様を人形は館から見ていた。

「ああ、狩人様。貴方もまた、夢に囚われるのですね」

：

貴方は夢の中で死んでカズマ少年の屋敷の中で再び目覚めた：

素晴らしい夢だった、貴方の娘達は素晴らしい狩人達だった。

これこそ彼女達と子作りに励む強い理由になるだろう。

貴方はカズマ少年にもぜひ子作りを勧めようと思った。

人の中の淀みを根絶するのではない、より純化し

清いものへと昇華するのだから。

第28話

貴方は死んで目覚めた。

死と目覚めは非常に似通っている。

肉体の死と夢での死は時に相反し、時に同一のものとなるのだ。

さて、貴方はカズマ少年達が除霊に来ている屋敷の中で目覚めた。

一室を借りて貴方は人形狩りに来たのだ。

といつても夜にならなければ動き出さない程の低級な人形であり、貴方の愛しい人形

とはエブリエタースと虫程の違いがある。

貴方の人形への愛はゲールマンのマリアへの執着にも似たものである。

ゲールマンはマリアを愛していたのだろうか？

抱きたかったのだろうか？

いずれにしろ失って後悔するくらいなら抱くべきだったのだ。

「あああああああー!!」

どこからか啓蒙皆無の自称女神の叫び声が聞こえる。

獣でも出たのだろうか？あるいは恐ろしい獣や聖職者の獣にでもなったのだろうか

?

まあ良い。

『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！ 『花鳥風月』！ 『ゴッドブロー』！ 『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！ 『ターンアンデッド』！』

騒がしい音が屋敷の中から聞こえてくる。

すると貴方は向こうからいつかの少女騎士ダクネスが駆けてくるのが見えた。

爛れた情欲さえ発していなければカズマパーティの中では最も有能なメンバーなのだろうが。

貴方は何があつたのかをダクネスに聞いた。

「ああ、アクアが秘蔵の酒を飲まれたとかで幽霊退治に精を出していてな。

申し訳ないが私はこれからクルセイダーとしてアクアの手伝いをするんだ。

本職には及ばないが私も聖騎士だからな。

よかつたら貴方も手伝ってはくれないだろうか？」

貴方は屋敷を火に包んだり廃墟にする事なく手伝うようにウイズから言われている。

尤も浄化魔法が使えない以上はアクアに頼りきりになると思うのだが。

それにしてもカズマ少年とめぐみんは何をしているのだろうか。

いつのまにか獣になっていたので通りがかりに殺しました、というギルバートみたいなことになっていなければならないのだが。

「カズマは自分は今回は役に立たないからと寝てるんだ。

全く！彼も貴方を少しは見習ってほしいものだが！」

貴方はいつもの通りに狩衣装を来ている。

眠る時もだ。

対して彼らはそれぞれ寝巻を来ている。

狂気と殺戮、絶望と死体の獣狩りの夜を過ごした貴方と彼らとの価値観の違いは果てしなく大きいようだ。

すると肩で息をしながら疲れたのか息を上げながら自称女神のアクアが戻って来た。

あれだけのペースで魔法を連発していたのだからさぞやスタミナと水銀弾を消費したのだろう。

「ゼーゼーゼーっ！はー。

キリがないわね、あら？ 応援は二人だけ？

カズマとちびっこはどうしたのよ？」

「ああ、カズマとめぐみんなら寝てるんだ。

最も除霊に対応したスキルを持っていない彼らはいてもいなくても同じだと思うが」

「全く！めぐみんはともかくカズマさんはこの人を見習いなさいよ！

仮にも男の子ともあろう者がこの女神アクアを働かせて自分は寝てるんだなんて不敬よ！不敬！

ちよつとは信徒としての自覚を持ちなさいよね！

こうなつたら屋敷中の悪霊をかたづけしから除霊するのを手伝ってもらいます！」

とはいえ貴方も除霊に必要な能力があるかと言われれば全くない。

呪詛溜まり、怨霊の乱舞などヤーナムの神秘の力はあるが事態を致命的に悪化させせうな能力ばかりだ。

そこで貴方は二人から離れて屋敷をチェックすると伝えた。

二手に分かれれば悪霊がいる場所を効率的にチェックし負担も少しは減るだろう。

もとより機動性重視の貴方が彼女達と組んでも狭い屋敷の中では動き回る場所が取れない。

「それは構わないが…大丈夫なのか？」

「ダクネス、心配しすぎよ。魔王軍幹部だつてチャチャつとやつつけちやうんだからダイジョーブよダイジョーブ！

ふふん、といつても除霊に関してはアクア様に譲ると認めたわね？

いいのよ？このアクア様を崇めてアクシズ教に入信してもいいのよ？」

それは遠慮しよう。

連盟で間に合っている。

貴方は借りていた部屋から出て人形の置かれていた部屋に歩いていった。すると突然通路の向こう側から壺が飛んで来て聖騎士の顔面に直撃した。

「はぁん！な、なんとという雑な扱い！」

わ、私をまと扱いしてもてあそぶとは！」

なぜか相変わらず攻撃を食らって喜んでいる。

「な！ポルターガイスト!?!おのれ小癪なあ！」

このアクア様の力で浄化してやるわよ！」

彼女達は壺が飛んで来た方向に駆けて行ってしまった。

…貴方は指をパチンと鳴らすと、使者達が床から顔を出した。貴方はヒビが入ったごつい壺を彼らに手渡した。

なかなか分厚い、あの少女は顔に食らっていたが大丈夫だろうか？

ヤーナムに来たばかりの貴方では普通に大怪我しそうな気がする。

使者たちはダクネスの顔に直撃したしやれた壺を受け取ると被って消えた。

使者たちはお洒落に興味があるらしい、本人達が気に入っているのならそれで良いではないか。

:

人形が動くと言うのなら、貴方の人形の良い友達になってくれるかもしれないのだ。すると通路の向こう側から大量の人形たちが物陰に隠れながら貴方を見つめている。

貴方は実に愛らしいではないかと興味を持った。

貴方はこの屋敷のアンティーク人形に乗り移った悪霊達が人形を動かしていると理解した。

全くもってお話にならない。

所詮啓蒙低き幽霊は死んだとしてもその程度の存在だったのか。

人形は命なき人形が自らの意思と高貴な方の遺志によつて生命を形作るゆえに美しく尊いのである。

そこらの縁もゆかりもない幽霊が動かすのではそれはミコラーシユの操り死体と差は無い。

とはいえ人形に宿っているのはもっぱら幼子の霊のようだ。

なるほど、それで遊びたがっていたのだろう。

だが貴方が近づくと人形達はビクツと恐れをなしたように貴方を遠巻きにして更に貴方が近づくと全力で逃げていった。

どうやら貴方は人形の霊達に恐れられたらしい。

貴方の啓蒙高き脳は霊を命ある者として、夢を現実にすることを当然とする。

ゆえに死んだために夢の世界に近くなつた幽霊達は貴方から冒瀆的殺戮者の匂いを感じ取り貴方を恐れ、逃げていったのだらう。

生きているのなら神様だつて殺してみせるとはよく言う。

だが死んでいても殺す事は啓蒙さえあれば誰にでも出来るのだ。

第29話

あなたは実に幸運でそして正しい。

貴方のような絶望的コミュ障が始まりの町と呼ばれているアクセルで多くの友人知人を作れたのがその良い証拠だろう。

ヤーナムは何もかもが酷かった、もうその一言に尽きる。

何もかもが狂気と絶望の産物の凶器だった。

人間は大抵、もう死んでいるかこれから死ぬかあるいは殺す羽目になるかがオチだった。

死んでいるならまだマシだが間違はなく何かをもうやらかしたか、

これからやらかす連中しかない。

啓蒙が高いと怨霊がそこらじゅうから寄ってくる上にナメクジ頭の脳ぐらいも出てくる、実に気色悪かった。

これに比べれば逃げ出した人形達の霊は啓蒙が全く無くとも動きが見える。

実に面倒だが視界に入っただけで殺意と狂気の波動を叩きつけてくる鬼灯に比べれ

ば家に持って帰って飾ってもいいくらい可愛げがある。

あれは特に酷かった、あまりにも酷いので殺しながら発狂するなんて日常茶飯事だった。

もはや正気と狂気の境目なぞとつくの大昔に捨てた、発狂は狩人の嗜み。

身体から血の槍が飛び出すのは新手の瀉血健康法。

ブラドローの瀉血ダイナミック切腹がマトモに見えてくる、それくらい啓蒙が高くないと悪夢を周回するなんてことはできない。

それくらい言えないともうやっていけなかった。

ギシリギシリと貴方が歩を進めるたびに人形に宿った幽霊たちは右へ左へと逃げ惑う。

貴方の手袋はカインハーストの所蔵する秘宝の一つだ。

遠国の処刑人の手袋

処刑人の家系に代々受け継がれ、夥しい血に塗れたであろうそれは

いまや尽きぬ怨霊の住処であり、血の触媒がそれを召喚する

貴族たちはこれを好み、怨霊の乱舞を愉しんだという

それにしても処刑した人間の怨霊が乱舞する様を見て楽しむとかどういふ神経の持ち主だったんだろうか。

アクセルの町のアルダープなる貴族も悪どいらしいし、きつと処女の生き血を拷問して絞り出して啜る汚物に塗れた冒流的で汚らしいノミのような奴なのだろう。

貴方は頭の中でアルダープという害虫のような貴族を描いた。

なんと穢らわしい虫なのであろうか、虫は潰すに限る。

貴方の手袋に幽霊の彼らを迎え入れようという試みは失敗した。

冒流的、そしてあまりにも悍ましい血と穢れの夥しい怨念の渦は今や悪夢の世界からこの世界へと解き放たれた。

苛烈凄惨な拷問の果てに死してなお囚われる手袋の怨霊たちは単に死ねた恵まれた死者たちを喰らい、貪ろうというのだ。

呪う者、呪う者。我らと共に哭いておくれ

死者の魂を貪る怨霊たちと、暗い魂の血を啜る冒流的殺戮の狩人。

貴方には実にお似合いの手袋であろう。

冒流的な匂いに敏感な人形の幽霊たちは我先にと救いを求めアークプリーストの浄化を拝領しようと逃げていくのだ。

…どうやら貴方は幽霊には好かれない性質のようだ。

あの青髪の聖職者の存在は、なるほど確かに女神なだけはあつてまさに聖杯ともいふべき権能を持っている。

だが貴方だつて聖杯は持っている、冒瀆的にして呪いと果てなく悍ましい腐臭を放つてはいるが根源を孕んだ大聖杯には違いない。

ああ待つておくれ人形達よ、哭いておくれ哭いておくれ。

哀れるなるゴースの老いた赤子の為にも。

呪いと海に底はなくゆえに全てを受け入れよう。

貴方が脳裏に刻む深海のカレル文字は幽霊達を受け入れてくれるだろう。

脳裏に刻んだ海、大量の水は断絶により彼らに安息を与えるだろう。

熱も冷たさも、生も死も。

そして、もちろん。

光も闇も。

どこまでもどこまでも灰色で静かで暗く冷たい優しい忌み人の世界に彼らを誘おう。

そして幽霊達はますますアクアに救いを求めて貴方から決死の覚悟で逃げていった。

もう死んでいる彼らも穢れに呑み込まれるのは御免らしい。

なぜわかつてくれないのだろうか、穢れこそが人の本質……人間性だというのに。

だが人間性を求め、そして同時に拒絶するのもまた人間の本質である。

ならば……寄越せ……お前達の魂を……その暗い魂を……

幽霊達はやはり逃げて行く、なぜなのだろうか。

貴方が幽霊達を追い詰めていったその先ではアークプリーストのアクアが浄化し

ダクネスは幽霊人形に押しつぶされ、カズマとめぐみんはトイレで大騒ぎしていたが貴方の知ったことではない。

貴方は怨念のこもった鉈を持ちながらゆっくりと近づいて行く。

まるで悪魔の生贄だ、無論生贄を捧げる方だが。

すると突然、ひととき大きな少女人形を動かす幽霊が現れて貴方の前に立ちふさがった。

手を広げて貴方の行く手を遮る、『You wanna die soon?』

とは貴方も思わない。そもそももう死んでいる。

少女：ああ成程、貴方が救えなかった後悔・慚愧・無念：

少女とは貴方の僅かに本当にほんの少しだけ残った人間性を刺激する。

例え幽霊でも、貴方は少女は殺せない。

それはきつと貴方が人であり、人を人たらしめる理由でもある。

『いじめちゃ駄目』

成程、貴方のやっていることは幽霊達をいじめることだと：

そう言いたいのだ、彼女は。

貴方は苦笑した、だが理屈はわかる。

旧市街でデユラに警告されたのも今ではわかる。

少女と違つて初見絶殺精神でいきなり重機関銃を雨あられとぶつばなされたのもいい思い出だ。

あれが数少ないマトモな人間との話し合い（殺し合い）なのだから救い難い。

さらに言えばきつかり狩つた、そして聖堂は燃やした。

貴方は我ながら炎と血に酔いすぎているにもほどがある。

反省した貴方は、幽霊の少女に伝えた。

『わかつた。もう止める、君達が良いと思うようにすればいい』と

少女の幽霊はにっこりと微笑んで屋敷の廊下を駆けていった。

そうして幽霊たちは貴方を避けてカズマ少年一行で一晩中遊んだ。

夜が明ける頃には全員がぐったりと疲れていたが、貴方は一人十分な睡眠を取つていた。

これが今回の幽霊屋敷の騒動の顛末である。

そもそも幽霊が屋敷で大騒ぎするようになった原因が何かを貴方は気にしなかつたが……